

植 物 園 北 遺 跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―二四

植物園北遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

植 物 園 北 遺 跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、学校整備計画に伴う植物園北遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

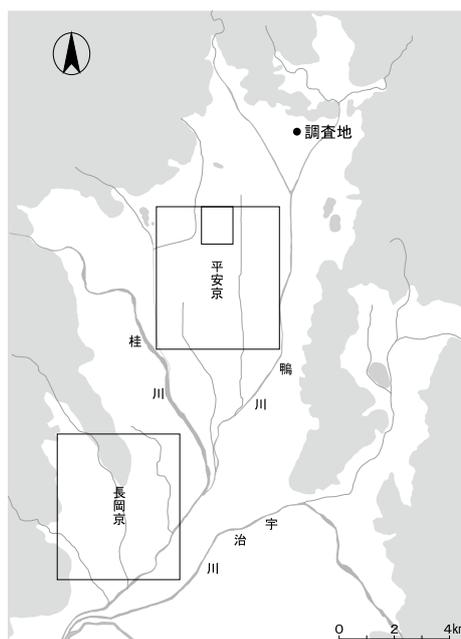
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 植物園北遺跡（文化財保護課番号 10 S 134）
- 2 調査所在地 京都市左京区下鴨南野々神町1番地他
- 3 委 託 者 学校法人ノートルダム女学院 理事長 和田 環
- 4 調査期間 2011年3月22日～2013年3月1日
- 5 調査面積 1,807㎡
- 6 調査担当者 柏田有香・加納敬二・田中利津子・モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西賀茂」「幡枝」「鷹峯」「植物園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。なお、遺構番号の重複を避けるため、遺構番号の千の位に各調査区の番号を付した。また、柱列と掘立柱建物の建物番号は1区からの通し番号とした。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付した。土器類は番号のみとし、石製品には「石」、金属製品には「金」を、それぞれ頭に付した。写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 柏田有香・加納敬二・田中利津子・モンペティ恭代
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	（柏田）	1
2. 位置と環境	（柏田）	4
(1) 遺跡の位置と環境		4
(2) 周辺の調査		4
3. 遺 構		10
(1) 1区の遺構	（モンペティ・柏田）	10
(2) 2区の遺構	（柏田）	20
(3) 3区の遺構	（柏田）	27
(4) 4区の遺構	（加納・柏田）	27
(5) 5区の遺構	（モンペティ・柏田）	33
(6) 6区の遺構	（田中・柏田）	43
4. 遺 物	（柏田）	50
(1) 1区の遺物		50
(2) 2区の遺物		53
(3) 4区の遺物		55
(4) 5区の遺物		58
(5) 6区の遺物		61
5. ま と め	（柏田）	67

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（北西から）
		2	竪穴建物1001（北西から）
図版2	遺構	1	竪穴建物1002（北西から）
		2	竪穴建物1002炉と貯蔵穴（北西から）
		3	竪穴建物1002遺物出土状況（北東から）
図版3	遺構	1	2区東半全景、竪穴建物2010（東から）
		2	竪穴建物2010貯蔵穴土坑2033（北から）
		3	竪穴建物2010床面白色粘土（東から）
図版4	遺構	1	2区西半全景（東から）
		2	竪穴建物2050（西から）

図版 5	遺構	1	竪穴建物 2020 (北東から)
		2	竪穴建物 2020 炭化材出土状況 (東北東から)
		3	3 区全景 (西から)
図版 6	遺構	1	4 区東半全景 (西から)
		2	4 区西半全景 (東から)
図版 7	遺構	1	竪穴建物 4020 (北西から)
		2	竪穴建物 4020 貯蔵穴土坑 4070 土器出土状況 (北東から)
		3	竪穴建物 4010 (北西から)
図版 8	遺構	1	5 - 1 区全景 (北から)
		2	掘立柱建物 2 (南から)
		3	土坑 5111 (北北西から)
図版 9	遺構	1	5 - 3 区全景 (北から)
		2	5 - 3 区南半柱穴群 (西から)
		3	土坑 5106 (北から)
図版 10	遺構	1	竪穴建物 5080 (北西から)
		2	竪穴建物 5080 主柱穴 5178 (北西から)
		3	竪穴建物 5140・5200 (南東から)
図版 11	遺構	1	竪穴建物 5180 (北東から)
		2	竪穴建物 5170 (北から)
		3	竪穴建物 5170 床面土器出土状況 (南東から)
図版 12	遺構	1	6 区全景 (西から)
		2	掘立柱建物 3、竪穴建物 6014 (西から)
図版 13	遺構	1	竪穴建物 6006・6007 (北西から)
		2	竪穴建物 6007 炉土坑 6010・焼土塊 6013 (北西から)
		3	竪穴建物 6004 (北から)
図版 14	遺物	1・2・4 区	出土土器
図版 15	遺物	5・6 区	出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	1 区調査前全景 (西から)	2
図 3	2 区調査前全景 (南東から)	2
図 4	3 区調査前全景 (東から)	2

図5	4区調査前全景（東南東から）	2
図6	5区調査前全景（北東から）	2
図7	6区調査前全景（南西から）	2
図8	2区小学生見学会	2
図9	5区地元住民見学会	2
図10	調査区配置図（1：1,500）	3
図11	主要調査位置図（1：10,000）	5
図12	1区遺構実測図（1：200）	11
図13	柱列1実測図（1：50）	12
図14	掘立柱建物1実測図（1：50）	13
図15	竪穴建物1001実測図（1：50）	14
図16	竪穴建物1001断面図層名	15
図17	竪穴建物1001西側断面図（1：50）	15
図18	竪穴建物1001断面図（1：50）	16
図19	竪穴建物1002実測図（1：50）	17
図20	竪穴建物1002断面図（1：50）	18
図21	土坑1108実測図（1：50）	19
図22	2区遺構平面図（1：200）	20
図23	2区東壁断面図（1：100）	21
図24	竪穴建物2050実測図（1：50）	22
図25	竪穴建物2010実測図（1：50）	23
図26	竪穴建物2020実測図（1：50）	24
図27	竪穴建物2020断面図層名（1：50）	25
図28	竪穴建物2020貼床掘り下げ後平面図（1：50）	26
図29	3区遺構実測図（1：100）	28
図30	4区遺構実測図（1：200）	29
図31	竪穴建物4020実測図（1：50）	30
図32	竪穴建物4020断面図（1：50）	31
図33	竪穴建物4010実測図（1：50）	32
図34	5区遺構平面図（1：200）	34
図35	5-1区東壁断面図（1：100）	35
図36	5-3区南壁・5-4区西壁断面図（1：50）	36
図37	掘立柱建物2実測図（1：50）	37
図38	土坑5086・5111・5106・5130実測図（1：50）	38
図39	竪穴建物5080実測図（1：50）	39

図40	竪穴建物5140・5200実測図（1：50）	40
図41	竪穴建物5170実測図（1：50）	41
図42	竪穴建物5180実測図（1：50）	42
図43	6区遺構平面図（1：100）	44
図44	6区断面図（1：100）	45
図45	掘立柱建物3実測図（1：50）	46
図46	竪穴建物6004実測図（1：50）	47
図47	竪穴建物6014実測図（1：50）	48
図48	竪穴建物6007実測図（1：50）	49
図49	1区出土土器実測図（1：4）	51
図50	1区出土石器実測図（1：4）	52
図51	2区出土土器実測図（1：4）	54
図52	4区出土土器実測図1（1：4）	56
図53	4区出土土器実測図2（1：4）	57
図54	5区出土土器実測図（1：4）	59
図55	5区出土石器、鉞滓実測図（1：4）	60
図56	6区出土土器実測図（1：4）	61
図57	遺構変遷図1（1：2,000）	68
図58	遺構変遷図2（1：2,000）	69

表 目 次

表1	調査区一覧表	3
表2	主要調査一覧表	6
表3	遺構概要表	10
表4	遺物概要表	50
表5	遺物一覧表	63

植物園北遺跡

1. 調査経過

本調査は、ノートルダム女学院北山キャンパス総合整備計画に伴う埋蔵文化財発掘調査である。ノートルダム女学院北山キャンパスは、その全域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「植物園北遺跡」に含まれている。植物園北遺跡は、縄文時代から室町時代までの遺構・遺物が出土する複合遺跡である。特に古墳時代前期については多数の竪穴建物が発見されており、大規模集落遺跡として知られる。1990年度に実施されたノートルダム女子大学（以下「大学」という。）構内での発掘調査（図11・表2-13）においても、多数の竪穴建物が発見されている。

整備に先立ち、キャンパス内において京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、竪穴建物などの遺構が確認されたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所がノートルダム女学院より委託を受け、発掘調査を実施することとなった。調査は、新校舎建築工事の工程に従い、6箇所の調査区に分け、3年の間に断続的に実施した。各調査区の位置については図10に、調査期間と調査面積については表1にまとめた。総

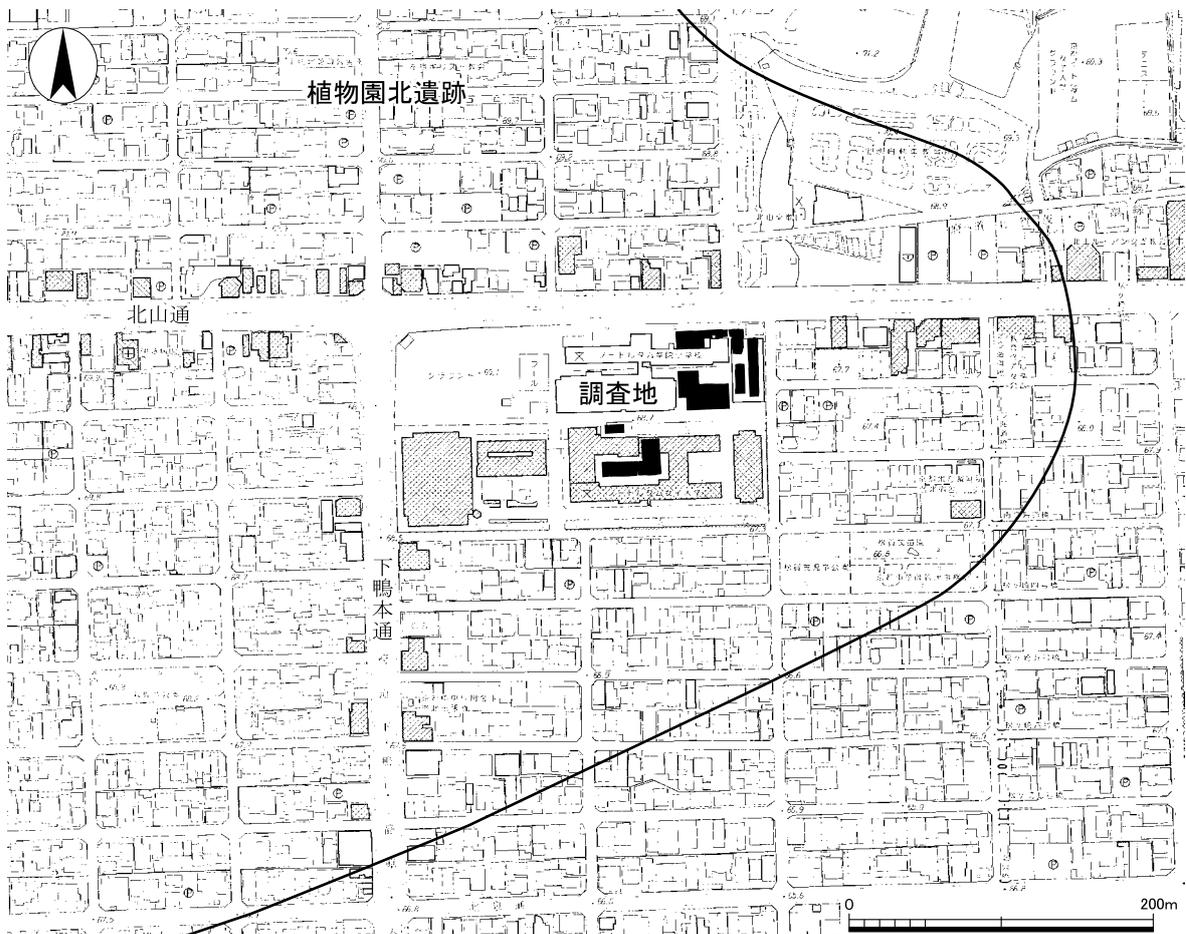


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 1区調査前全景（西から）



図3 2区調査前全景（南東から）



図4 3区調査前全景（東から）



図5 4区調査前全景（東南東から）



図6 5区調査前全景（北東から）



図7 6区調査前全景（南西から）



図8 2区小学生見学会



図9 5区地元住民見学会

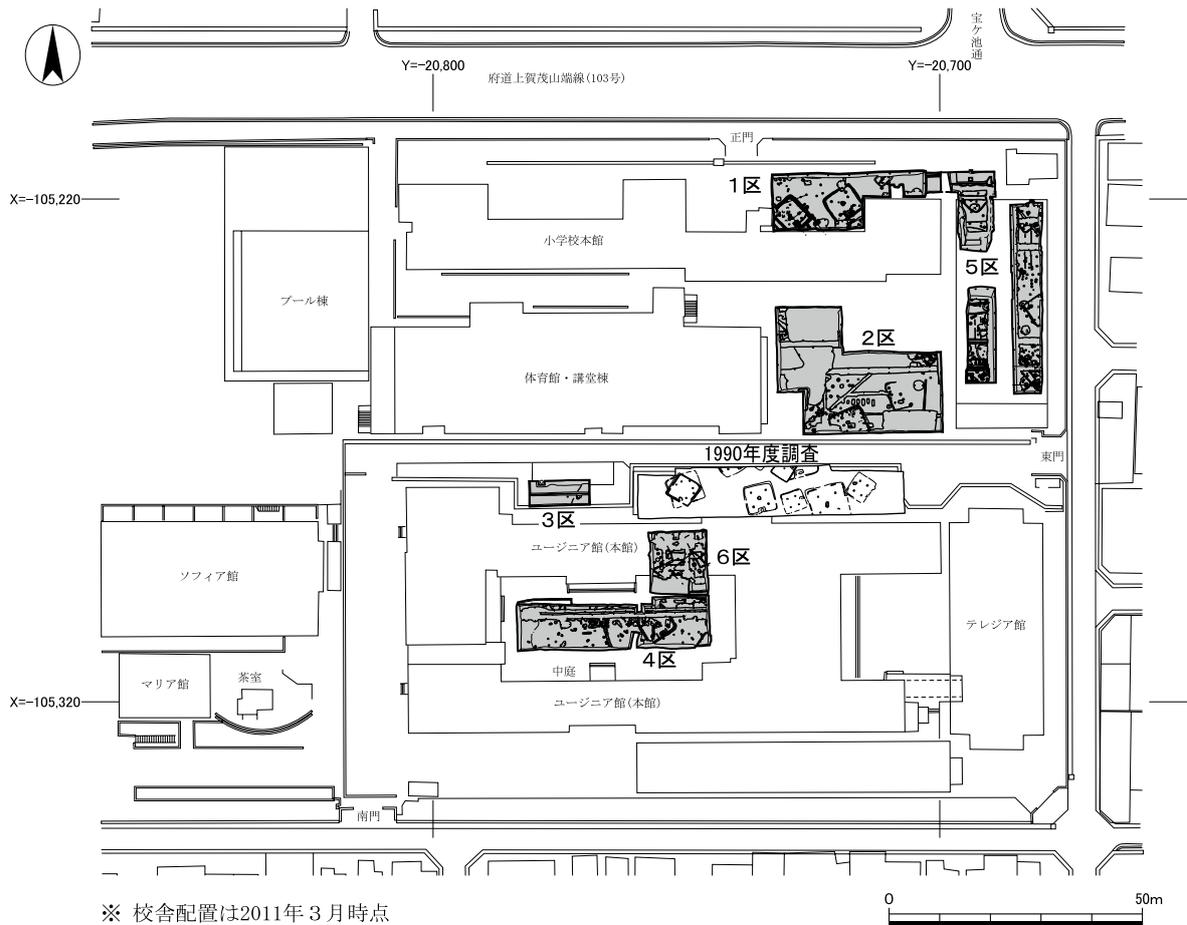


図10 調査区配置図 (1 : 1,500)

表1 調査区一覧表

地区	調査期間	面積	検出遺構数	担当者
1区	2013. 2. 4～3. 1	241㎡	124基	モンペティ恭代
2区	2011. 3. 22～5. 26	593㎡	108基	柏田有香
3区	2011. 5. 24～6. 10	60㎡	3基	柏田有香
4区	2011. 5. 17～7. 14	320㎡	146基	加納敬二・柏田有香
5区	2011. 10. 26～12. 16	454㎡	225基	モンペティ恭代
6区	2012. 8. 13～8. 31	139㎡	23基	田中利津子

調査面積は約1,807㎡、総遺構検出数は624基にのぼる。各調査区とも、図面類の作成、写真撮影などの記録作業を行い調査を終了した。1区および2区調査時には、小学校児童・保護者を対象に見学会を、5区調査時には大学学生・近隣住民・京都市立葵小学校児童を対象に遺跡見学会を実施し成果の公表に努めた(図8・9)。

なお、遺構番号の重複を避けるため、遺構番号の千の位に各調査区の番号を付した。また、柱列と掘立柱建物の建物番号は1区からの通し番号とした。

2. 位置と環境

(1) 遺跡の位置と環境

植物園北遺跡は、京都盆地の平野部北端、賀茂川と高野川が合流する地点の北西方向に位置する。上賀茂神社付近を北西端とし、北区上賀茂の南部地域、北は神宮山・本山・深泥池、西山に接し、東は左京区松ヶ崎の西半部、南は左京区下鴨の北半地域を含み、総面積は140万㎡を超える。上賀茂神社周辺を頂点とし北西から南東に向かって緩やかに傾斜をもつ賀茂川の扇状地上に広がる遺跡である。近隣の遺跡としては北側の丘陵部に旧石器から縄文時代の遺跡が点在する。上賀茂本山遺跡では旧石器時代の木葉形尖頭器が採集され¹⁾、ケシ山遺跡ではナイフ形石器が発見されている²⁾。上賀茂遺跡北側の上賀茂遺跡では縄文時代後期の土器や石鏃が出土している³⁾。古墳時代には、遺跡北側の丘陵部に多くの古墳が築かれる。林山古墳群、西山古墳群、やや北に離れて幡枝古墳群、八幡山古墳群などがある⁴⁾。また、遺跡の北西に接して創建が7世紀後半まで遡るとされる上賀茂神社（賀茂別雷神社）があり、やや離れるが遺跡南東方向には下鴨神社（賀茂御祖神社）が位置する。これらは古代カモ氏との関連が指摘されている⁵⁾。飛鳥時代から平安時代にかけては植物園北遺跡周辺には須恵器窯や炭窯、瓦窯が多数設けられるが、中世以降の遺跡は希薄である。

(2) 周辺の調査（図11、表2）

植物園北遺跡では2012年度までに、発掘調査が26件、試掘調査が61件、立会調査が309件実施されている。すべての発掘調査地点と主要な遺構を検出した試掘・立会調査地点について図11と表2にまとめた。なお、ノートルダム女学院内で実施された試掘・立会調査については、遺構の有無に関わらず地点を掲載した。

縄文時代の遺構は、遺跡南半の調査8・14で晩期の土器棺が見つまっているほか、調査23では中期の土坑が検出されている。また、遺物のみの出土に関しては遺跡全体で散見される。弥生時代の遺構としては、前期の可能性のある柱穴が調査8で見つまっているが、それ以外では前期・中期の遺構・遺物は見つかっていない。また、弥生時代後期とされる竪穴建物や溝・土坑が遺跡全域で見つまっているが、今調査の出土遺物の検討により、これまで弥生時代後期とされてきたものが、古墳時代前期初頭、いわゆる庄内式併行期段階のものである可能性があり、再検討が必要である。

続く古墳時代前期は、この遺跡の盛行期であり、竪穴建物が100棟以上見つまっている。古墳時代前期とされたものは、さらに前期初頭（庄内式併行期）のものと同前期後半（布留式新段階）のものに分けられる。前期初頭の遺構発見地点は遺跡全域に広がるが、特に調査5付近を中心とする遺跡北西部と、調査21・36・13などを含む遺跡南東部に分布の中心がある。前期後半の遺構検出地点は遺跡南東部の前期初頭の遺構発見地点と重なる部分が多い。古墳時代中期の遺構は、調査28で竪穴建物が1棟見つかると、初期須恵器が出土しているが、遺跡全体としては遺構・遺物ともに希薄な時期である。古墳時代後期から飛鳥時代にかけては、竪穴建物や掘立柱建物が調査10・13・

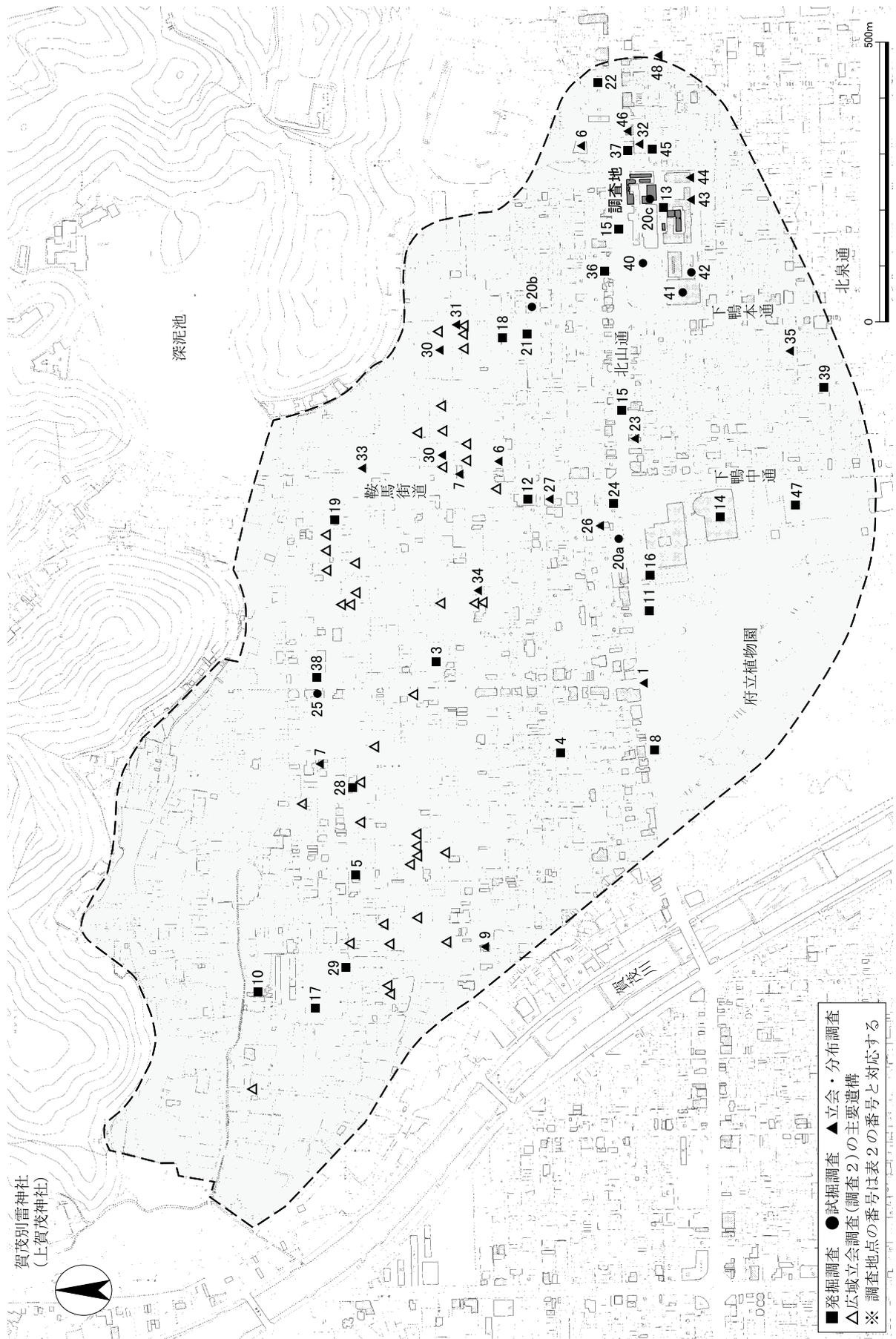


図11 主要調査位置図 (1:10,000)

表2 主要調査一覧表

No.	調査年	方法	所在地	縄文時代	弥生時代	古墳(飛鳥)時代	奈良・平安時代	鎌倉時代以降	文献
1	1975	分布	府立植物園北側、北山通沿い						1
2	1978 ～1981	立会	上賀茂～下鴨		竪穴建物38棟、溝10条、土坑16基(後期～古墳前期)	竪穴建物3棟、溝1条、土坑4基(後期)	土坑、柱穴(平安中期)	土坑、溝(鎌倉)、土坑、溝(室町)	2
3	1982	発掘	上賀茂榊田町15					道路	3
4	1983	発掘	上賀茂桜井町15				土坑3基		4
5	1984	発掘	上賀茂蟬ヶ垣内町47		竪穴建物2棟(後期)	竪穴建物2棟、土坑(前期)、溝(後期)			5
6 7 9	1984 ～1986	立会	松ヶ崎、下鴨、上賀茂 一帯			竪穴住居10棟以上(前期)			6 7 9
8	1986	発掘	上賀茂桜井町～岩ヶ垣内町	甕棺墓(晩期)	柱穴(前期)	落込み(後期)、柱穴(飛鳥～平安中期)	溝、柱穴(平安後期)	暗渠、柱穴	8
10	1989	発掘	上賀茂竹ヶ鼻町4			竪穴建物2棟(前期)、竪穴建物8棟(後期)		井戸、溝、土坑、柱穴	10
11	1990	発掘	下鴨半木町他			溝	溝状遺構(平安中期)	溝、土坑、柱穴	11
12	1990	発掘	上賀茂松本町98			竪穴建物9棟、流路1条、土坑2基(前期)	掘立柱建物4棟(平安後期～鎌倉)	溝、土坑、柱穴	12
13	1990	発掘	下鴨野々上町1			竪穴建物8棟、土坑、柱穴(前期)、竪穴建物3棟(後期)、土坑、柱穴			13
14	1991 ～1992	発掘	下鴨半木町地内	土器棺墓		竪穴建物6棟(古墳末期～奈良)	掘立柱建物16棟、柵列、溝、埋納遺構14基	土坑、柱穴	14
15	1992 ～1993	発掘	上賀茂岩ヶ垣内町～松ヶ崎芝本町地内		竪穴建物4棟(後期)	溝(古墳以前)		柱穴	15
16	1992	発掘	下鴨半木町			溝(前期)、掘立柱建物、柵、土坑、柱穴			16
17	1993	発掘	上賀茂烏帽子ヶ垣内町1		流路(～古墳後期)	竪穴建物3棟(前期)	掘立柱建物(平安)	井戸、土坑、柱穴(中世)、土坑(近世)	17
18	1993	発掘	下鴨北芝町12		竪穴建物1棟、土坑(後期中頃～後半)、竪穴建物2棟(後期末～庄内式初期)、土坑6基(後期～古墳前期)	集石遺構(庄内式中頃)、竪穴建物1棟(庄内式末～布留式初期)、竪穴建物1棟(布留式中頃)	掘立柱建物3棟(平安後期)		18
19	1994	発掘	上賀茂松本町94		流路状遺構(弥生～古墳)		流路状遺構(平安)		19
20a	1994	試掘	上賀茂岩ヶ垣内町93-1・2、94			溝、柱穴群			20
20b	1994	試掘	下鴨南茶ノ木町29			竪穴建物1棟、溝、土坑			20
20c	1994	試掘	下鴨野々神町1-2			土坑、柱穴(飛鳥)			20
21	1995	発掘	下鴨北芝町		竪穴建物4棟、集石遺構2基(終末期～古墳初期)	竪穴建物2棟、土坑6基(前期)			21
22	1995	発掘	松ヶ崎井出ヶ海道町地内				掘立柱建物2棟(奈良～平安前期)		22
23	1995	立会	下鴨前萩町5-1	土坑(中期)	竪穴建物、掘立柱建物(末～古墳初期)				23
24	1997	発掘	上賀茂岩ヶ垣内町109-1				掘立柱建物1棟、柱穴		24
25	1997	試掘	上賀茂向繩手町61他2筆				掘立柱建物1棟		25
26	1997	立会	上賀茂岩ヶ垣内町90			竪穴状遺構、溝状遺構、落込み、柱穴(古墳以降)			26
27	1999	立会	上賀茂岩ヶ垣内町100			竪穴建物2棟(前期)	溝、土坑(平安)		27
28	2000	発掘	上賀茂土門町39		流路(後期～古墳前期)	竪穴建物(前期)、竪穴建物(中期)			28
29	2002	発掘	上賀茂烏帽子ヶ垣内町24			掘立柱建物2棟、自然流路		土坑7基、柱穴4基(室町)	29
30	2002	立会	下鴨水口町			竪穴建物4棟(前期)			30
31	2005	立会	下鴨水口町57-1			竪穴建物、落込み、柱穴			31
32	2006	立会	松ヶ崎芝本町6-1			竪穴建物6棟、柵1条、土坑、柱穴(前期)			32
33	2006	立会	上賀茂池端町41-1			竪穴建物1棟(前期)			33
34	2006	立会	上賀茂松本町53			竪穴建物1棟(前期)			34
35	2006	立会	下鴨神殿町23			竪穴建物1棟(後期)			35

No.	調査年	方法	所在地	縄文時代	弥生時代	古墳(飛鳥)時代	奈良・平安時代	鎌倉時代以降	文献	
36	2007	発掘	下鴨北野々神町20		堅穴建物9棟、土坑7基、柱穴群(後期～古墳前期)	溝(飛鳥)	包含層(平安)		36	
37	2007	発掘	松ヶ崎芝本町4-1			堅穴建物3棟(前期)	堅穴建物1棟(奈良後半)		37	
38	2007	発掘	上賀茂豊田町26、36				溝、土坑(奈良)、掘立柱建物3棟、礫敷、溝、土坑、柱列(平安)		38	
39	2010～2011	発掘	下鴨北園町5・6			堅穴建物2棟(飛鳥)、掘立柱建物1棟(飛鳥)、土坑2基(飛鳥)			39	
40	2003	試掘	下鴨南野々神町1	顕著な遺構・遺物なし						40
41	1992	試掘	下鴨南野々神町1	顕著な遺構・遺物なし						41
42	2002	試掘	下鴨南野々神町1	顕著な遺構・遺物なし						42
43	2010	立会	下鴨南野々神町1			堅穴建物2棟(前期)、堅穴建物1棟(後期)	堅穴建物1棟(奈良)		43	
44	2011	立会	下鴨南野々神町1			堅穴建物1棟(前期)			44	
45	2011	発掘	松ヶ崎芝本町13番、13番1			堅穴建物4棟(前期)			45	
46	2012	立会	松ヶ崎芝本町4-4、4-5、4-6			堅穴建物2棟(前期)、土坑、溝(前期)			46	
47	2011～2012	発掘	下鴨半木町			堅穴建物1棟(後期)	堅穴建物9棟、掘立柱建物27棟、柱列、土坑	自然流路、掘立柱建物	47	
48	2012	試掘	松ヶ崎今海道町9他			堅穴建物1棟(前期)			48	

23・39などで見つかっている。奈良時代から平安時代前期は、この遺跡のもう一つの盛行情である。この時期の遺構の検出は、調査14・22・37・43・47など遺跡南東部に集中する。特に調査14では掘立柱建物が16棟見つかっている。さらにその南側で実施された調査47でも掘立柱建物が27棟見つかると、うち1棟は三面庇をもつもので、有力集団の居住域であった可能性がある。平安時代中期以降も江戸時代に至るまで各時期の掘立柱建物や溝などが遺跡内で散見されるが、現状では大きなまとまりは捉えられない。

ノートルダム女学院北山キャンパス内の調査に限ってみれば、今回の調査を含め、調査13・43・44など敷地東半の調査では多数の堅穴建物が見つかっているものの、調査40～42の敷地西半の調査では顕著な遺構が見つかっていない。この要因については、まとめて考察を加えたい。

註

- 1) 『京都の歴史』第1巻 平安の新京 学芸書林 1970年
- 2) 註1に同じ
- 3) 坂東善平「京都市上賀茂縄文遺跡」『古代学研究』第41号 1965年
- 4) 『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市文化市民局 2007年
- 5) 註1に同じ

文献一覧(表2の文献番号と一致)

- 1 『平安京関係遺跡発掘調査概報』-京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975年
- 2 「植物園北遺跡」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 3 家崎孝治・ト田健司『植物園北遺跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年

- 4 久世康博「植物園北遺跡（2）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 5 辻 裕司・木下保明『植物園北遺跡発掘調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 6 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1984年
- 7 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1985年
- 8 小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 9 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1986年
- 10 高正 龍『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 11 長戸満男・小森俊寛「植物園北遺跡2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 12 高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- 13 長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告－植物園北遺跡－』ノートルダム女子大学 1991年
- 14 久世康博「植物園北遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 15 高橋 潔・高正 龍「植物園北遺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 16 竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- 17 久世康博・津々池惣一「植物園北遺跡1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 18 岸岡貴英・長友朋子・杉本厚典「植物園北遺跡第13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第58冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- 19 高橋 潔「植物園北遺跡（第14次調査）」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1994年
- 20 馬瀬智光「植物園北遺跡 No.63, No.64, No.65」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1994年
- 21 石尾政信・杉本厚典「植物園北遺跡第16次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- 22 久世康博「植物園北遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 23 高橋 潔「植物園北遺跡（96RH224）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1996年
- 24 百瀬正恒「植物園北遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 25 調査一覧表『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 26 近藤章子「植物園北遺跡（97RH202）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1997年

- 27 吉本健吾・竜子正彦「植物園北遺跡（99RH18）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局1999年
- 28 近藤章子・菅田 薫「植物園北遺跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 29 鈴木廣司・津々池惣一「植物園北遺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002 - 14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 30 堀内寛昭「植物園北遺跡（02RH51・53）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 31 堀内寛昭「植物園北遺跡（05RH276）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 32 吉崎 伸「植物園北遺跡（06RH234）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 33 吉本健吾「植物園北遺跡（06RH253）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 34 吉本健吾「植物園北遺跡（06RH313）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 35 吉本健吾「植物園北遺跡（06RH322）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 36 平田 泰『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007 - 1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 37 山本雅和「植物園北遺跡1」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 38 柏田有香「植物園北遺跡2」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 39 津々池惣一「植物園北遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 40 「植物園北遺跡 No.11」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 41 「植物園北遺跡 No.43」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 42 「植物園北遺跡 No.15」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 43 吉本健吾「植物園北遺跡（10RH291）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 44 吉本健吾「植物園北遺跡（11RH256）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 45 吉崎 伸「植物園北遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 46 辻 裕司・田中利津子「植物園北遺跡（12RH260）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 47 「植物園北遺跡 現地説明会資料」京都府埋蔵文化財調査研究センター説明会資料12-8 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013年2月11日
- 48 鈴木久史「植物園北遺跡 No.80」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年

3. 遺 構

(1) 1区の遺構

1) 基本層序 (図12)

調査地は小学校北庭の跡地で、現地表面の標高は68.3～68.5mでほぼ平坦である。上から0.2～0.8mまでが現代盛土層(図12-1～3層)、その下に中世から近代の耕作土層が0.4～0.5m堆積する(4～9層)。さらにその下に土壌化した遺物包含層が0.1～0.2m堆積し(10層)、それらを除去するとにぶい黄褐色砂泥の基盤層となる(17層)。基盤層上面の標高は調査区東端で67.4m、西端では67.8mで東から西に向かって高くなる。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

2) 遺構 (図12、図版1)

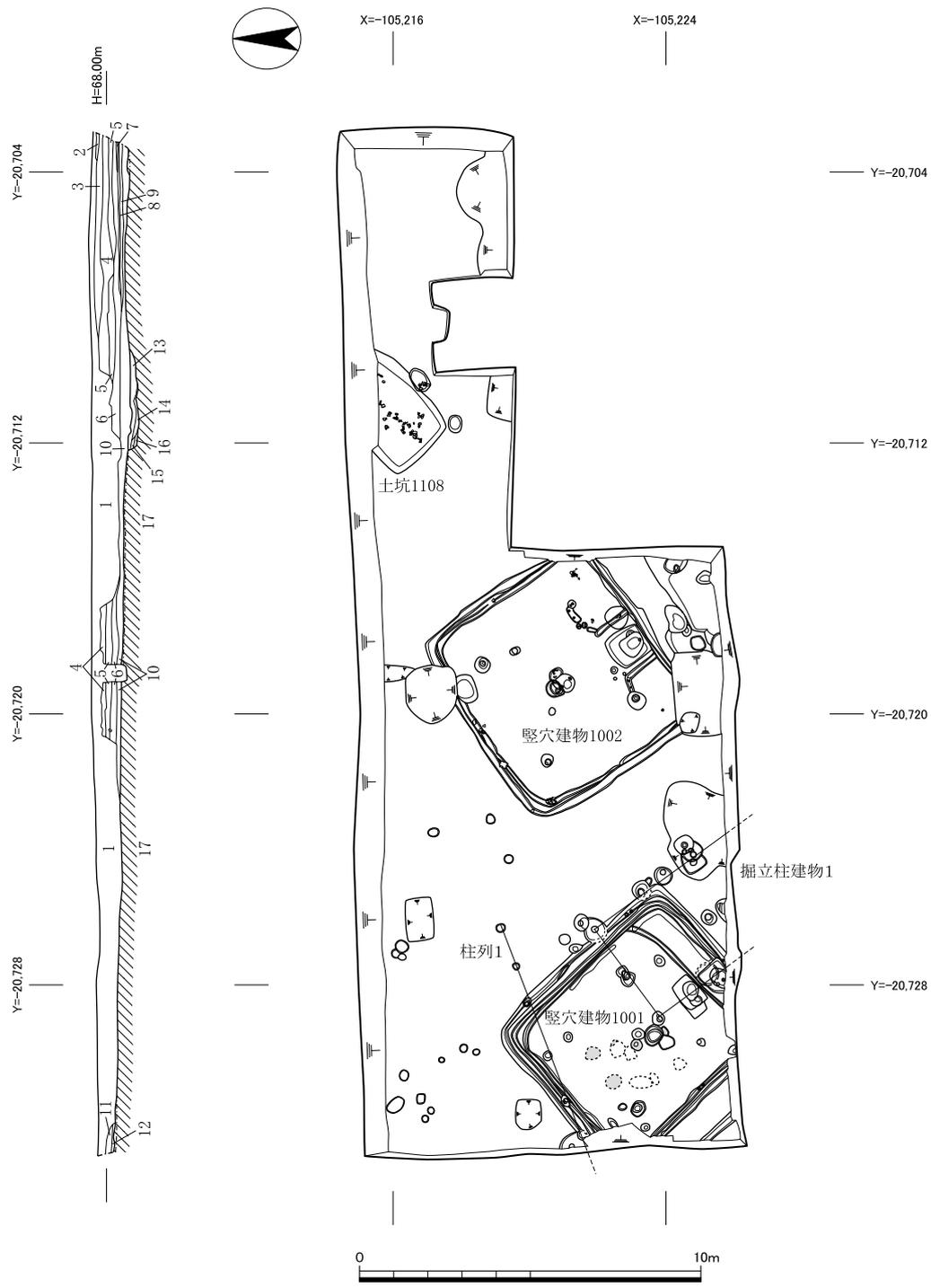
検出した遺構総数は124基である。古墳時代前期の竪穴建物2棟のほか柱列1列、掘立柱建物1棟、土坑などがある。柱列と掘立柱建物については、出土遺物、柱掘形の形状、方位の振れ、埋土などから古墳時代のもと考えられるが、竪穴建物との重複関係から見て、竪穴建物よりは新しい一群である。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

柱列1 (図13) 調査区西部で検出した。西から柱穴1101・1116・1133・1105・1121・1032が並ぶ。柱穴1101から1105までは竪穴建物1001を掘り下げてから検出したが、断面で柱穴1101・1116・1105が竪穴建物1001の壁溝を削平していることを確認した。柱間は1.1～1.5mで不均等である。方位は東に対して北に約20度振れる。柱掘形は径0.25～0.3mの円形で、検出面からの深さは0.1～0.5mある。柱穴1116からは土師器甕が出土した。

掘立柱建物1 (図14) 調査区南西部で検出した。梁行2間、桁行2間以上の建物と考えられる。方位は北に対して西に約35度振れる。柱間は梁行が約1.6m、桁行は約1.8mある。柱掘形は円形な

表3 遺構概要表

時代	1区遺構	2区遺構	3区遺構	4区遺構	5区遺構	6区遺構
古墳時代	掘立柱建物1、 柱列1、 竪穴建物1001・ 1002、土坑1108	竪穴建物2010・ 2020・2050、 土坑2060	土坑3001、 ピット3003	竪穴建物4010・ 4020、溝4135、 柱穴4097、 土坑4016	竪穴建物5080・ 5140・5170・ 5180・5200、 土坑5086・5106・ 5111・5130・ 5205、溝5010・ 5100・5145、 ピット群	竪穴建物6004・ 6006・6007・ 6014、土坑6022
奈良時代		土坑2021			掘立柱建物2、 柱穴群、 ピット群	掘立柱建物3
平安時代		ピット2012				
中世 ～近世			土坑3002	土坑4015・4025 ・4054・4032 ・4089・4132		



- | | |
|---|--|
| 1 2.5Y3/1黒褐色泥砂(現代盛土) | 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥土師片微量・
φ0.2~0.6cm礫中量混(中世耕作土床土) |
| 2 10YR3/4暗褐色砂礫、φ0.2~2cm礫少量混(現代盛土) | 10 10YR2/2黒褐色砂泥、φ0.2~2cm礫少量混(土壌化層) |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色砂泥混(現代盛土) | 11 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 |
| 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭少量混(耕作土) | 12 10YR4/1褐灰色砂泥 |
| 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、
10YR4/4褐色砂泥・φ0.2~5cm礫少量混(耕作土) | 13 10YR3/2黒褐色砂泥、
φ2~5cm10YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1108) |
| 6 2.5Y5/1黄灰色砂泥(中世耕作土) | 14 10YR2/3黒褐色砂泥、土師片混(土坑1108) |
| 7 2.5Y3/2黒褐色砂泥、土師片混 | 15 10YR2/3黒褐色砂泥、灰少量混(土坑1108) |
| 8 10YR3/3暗褐色砂泥、
10YR3/4暗褐色砂泥中量・土師片少量混(鉄分沈着層) | 16 10YR4/6褐色砂泥(土坑1108) |
| | 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(基盤層) |

図12 1区遺構実測図(1:200)

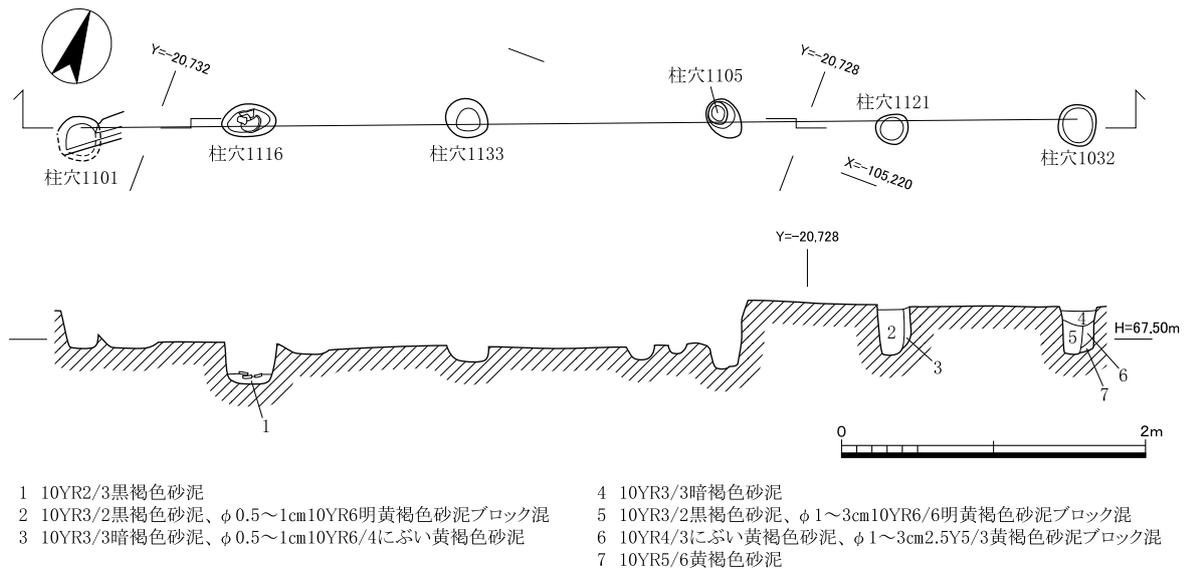


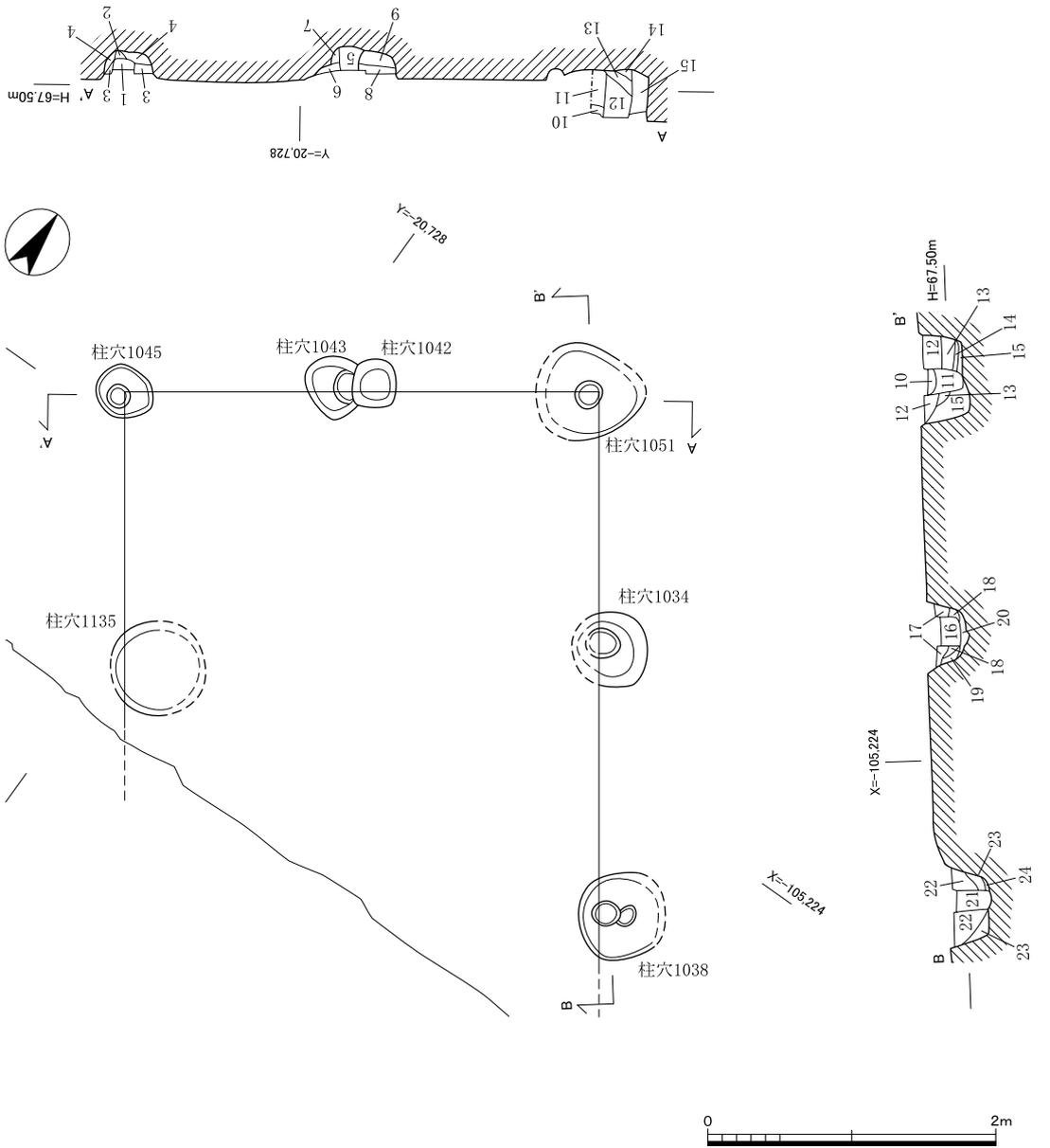
図13 柱列1実測図（1：50）

いしは隅丸方形で、径0.35~0.7m、深さは検出面から0.3~0.35mある。柱穴1135は竪穴建物1001の断面で竪穴建物1001の埋土を削平していることを確認した（図15-1・2層）。この遺構周辺では他にも多数の柱穴を確認したが、建物としてのまとまりを捉えることはできなかった。

竪穴建物1001（図15~18、図版1） 調査区南西部で検出した。西と南のコーナー一部は調査区外に拡がるが、ほぼ全体を検出することができた。平面形状は方形で、方位は北に対して約45度振れる。3回拡張が行われており壁溝が4重にめぐる。それに対応して建物西隅部分では貼床が4面確認できた（図18）。以下に住居の変遷について古い順に1期から4期に分けて述べる。

1期 平面形は隅丸正方形で、一辺の長さは約4.5mある。壁溝は1122、主柱穴は柱穴1052・1103・1073・1064が対応する。土坑1128がこの段階の炉、土坑1134・1127が貯蔵穴と考えられる。壁溝1122は幅約0.1m、深さは0.03~0.08mある。主柱穴は径約0.15~0.3mで、深さは0.5~0.7mある。炉と考えられる土坑1128は平面円形で、径約0.35m、深さは約0.1mある。埋土には焼土が混じり、底は被熱により赤変する。南辺のほぼ中央に位置し貯蔵穴と考えられる土坑1134と土坑1127は、いずれも方形に一段掘り下げた中央に深さのある円形土坑を配置するもので、作り変えと考えられる。土坑1134は方形部分が長辺約0.9m、短辺約0.6mの長方形で、深さは約0.05mある。中央の円形土坑は径約0.5mで、深さは約0.4mある。土坑1127は方形部分が長辺約0.7m、短辺約0.5mの長方形で、深さは約0.05mある。円形土坑は径約0.35mで、深さは約0.5mある。

2期 1期の建物の南西辺の壁溝を踏襲し、それ以外の3方向に拡張を行っている。平面形は隅丸長方形となり、長辺約5.8m、短辺は約4.9mある。壁溝は1054、主柱穴は1期のものを踏襲し、土坑1129が炉、土坑1047が貯蔵穴と考えられる。壁溝1054は幅約0.15m、深さは0.03~0.08mある。土坑1129は平面円形で、径約0.3m、深さは0.05mある。土坑1047は南東辺壁際に位置し、方形に一段掘り下げた中央に深さのある楕円形土坑を配置するものである。方形部分は長辺0.9m以上、短辺約0.8m、深さは約0.05mある。楕円形土坑は径0.5~0.6m、深さは約0.35mある。



- | | |
|---|---|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 | 13 7.5YR2/3極暗褐色砂泥 |
| 2 10YR3/4暗褐色砂泥 | 14 7.5YR3/3暗褐色砂泥、φ2~3cm10YR4/6褐色砂泥ブロック混 |
| 3 7.5YR2/2黒褐色砂泥 | 15 10YR2/2黒褐色砂泥 |
| 4 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥 | 16 10YR4/4褐色砂泥 |
| 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥 | 17 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| 6 10YR3/4暗褐色砂泥 | 18 10YR4/6褐色砂泥 |
| 7 7.5YR3/4暗褐色砂泥 | 19 10YR5/6黄褐色砂泥 |
| 8 10YR3/3暗褐色砂泥 | 20 7.5YR4/6褐色砂泥 |
| 9 10YR4/6褐色砂泥 | 21 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| 10 10YR3/3暗褐色砂泥 | 22 10YR3/4暗褐色砂泥、φ2~3cm10YR4/6褐色砂泥ブロック混 |
| 11 7.5YR2/3極暗褐色砂泥、φ2~3cm10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混 | 23 10YR4/4褐色砂泥 |
| 12 10YR4/4褐色砂泥、φ2~3cm10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混 | 24 10YR2/2黒褐色砂泥、粘性あり |

図14 掘立柱建物1実測図 (1 : 50)

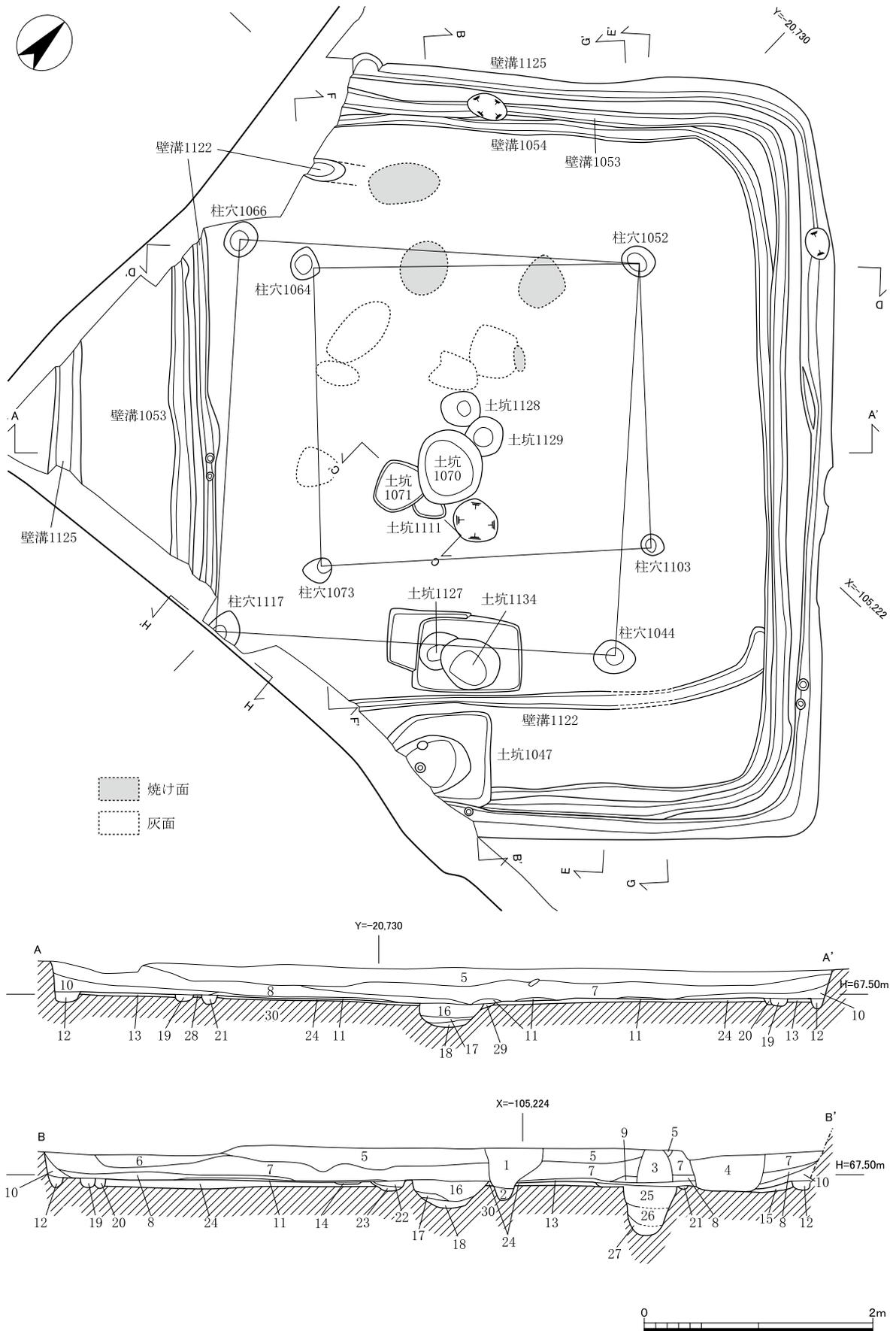


图15 竖穴建物1001实测图(1:50)

A・Bライン

- 1 10YR2/3黒褐色砂泥、φ1～1.5cm2.5Y7/4浅黄色泥砂ブロック微量混(柱穴1135)
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥、φ1～3cm10YR5/2灰黄褐色泥砂ブロック少量混(柱穴1135)
- 3 10YR2/3黒褐色砂泥、φ0.5～1cm10YR6/6明黄褐色泥砂ブロック微量混
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥、φ0.5～2cm10YR5/6黄褐色粘質土ブロック少量混
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥、φ1～3cm10YR5/3にぶい黄褐色泥砂ブロック混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥、φ1～2cm10YR6/8明黄褐色泥砂ブロック混
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥、φ1～2cm10YR5/3にぶい黄褐色泥砂ブロック少量混
- 8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、φ2～5cm2.5Y5/3黄褐色泥砂ブロック多量混
- 9 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥、φ0.5～1cm10YR3/3暗褐色砂泥ブロック混
- 10 10YR3/4暗褐色砂泥、φ2～3cm10YR4/6褐色泥砂ブロック少量混
- 11 2.5Y3/2黒褐色灰層
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥、φ1～2cm10YR4/6褐色泥砂ブロック多量混(壁溝1125)
- 13 2.5Y5/6黄褐色砂泥、7.5YR5/6明褐色砂泥ブロック混(第4期貼床)
- 14 10YR2/1黒色灰層
- 15 10YR2/2黒褐色砂泥(土坑1047)
- 16 10YR4/4褐色砂泥、φ0.5～1cm10YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1070)
- 17 10YR2/3黒褐色砂泥(土坑1070)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(土坑1070)
- 19 10YR2/2黒褐色砂泥、2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック混(壁溝1053)
- 20 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック混(壁溝1054)
- 21 10YR3/2黒褐色砂泥(壁溝1122)
- 22 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、φ1～2cm5YR4/8赤褐色砂泥ブロック混(土坑1128)
- 23 2.5Y3/2黒褐色砂泥、φ1～2cm7.5YR5/8明褐色砂泥ブロック混(土坑1128)
- 24 10YR3/2黒褐色砂泥、φ1～2cm2.5Y4/2暗灰黄色砂泥・φ0.5～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(貼床)
- 25 10YR2/2黒褐色砂泥、φ3～5cm2.5Y4/2暗灰黄色砂泥・φ1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1134)
- 26 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、φ1～2cm2.5Y3/2黒褐色砂泥・φ0.5～1cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1134)
- 27 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、φ1～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ0.5～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1134)
- 28 10YR4/2灰黄褐色砂泥(貼床)
- 29 10YR3/2オリーブ黒褐色砂泥(土坑1129)
- 30 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(基盤層)

図16 竪穴建物1001断面図層名

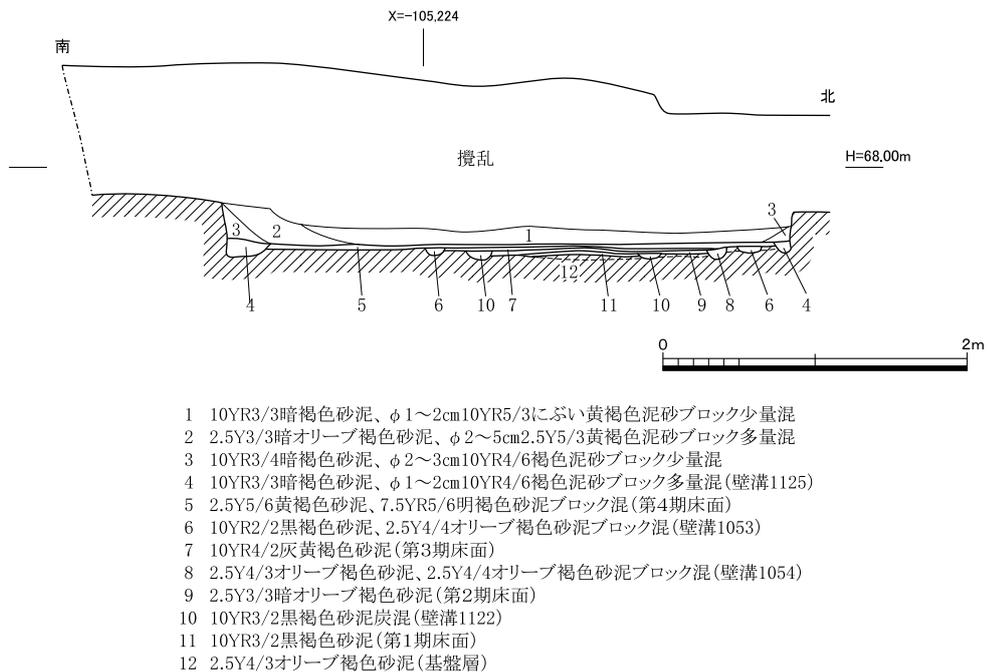


図17 竪穴建物1001西側断面図(1:50)

3期 2期の建物を全体的に拡張している。平面形は長方形で、長辺約6.1m、短辺は約5.3mある。壁溝は1053、主柱穴は1期のものを踏襲し、土坑1071・1111が炉、貯蔵穴は2期の土坑1047を踏襲する。壁溝1053は幅約0.15m、深さは0.03～0.08mある。土坑1071・1111は重複し、炉を作り変えた可能性が考えられる。いずれも不整形で、土坑1071は径約0.4m、深さは0.05mある。埋土には炭化物が混じる。土坑1111は残存径0.25m、深さは約0.05mある。埋土には炭化物が混じ

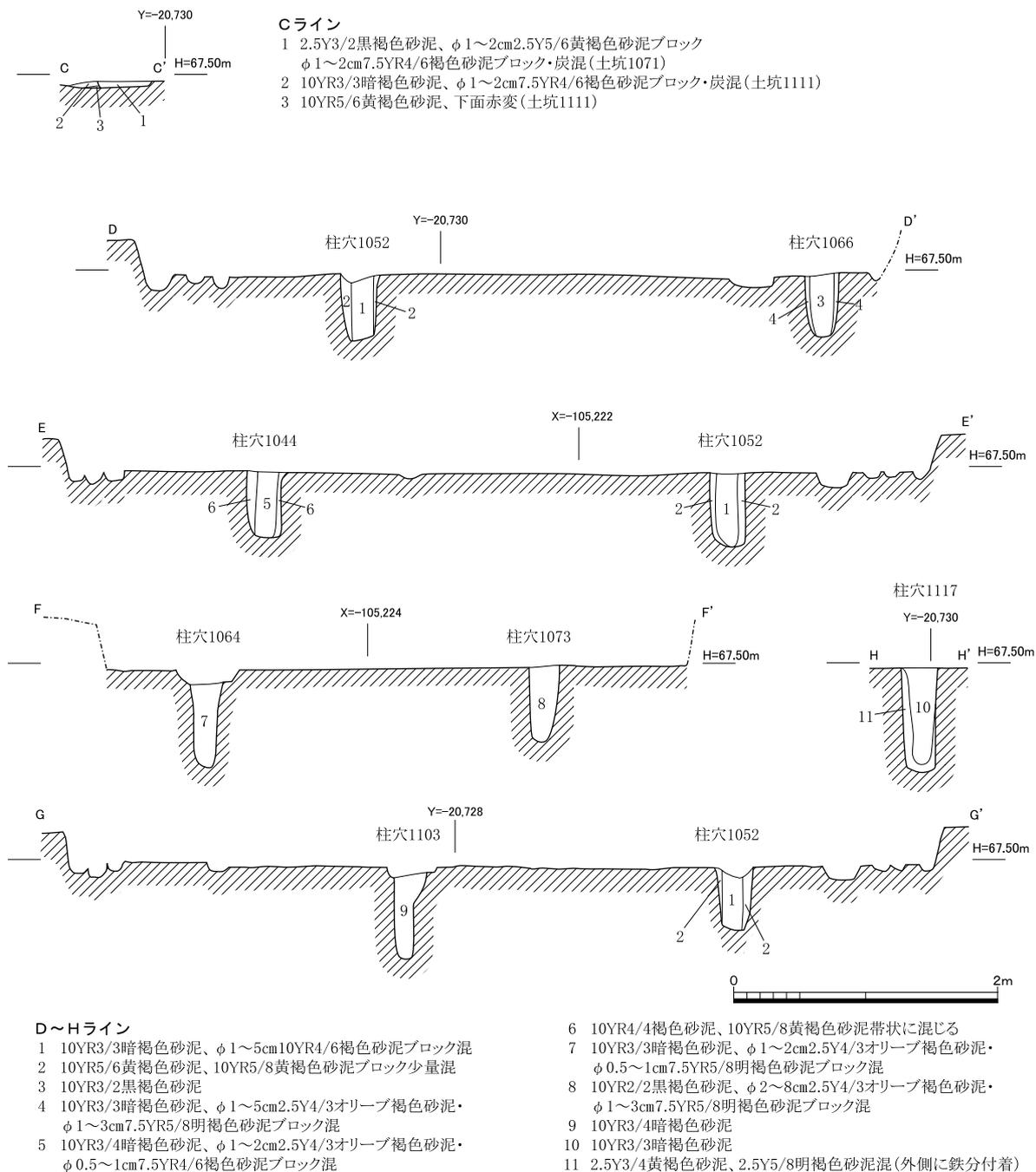
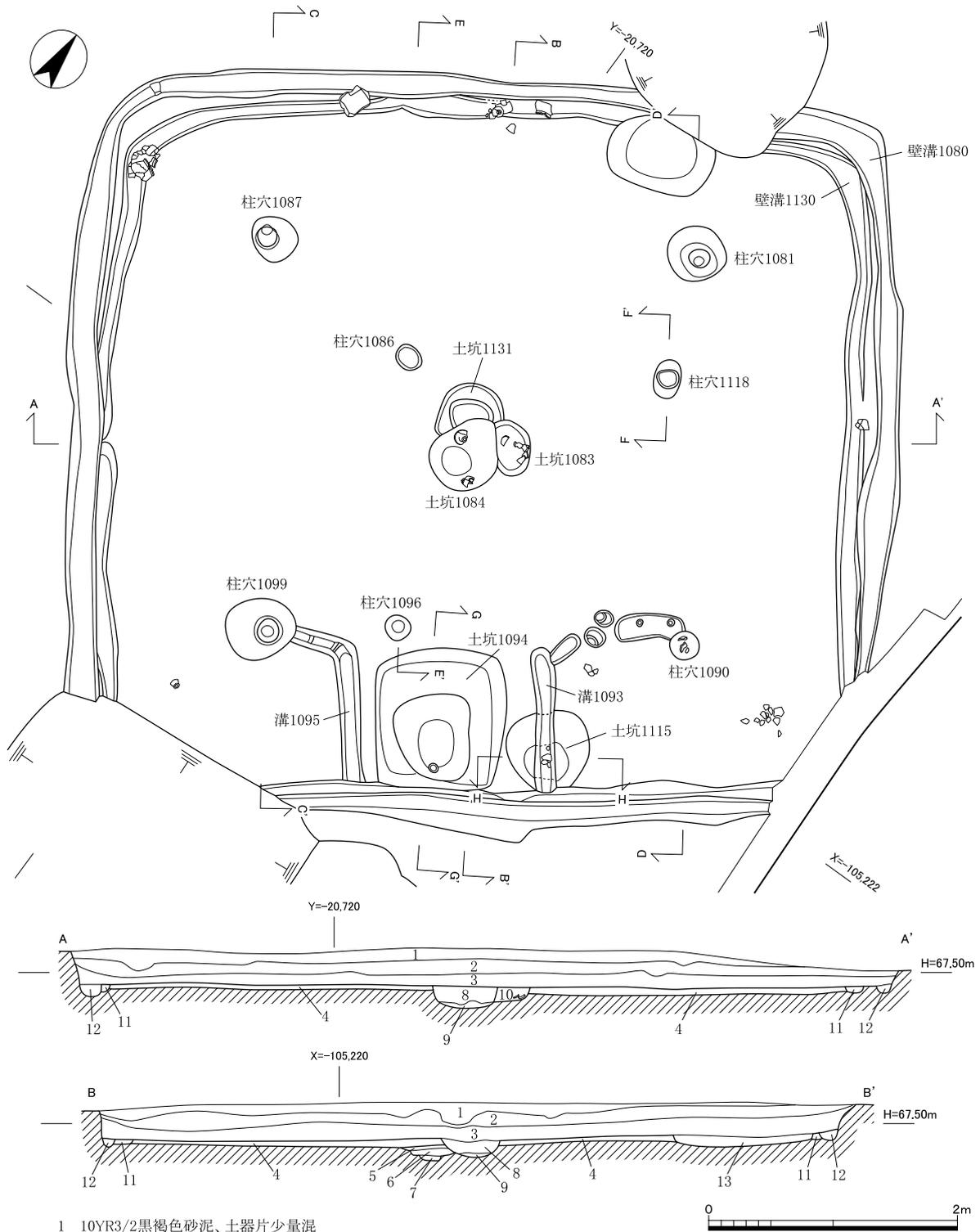


図18 竪穴建物1001断面図(1:50)

り、底は被熱により赤変する。

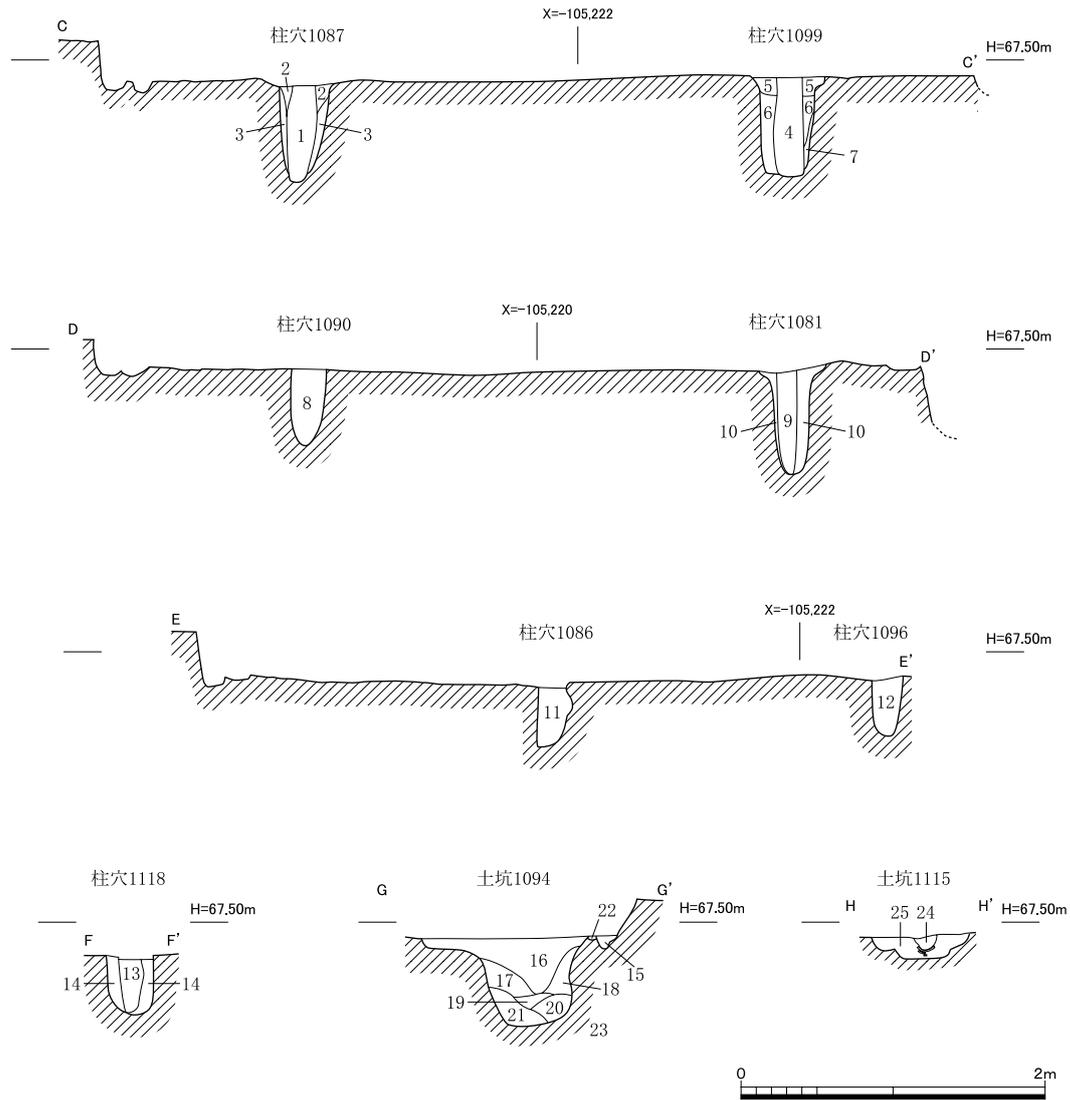
4期 3期の建物を全体的に拡張している。平面形はほぼ正方形となり、一辺の長さは約6.8mある。壁溝は1125、支柱穴は柱穴1052・1044・1117・1066で、柱穴1052は1期から踏襲される。土坑1070が炉、貯蔵穴は2期からの土坑1047を踏襲する。壁溝1125は幅0.15~0.3m、深さは0.08~0.1mある。支柱穴は径0.2~0.25m、深さは0.5~0.8mある。土坑1070は平面円形で、径約0.6m、深さは約0.25mある。埋土には灰が多量に混じる。

竪穴建物1002(図19・20、図版2) 調査区の中央で検出した。ほぼ全体を検出することができた。平面形状は方形で、方位は北に対して約40度西に振れる。深さは検出面からで約0.35mあ



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、土器片少量混
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5~1cm10YR4/6褐色砂泥ブロック中量・土器片少量混
- 3 10YR2/2黒褐色砂泥、φ 1~2cm2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥・φ 0.5~1cm10YR4/6褐色砂泥ブロック多量混
- 4 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、φ 0.5~1cm10YR4/6褐色砂泥ブロック多量混(貼床)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、φ 0.5~3cm2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥・φ 0.5~3cm7.5YR5/8明褐色砂泥ブロック混(土坑1131)
- 6 10YR4/6褐色砂泥、φ 1~3cm10YR4/2灰黄褐色砂泥ブロック混(土坑1131)
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、φ 0.5~2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1131)
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5~2cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック混・φ 2~3cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1084)
- 9 7.5YR2/3極暗褐色砂泥、φ 0.5~2cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック混・φ 0.5~2cm5YR5/6明赤褐色焼土ブロック混(土坑1084)
- 10 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 2~3cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1083)
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 0.5~1cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(壁溝1130)
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5~1cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック多量混(壁溝1080)
- 13 2.5Y3/2黒褐色砂泥、φ 1~8cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック・φ 0.5~2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック多量混(土坑1094)

図19 竪穴建物1002実測図 (1:50)



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 4 10YR2/3黒褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 5 10YR3/1黒褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 6 10YR2/1黒色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、φ 0.5～2cm7.5YR5/8明褐色砂泥ブロック混
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥、φ 1～3cm2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥・φ 0.5～1cm10YR6/8明黄褐色砂泥ブロック混
- 9 2.5Y3/2黒褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5～3cm2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・φ 1～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 11 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5～3cm10YR6/6明黄褐色砂泥
- 12 10YR3/4暗褐色砂泥
- 13 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 14 2.5Y5/3黄褐色砂泥、φ 0.5～1cm10YR6/6明黄褐色砂泥
- 15 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5～1cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混
- 16 2.5Y3/2黒褐色砂泥、φ 1～8cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック・φ 0.5～2cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック多量混
- 17 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 0.5～2cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック・φ 0.5～2cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック混
- 18 10YR3/2暗褐色砂泥、φ 0.5～1cm2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロック少量・φ 1～3cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック多量混
- 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥、粘性あり、φ 1～2cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック混
- 20 10YR2/3黒褐色砂泥、粘性あり、φ 1～2cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック混
- 21 10YR3/2黒褐色砂泥、粘性あり、φ 1～2cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック混
- 22 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 0.5～1cm7.5Y4/6褐色砂泥ブロック混
- 23 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、φ 0.5～2cm5YR5/8明赤褐色砂泥ブロック多量混(基盤層)
- 24 7.5YR3/3暗褐色砂泥、7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1115)
- 25 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 1～3cm2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥・φ 0.5～2cm7.5YR4/6褐色砂泥ブロック混(土坑1115)

図20 竪穴建物1002断面図(1:50)

る。主柱穴と炉、貯蔵穴の数と位置から2回拡張が行われたと考えられる。以下に住居の変遷について古い順に1期から3期に分けて述べる。

1期 壁溝は検出されず、平面規模は不明である。この段階では貼床を行っていない。主柱穴は柱穴1118・1090・1096・1086が対応する。土坑1131がこの段階の炉、土坑1115が貯蔵穴と考えられる。主柱穴は径約0.2m、深さは0.3～0.5mある。炉と考えられる土坑1131は平面不整円形で、径約0.5m、深さは約0.1mある。底には焼土が堆積し、上層には炭化物と土器片が混じる。貯蔵穴と考えられる土坑1115は平面円形で中央が一段深くなる。径約0.65m、深さは約0.15mある。

2期 1期の建物を北西と南西方向に拡張したものと考えられる。平面形は長方形で、長辺約6.1m、短辺は約5.6mある。この段階で厚さ0.02～0.06mの貼床を行う。壁溝は1130、主柱穴は柱穴1081・1090・1099・1087が対応する。柱穴1090は1期から踏襲される。土坑1083が炉、土坑1094が貯蔵穴と考えられる。壁溝1130は幅約0.15m、深さは0.05～0.08mある。主柱穴は径0.2～0.5m、深さは0.5～0.7mある。土坑1083は平面円形で、径約0.6m、深さは約0.1mある。埋土には炭化物が混じり、底は被熱により赤変する。土坑1094は南東辺壁際に位置し、方形に一段掘り下げた中央に深さのある不整円形土坑を配置するものである。方形部分は長辺約1.1m、短辺約1.0mで深さは約0.05mある。不整円形土坑は径0.6～0.7mで、深さは約0.5mある。埋土から土師器甕や高杯が出土した。この土坑の両側では主柱穴から壁溝に向かってL字状に取り付く溝1093・1095を検出した。いずれも幅約0.15m、深さは0.05～0.06mある。

3期 2期の建物を全体的に拡張している。平面形は長方形で、長辺は約6.6m、短辺は約6.0mある。壁溝は1080、主柱穴は2期のものを踏襲する。土坑1084が炉、貯蔵穴は2期の土坑1094を踏襲する。壁溝1080は幅0.15～0.3m、深さは約0.1mある。土坑1084は平面不整円形で径約0.55m、深さは約0.15mある。埋土に炭化物と焼土が混じり、底は被熱により赤変する。床面直上から土師器甕、高杯などが出土した。また北西辺壁際には砂岩製の石皿が据えられていた。

土坑1108 (図21) 調査区北東部で検出した。北部は調査区外へ伸び、全体の形状は不明である。検出部分は平面隅丸長方形で、長辺3m以上、短辺は約2.2mある。深さは約0.25mあり、底の形状は平坦である。埋土は黒褐色砂泥を主体とし、灰、小礫、土器の小片が混じる。

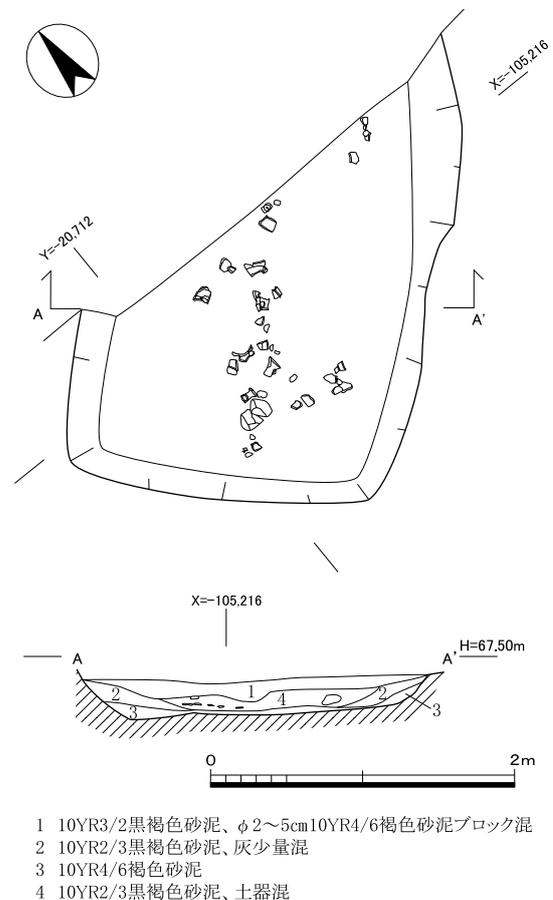


図21 土坑1108実測図 (1:50)

(2) 2区の遺構

1) 基本層序 (図23)

調査地は小学校祈りの森の跡地で、現地表面の標高は68.4~68.6mでほぼ平坦である。上から0.5~0.9mまでが現代盛土層、その下に現代の耕作土層が0.1~0.2m堆積する(図23-16層)。なお、 $X = -105,248$ から $X = -105,253$ の間は小学校建設前まで東西方向の道路が通っており、コンク

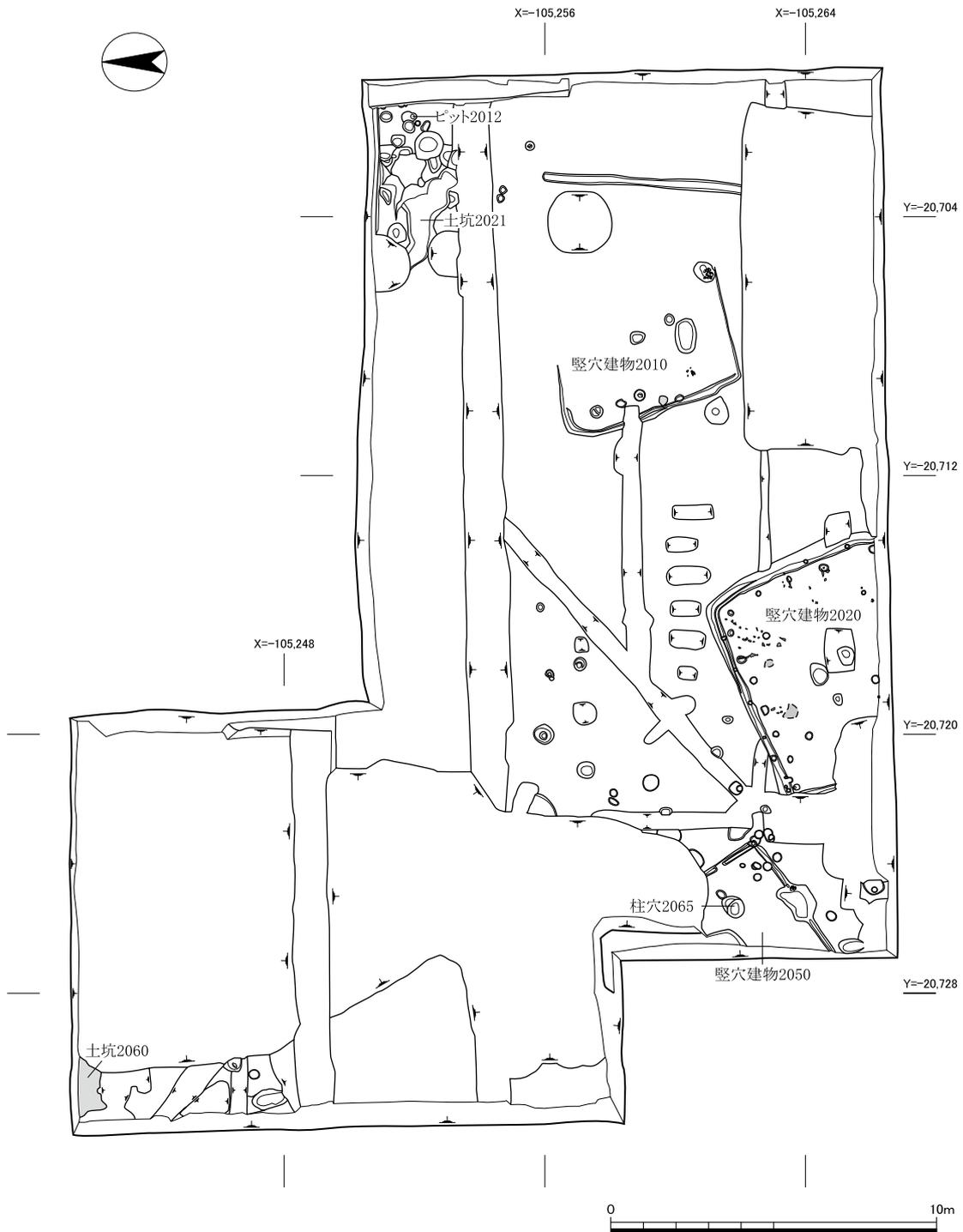


図22 2区遺構平面図 (1 : 200)

リート製のU字両側溝の間には路面の盛土が0.1～0.15m堆積する(22・23層)。それらを除去すると基盤層となる。基盤層は調査区北東部分では黄褐色シルト～細砂の均質な土層であるが南西に行くにしたがって礫の含有量が多くなり砂礫質となる(28～30層)。基盤層上面の標高は調査区東端で67.6～67.7m、西端では68.0mで東から西に向かって高くなる。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

2) 遺構(図22、図版3・4)

検出した遺構総数は108基である。古墳時代前期の竪穴建物2棟、古墳時代後期の竪穴建物1棟とその可能性のあるもの1棟、奈良時代の土取り穴、平安時代のピットなどがある。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

ピット2012 調査区北東隅で検出した。径約0.4m、深さは約0.25mある。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中から平安時代の緑釉陶器片が出土した。平安時代の遺物が出土したのはこの遺構のみである。

土坑2021 調査区北東で検出した。東西約3.5m、南北2m以上の不整形な土坑である。底は凹凸があり、壁は抉られている。また、底が砂礫層で止まっていることから、土取り穴である可能性が考えられる。埋土は黒褐色シルトで、8世紀代の遺物を少量含む。

土坑2060 調査区北西隅で検出した。東西と南側は攪乱を受け、北は調査区外へ広がる。検出範囲は東西約1.8m、南北約0.8mある。平坦な砂礫の基盤層の上に厚さ0.03～0.05mのシルト層が貼り付き、その上面で須恵器杯身が出土した。古墳時代後期の竪穴建物の貼床部分である可能性がある。

竪穴建物2050(図24、図版4) 調査区南西端で検出した。西半は調査区外へ延びるため、全体の形状は不明であるが、平面方形で一辺の長さは4m以上ある。方位は北に対して約30度西に振れる。検出面から床面までの深さは0.05～0.15mある。床面には厚さ0.05～0.1mの貼床を行っ

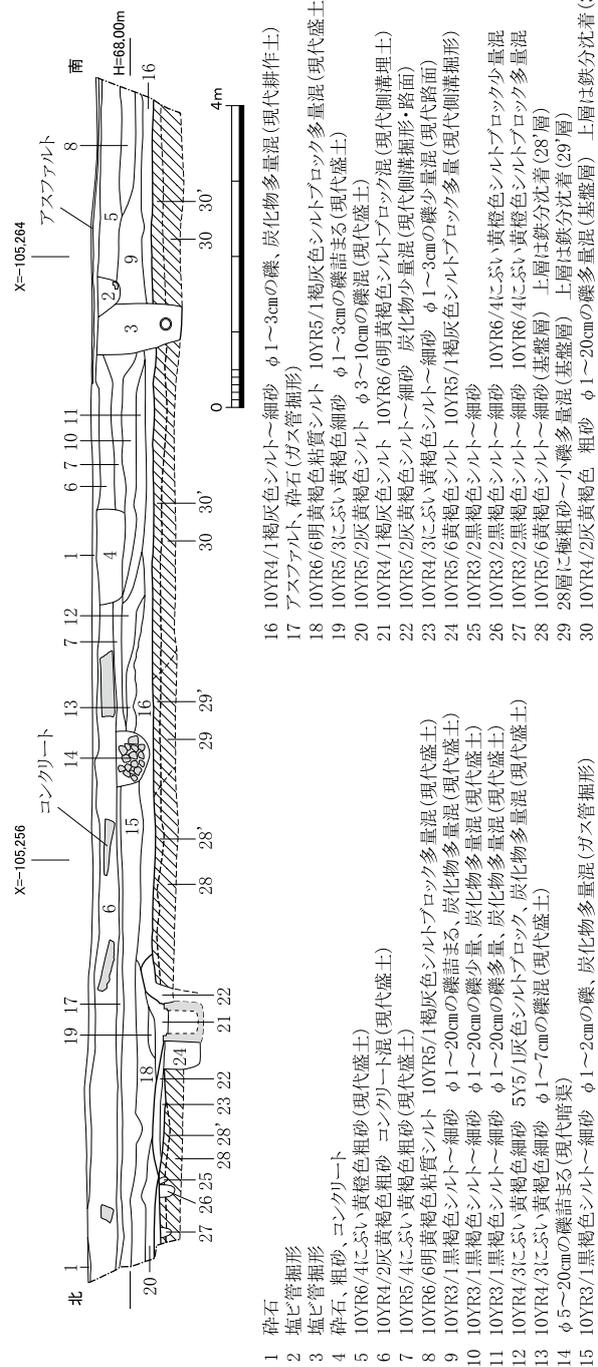
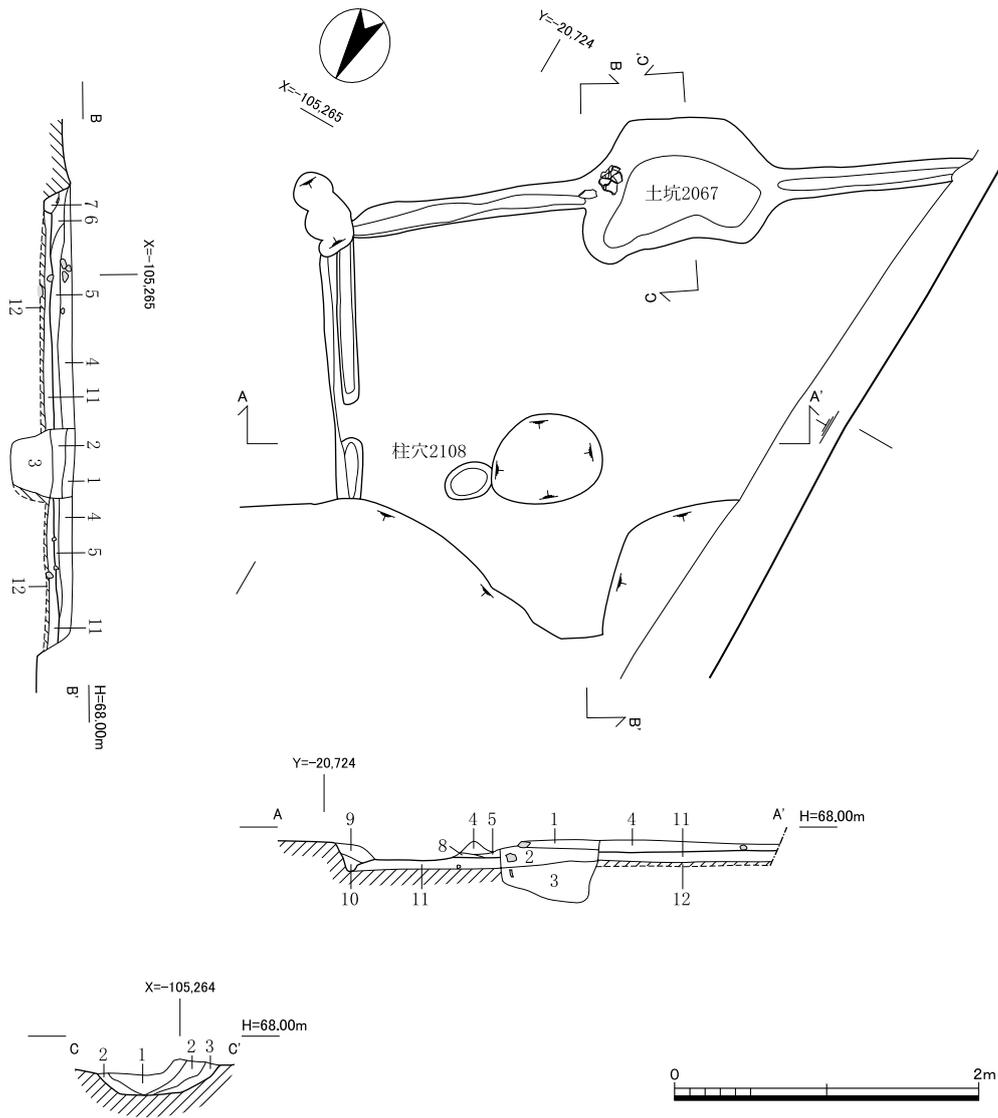


図23 2区東壁断面図(1:100)



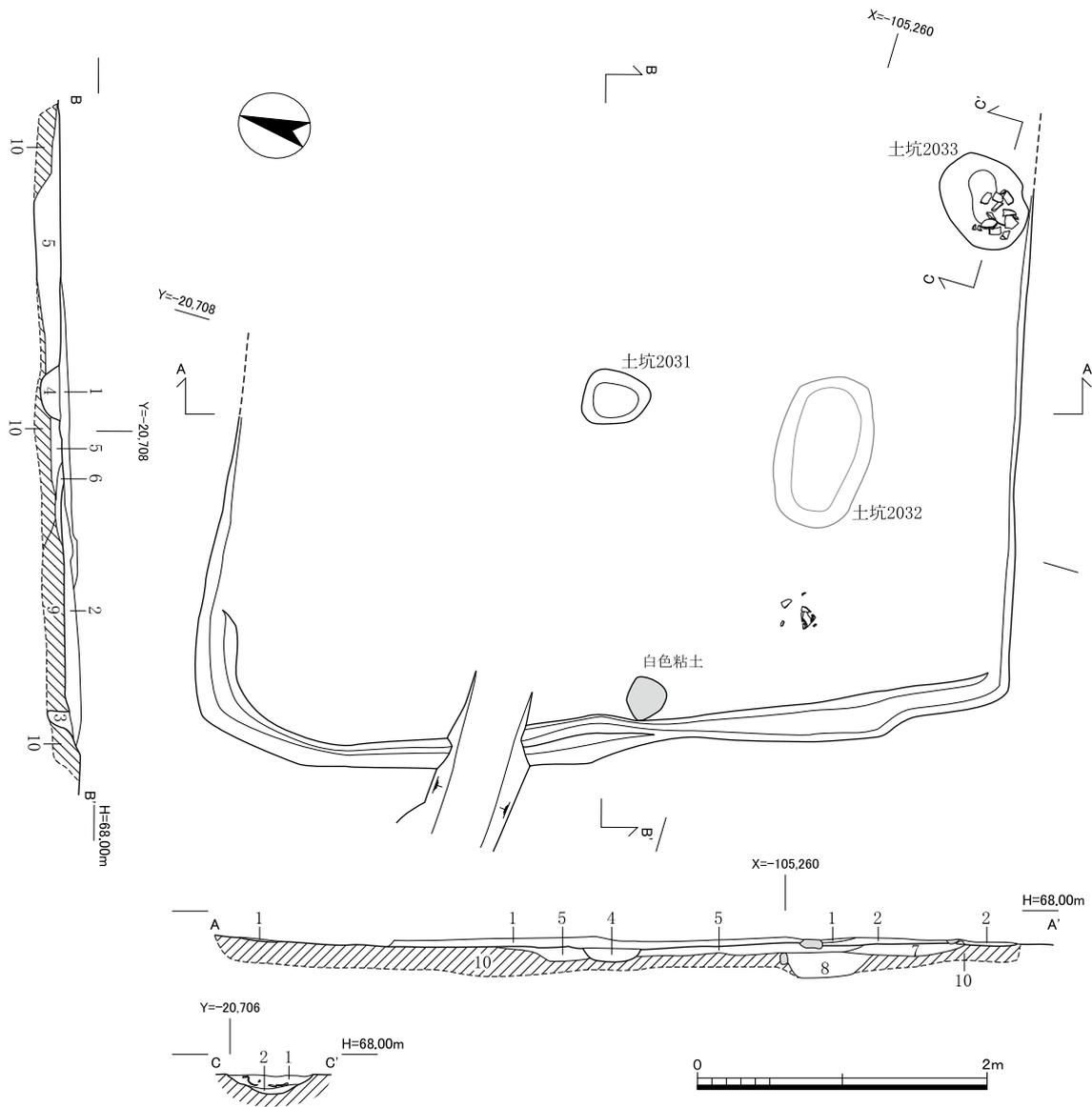
A・Bライン

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂(柱穴2065)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂～小礫混(柱穴2065)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/4褐色細砂ブロック混、土器多量混(柱穴2065)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂混 10YR6/1褐灰色粘土ブロック少量混
- 5 10YR3/3暗褐色 10YR5/4にぶい黄褐色シルト～細砂のブロック少量混
- 6 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量混、炭化物微量混
- 7 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 炭化物少量混
- 8 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 炭化物・焼土多量混
- 9 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂混 炭化物少量混
- 10 10YR2/3黒褐色シルト～細砂 炭化物少量混
- 11 10YR4/4褐色シルト～細砂 10YR3/1黒褐色シルト～細砂ブロック混、φ1～5cmの礫少量混(貼床)
- 12 10YR4/4褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量混(基盤層)

Cライン

- 1 10YR2/1黒色シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量、土器少量混(土坑2067)
- 2 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/2灰黄褐色シルトブロック少量、φ0.5～1cmの礫少量混(土坑2067)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/4褐色シルトブロック多量混(土坑2067)

図24 竪穴建物2050実測図(1:50)



A・Bライン

- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 φ1～3cmの礫少量混(現代耕作床土)
- 2 10YR3/1黒褐色粗砂混シルト～細砂 φ1～10cmの礫混 炭化物少量混(竪穴埋土)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ1～3cmの礫少量混(壁溝埋土)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト～細砂(土坑2031)
- 5 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～15cmの礫多量混 炭化物・土器少量混(貼床)
- 6 10YR3/3暗褐色粗砂混シルト～細砂 10YR7/6明黄褐色シルトのブロック多量混(貼床)
- 7 10YR5/6黄褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂ブロック混、土器片混(貼床)
- 8 10YR5/6黄褐色シルト 10YR4/1褐灰色シルト～細砂のブロック多量、φ1～5cmの礫多量混
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色シルト～細砂 φ1～20cmの礫混(基盤層)
- 10 10YR3/2黒褐色粗砂 φ1～20cmの礫多量混(基盤層)

Cライン

- 1 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 土器多量混(土坑2033)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト やや粘質(土坑2033)

図25 竪穴建物2010実測図(1:50)

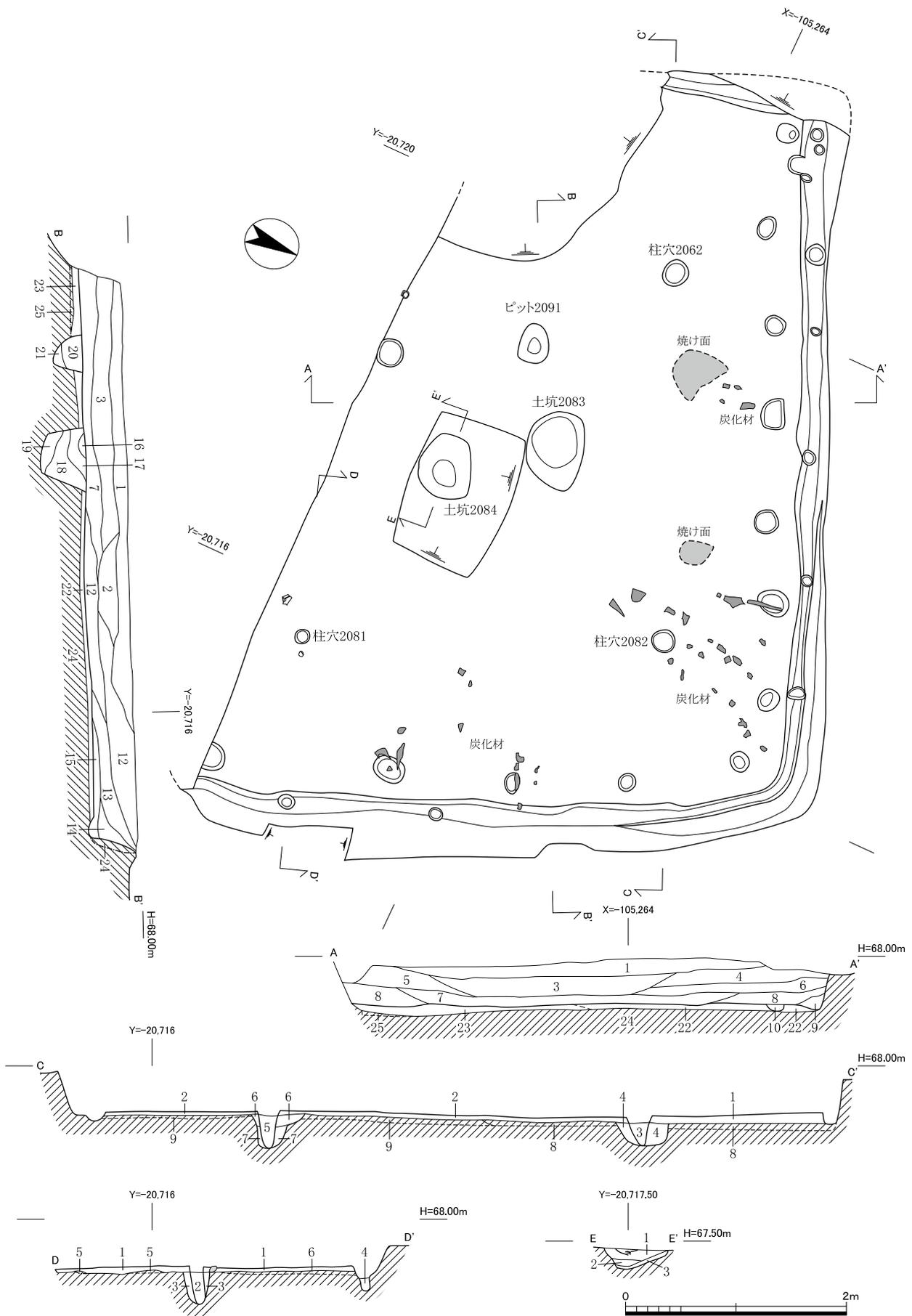


図26 竪穴建物2020実測図 (1 : 50)

A・Bライン

- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫少量、鉄分多量 固く締まる
- 2 10YR2/1黒色シルト～細砂 粗砂多量混 φ3～10cmの礫多量、土器多量混
- 3 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ3～10cmの礫やや多量、炭化物・土器多量混
- 4 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂混 φ1～3cmの礫少量混
- 5 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/2灰黄褐色シルトブロック少量混 固く締まる
- 6 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 粗砂混 土器少量混
- 7 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 粗砂微量混 炭化物やや多量混
- 8 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂微量混 炭化物多量混
- 9 10YR2/1黒色シルト～細砂 粗砂微量混 炭化物少量混
- 10 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂混 炭化物少量混
- 11 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂多量混 炭化物多量、φ1～3cmの礫少量混
- 12 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 炭化物少量混
- 13 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 粗砂混 φ1～3cmの礫少量混
- 14 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/1褐色シルトブロック少量、φ1～3cmの礫少量混
- 15 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 炭化物多量、φ1～3cmの礫少量混
- 16 10YR4/4褐色シルト～細砂(土坑2083)
- 17 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR4/4褐色シルトブロック少量混(土坑2083)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂 粗砂～小礫少量混(土坑2083)
- 19 10YR3/3暗褐色細砂～粗砂 炭化物少量混(土坑2083)
- 20 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 φ1～3cmの礫、炭化物少量混(ピット2091)
- 21 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～粗砂 φ1～3cmの礫少量混(ピット2091)
- 22 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量、炭化物少量混(貼床)
- 23 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 10YR5/6黄褐色シルトブロック多量混(貼床)
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色 φ1～10cmの礫多量混(基盤層)
- 25 10YR5/6黄褐色シルト～細砂(基盤層)

Cライン

- 1 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR5/6黄褐色シルトブロック多量、炭化物少量混(貼床)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 粗砂～小礫混、炭化物多量混(貼床)
- 3 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 粗砂混 炭化物やや多量混(柱穴2062)
- 4 10YR3/2黒褐色細砂 粗砂混(柱穴2062)
- 5 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～3cmの礫少量、炭化物少量混(柱穴2082)
- 6 10YR4/2灰黄褐色細砂～粗砂 φ1～3cmの礫やや多量混(柱穴2082)
- 7 10YR3/2黒褐色細砂～粗砂 φ1～3cmの礫少量混(柱穴2082)
- 8 10YR5/6黄褐色シルト～細砂(基盤層)
- 9 10YR5/6黄褐色細砂 φ1～15cmの礫多量混(基盤層)

Dライン

- 1 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 10YR5/6黄褐色シルトブロック多量、炭化物少量混(貼床)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 炭化物少量混(柱穴2081)
- 3 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 やや粘質 φ1～5cmの礫少量、炭化物少量混(柱穴2081)
- 4 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 炭化物混
- 5 10YR5/6黄褐色シルト～細砂(基盤層)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 φ1～15cmの礫多量混(基盤層)

Eライン

- 1 10YR2/1黒色シルト～細砂 粗砂混 φ0.5～3cmの礫少量混 炭化物少量、土器多量混(土坑2084)
- 2 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫微量混(土坑2084)
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト やや粘質(土坑2084)

図27 竪穴建物2020断面図層名

ている(11層)。床面直上で土師器甑の把手が出土した。壁溝は幅0.1～0.2m、深さは0.05～0.1mある。南東辺では貯蔵穴と考えられる土坑2067を検出した。不整形で長径約1.2m、短径約0.8m、深さは約0.2mある。底から土師器甕が出土した。床面で検出した柱穴2108は支柱穴の可能性がある。平面楕円形で長径約0.3m、短径約0.2m、深さは約0.15mある。

竪穴建物2010(図25、図版3) 調査区東半で検出した。東半は削平を受け、全体の規模は不明である。平面形は隅丸方形で、残存する一辺の長さは約5.5mある。方位は北に対して約20度西に振れる。土坑2031が炉、土坑2033が貯蔵穴と考えられる。床面には厚さ0.05～0.18mの貼床を行っている(5～7層)。床面直上から古式土師器の加飾壺が出土した。また、西辺壁溝際では床面上から白色粘土塊が出土している。残存する壁溝の幅は0.1～0.25m、深さは0.05～0.15mある。土坑2031は、平面不整形で、径約0.4m、深さは約0.1mある。南辺壁際で検出した土坑2033は平面楕円形で、長径約0.7m、短径約0.55m、深さは約0.12mある。埋土から古式土師器鉢・壺などが出土した。建物南側にある土坑2032は貼床を除去して検出したことから、建物に先行する土

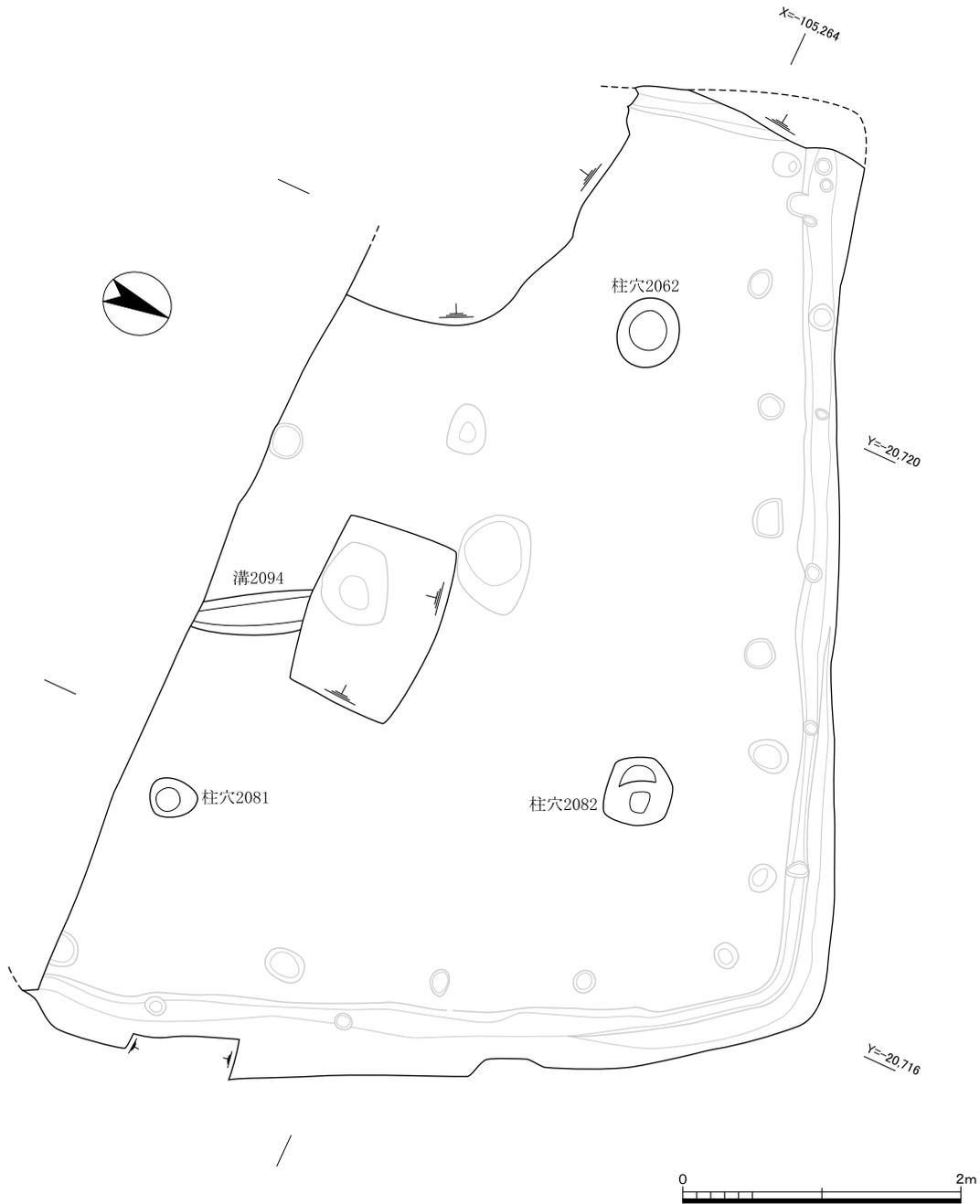


図28 竪穴建物2020貼床掘り下げ後平面図（1：50）

坑と考えられる。平面楕円形で長径約1.1m、短径約0.65m、深さは約0.2mある。

竪穴建物2020（図26～28、図版5） 調査区南半で検出した。南半は調査区外に拡がる。平面形は隅丸方形で、北西辺の長さは約6.7m、北東辺の長さは5.7m以上ある。方位は北に対して約25度西に振れる。検出面から床面までの深さは0.3～0.4mある。床面には厚さ0.03～0.1mの貼床を行っている（22・23層）。床面上で炭化した垂木の柱材が放射状に検出されたことから焼失建物と考えられる。壁溝は幅0.15～0.3m、深さ0.05～0.1mある。壁溝の底には杭跡と思われる小ピットが1～1.4mの間隔で並ぶ。小ピットの深さは0.2～0.3mある。壁溝の内側にも小規模な柱穴が0.5～1.5mの間隔で並ぶ。柱穴の直径は0.15～0.3m、深さは0.05～0.2mある。屋根を支える補助柱の

柱穴と考えられる。柱穴2062・2082・2081が主柱穴と考えられる。柱掘形は貼床を行う前に掘られており、掘形は貼床掘り下げ後に検出した（図28）。掘形の径は0.3～0.5m、深さは0.2～0.3mある。柱当りから推測される柱径は0.12～0.2mある。その他、床面上では土坑2083・2084、ピット2091を検出した。土坑2083あるいは2084が炉と考えられる。土坑2083は楕円形で長径約0.7m、短径約0.5m、深さは約0.4mある。土坑2084は径約0.5m、深さは約0.2mある。埋土から古式土師器甕などが出土した。ピット2091は径約0.3m、深さは約0.25mある。貼床掘り下げ後には溝2094を検出した。幅0.2～0.3m、深さは0.03～0.05mある。床面直上から出土した遺物は庄内式並行期のものであるが、レンズ状に堆積する埋土からは6世紀から8世紀の須恵器なども出土しており、建物廃絶後も窪みとして残っていたと考えられる。

（3）3区の遺構

1）基本層序（図29）

調査地は大学の駐輪状跡地で、アスファルト舗装された現地表面の標高は68.4～68.6mであった。アスファルトを除去すると0.3～0.5mまでが現代盛土層、その下に近現代の耕作土層が0.2～0.25m堆積する（図29-6・7層）。さらにその下に土壌化した遺物包含層が2層堆積する（8・9層）。上層は中世の遺物を含み、層厚は0.15～0.2mある。下層は古墳時代後期の遺物を微量含み、層厚は0.1～0.5mあり、下面は植物の根による起伏が激しい。それらを除去すると基盤層となる。基盤層は調査区東側では褐色シルトの均質土層で西に行くにしたがって礫の含有量が多くなり砂礫質となる（10～12層）。基盤層上面の標高は67.2～67.6mで東から西に向かって低くなる。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

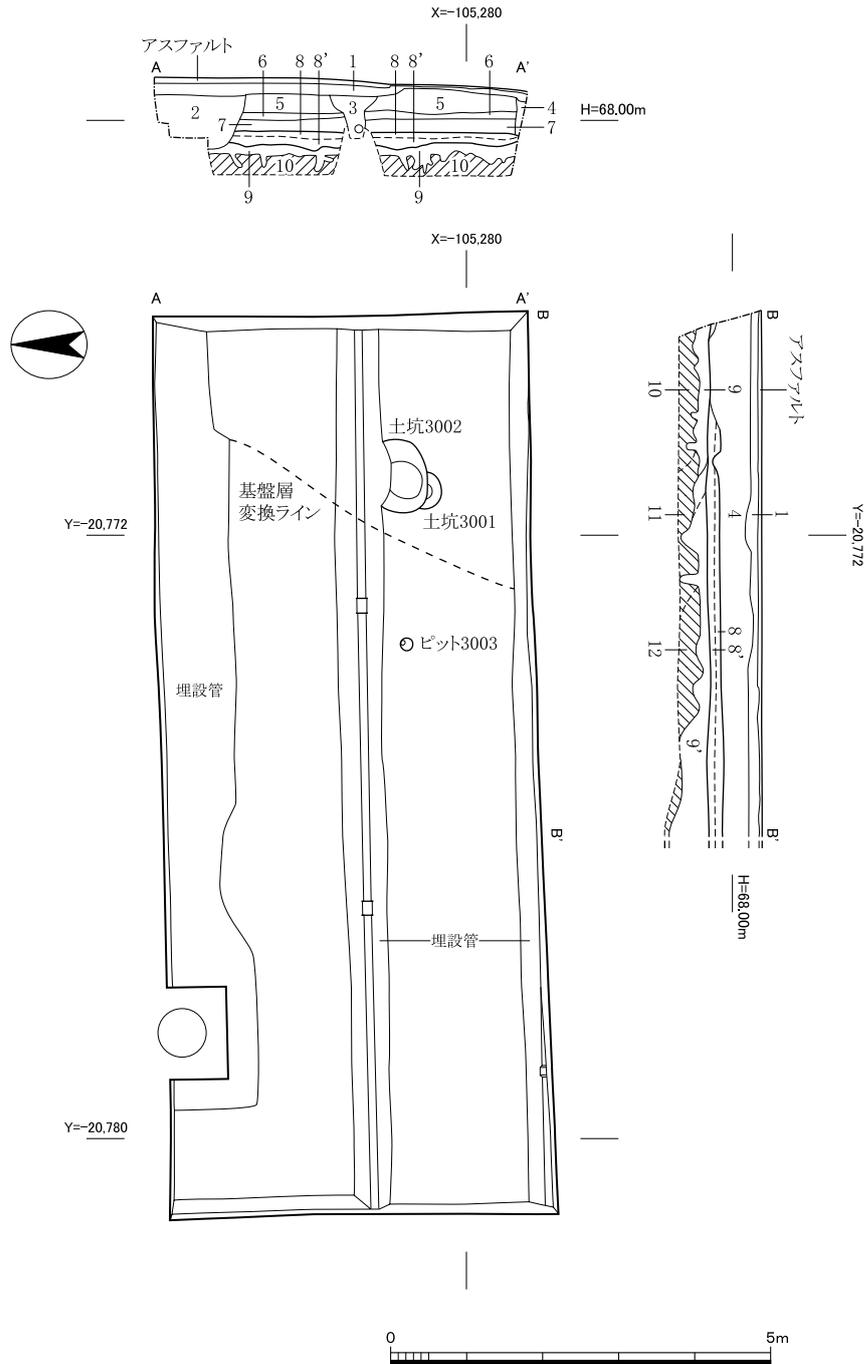
2）遺構（図29、図版5）

検出した遺構は土坑2基とピット1基のみである。土坑3001と3002は重複する。土坑3001は径約0.45m、深さは約0.2mある。埋土は10YR2/2黒褐色シルト～細砂である。土坑3002は径約0.9m、深さは約0.3mある。埋土は10YR2/3黒褐色シルト～細砂で、埋土から中世の遺物片が微量出土した。ピット3は径約0.15m、深さは約0.25mある。埋土は10YR2/2黒褐色シルト～細砂である。土坑3001とピット3からは遺物が出土しなかったが、埋土が古墳時代後期の遺物包含層（9層）と類似することから、古墳時代の遺構である可能性がある。

（4）4区の遺構

1）基本層序（図30）

調査地は大学ユーニシア館本館中庭の跡地で、現地表面の標高は68.4～68.5mでほぼ平坦であった。上から1～1.2mまでが現代盛土層、その下に現代の耕作土層が0.2～0.4m堆積する（図30-1・2・5層）。それらを除去すると基盤層となる。基盤層はY=-20,776より東は灰黄褐色泥砂の均質な土層（10層）で、それより西は粗砂から砂礫に変わる（8・9・12層）。基盤層上面の標高



- 1 碎石
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫混(現代埋設管)
- 3 2.5Y5/3黄褐色粗砂 φ1～10cmの礫混(現代埋設管)
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に黄灰色・明黄褐色粘土ブロック多量混(現代埋設管)
- 5 10YR3/2黒褐色細砂～粗砂 φ1～5cmの礫多量混(現代盛土)
- 6 10YR4/1褐灰色シルト～細砂 粗砂混(近代耕作土)
- 7 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 粗砂混 鉄分多(耕作床土)
- 8 10YR2/1黒色シルト～細砂 φ1～10cmの礫多量、炭化物多量混 上層鉄分沈着(8'層)(遺物包含層)
- 9 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量混、10YR4/4褐色シルトのブロック混(遺物包含層)、9'層はφ1～10cmの礫多量
- 10 10YR4/4褐色シルト(基盤層)
- 11 10YR4/4褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量混(基盤層)
- 12 10YR4/4褐色シルト～細砂 φ1～10cmの礫多量混(基盤層)

図29 3区遺構実測図 (1 : 100)

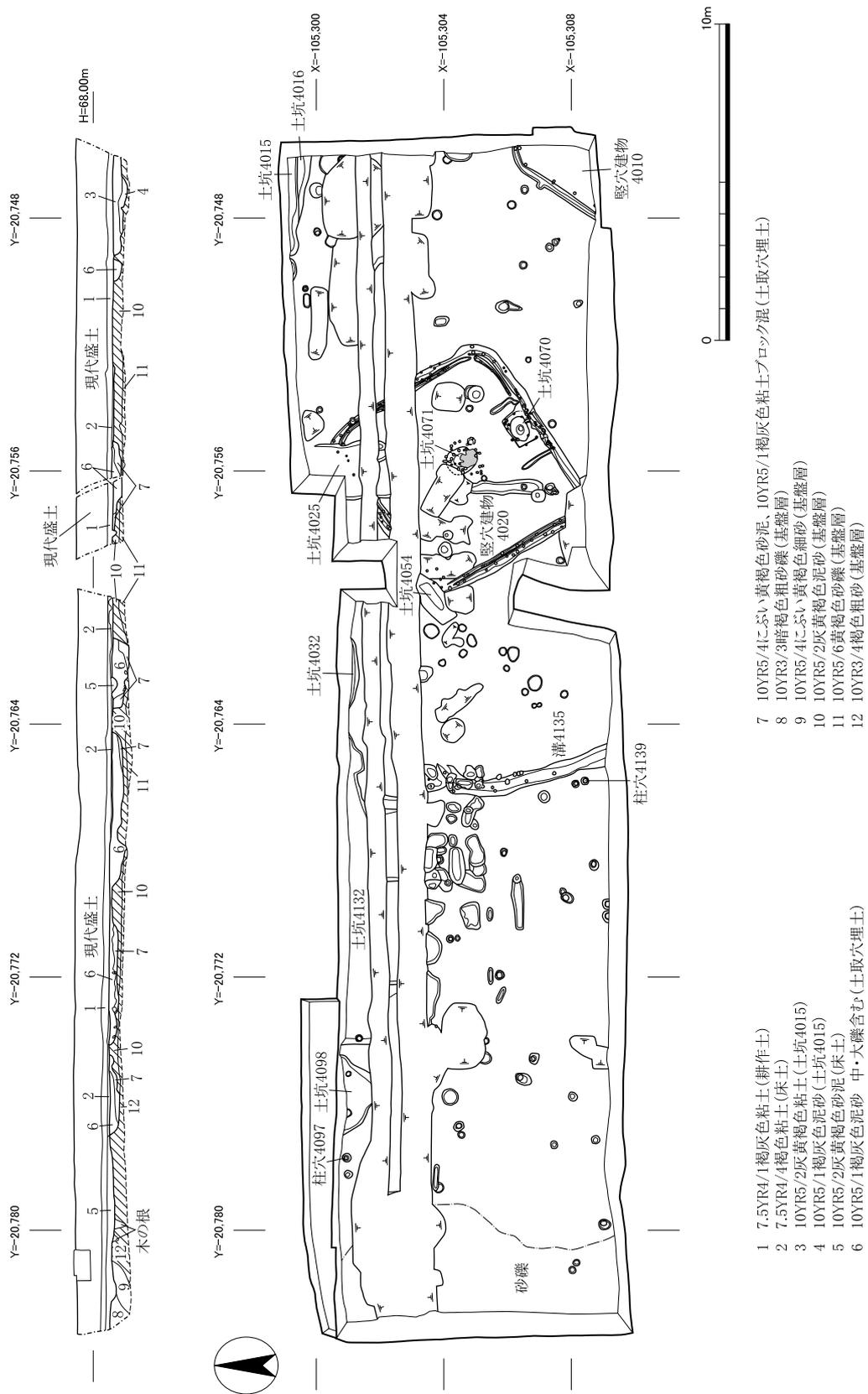


図30 4区遺構実測図(1:200)

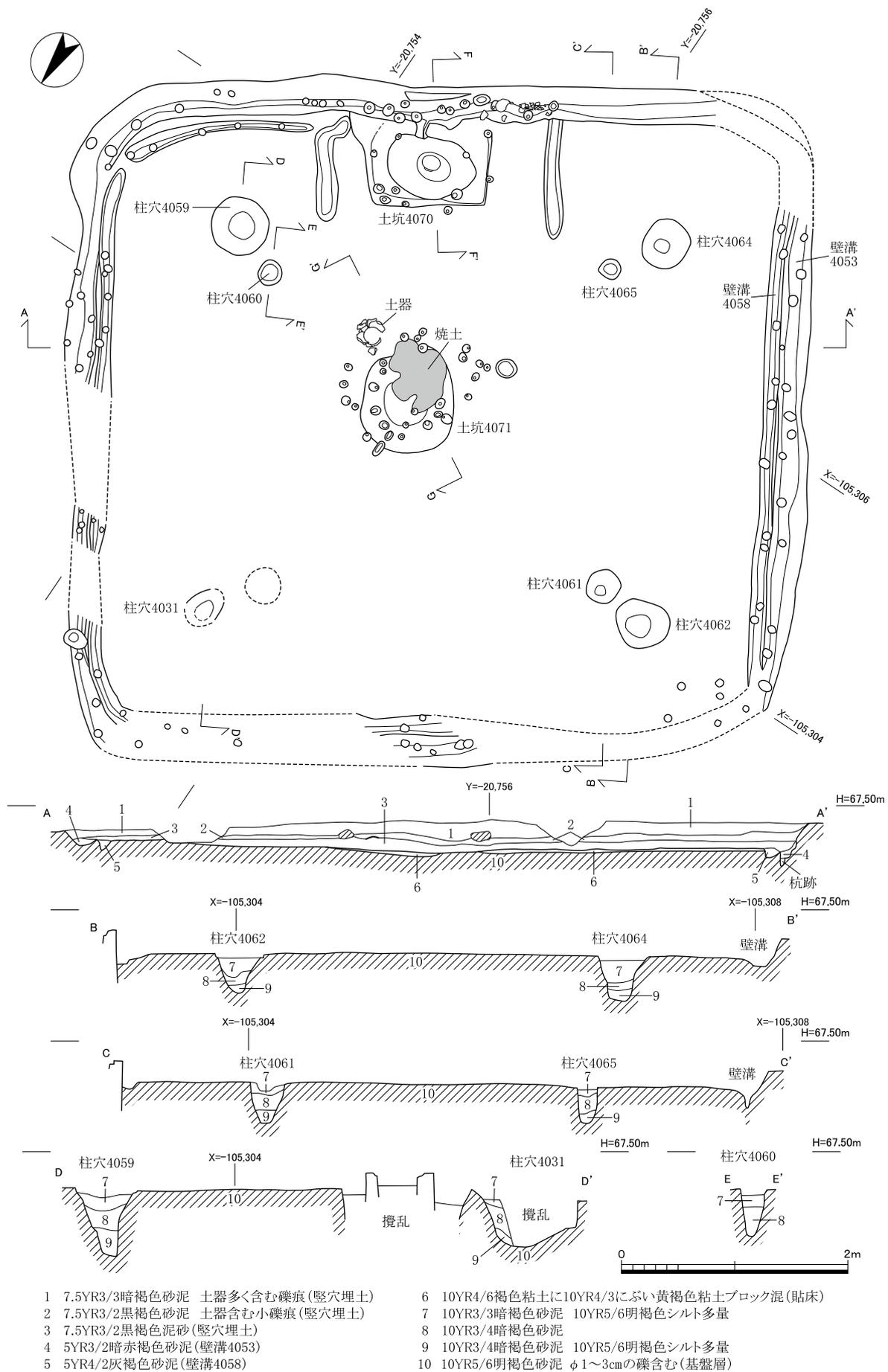


図31 竪穴建物4020実測図(1:50)

は調査区東端で67.4m、西端では67.5mで西がわずかに高い。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

2) 遺構 (図30、図版6)

検出した遺構総数は146基で、古墳時代と中世の遺構がある。古墳時代の遺構には、前期の竪穴建物2棟、ピット群、土坑、溝などがある。中世の遺構には、溝、土坑、ピットなどがある。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

中世土坑群 調査区北半で検出した。土坑4025・4032・4054・4098・4132が該当する。いずれも調査区壁際で検出し、調査区外の北に延びる様相を呈している。平面形は不整形である。深さは0.2～0.5mある。いずれも底は基盤層の灰褐色泥砂層下面で止まり、下層の黄褐色砂礫層には達していない。また底には凹凸があり壁を抉っていることなどから、良質泥砂層を採掘するための土取り穴と考えられる。

竪穴建物4020 (図31・32、図版7) 調査区東半で検出した。近現代の溝などにより一部削平を受けるものの、ほぼ全体を検出することができた。平面形状は隅丸方形で、方位は北に対して約40度西に振れる。壁溝が2重にめぐることから一度拡張が行われたと考えられる。この建物の埋土、床面直上、土坑などからは生駒西麓産の庄内式甕の破片が比較的多く出土している。以下に住居の変遷について古い順に1期、2期とし概要を述べる。

1期 平面形は隅丸長方形で、長辺約6.0m、短辺約5.5mある。壁溝は4058、主柱穴は柱穴4060・4061・4065が対応する。土坑4071が炉、土坑4070が貯蔵穴と考えられる。床面南半には厚さ0.02～0.04mの貼床を行っている(6層)。壁溝4058は幅0.1～0.25m、深さは0.05～0.15mある。溝内には杭跡とみられる小ピットの痕跡が多数残る。主柱穴は径0.2～0.3mで、深さは0.3～0.4mある。柱間はいずれも約2.9mある。建物のほぼ中央で検出し炉と考えられる土坑4071と南東辺壁際のほぼ中央に位置し貯蔵穴と考えられる土坑4070は2期まで踏襲されるため次に述べる。

2期 1期の建物を全体的に拡張している。平面形は隅丸長方形で、長辺約6.5m、短辺約6.0mある。壁溝は4053、主柱穴は柱穴4059・4064・4062・4031が対応する。土坑4061・4071は1期か

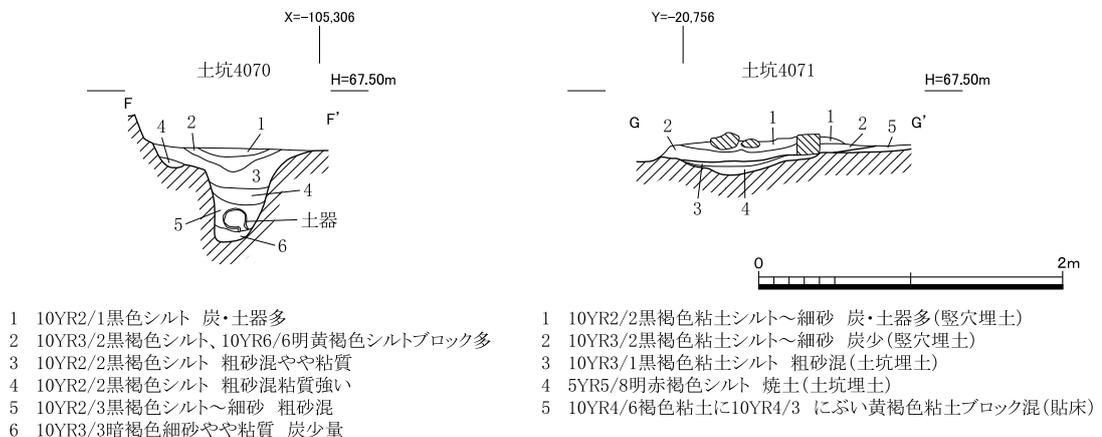
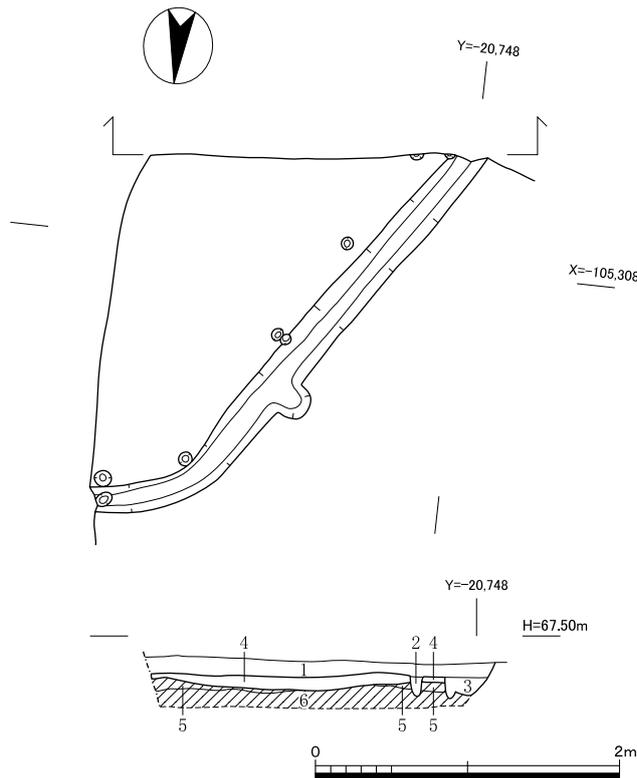


図32 竪穴建物4020断面図 (1:50)



- 1 7.5YR3/3暗褐色砂泥 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック混(竪穴埋土)
- 2 7.5YR3/4暗褐色砂泥 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック混(杭)
- 3 7.5YR3/4暗褐色砂泥 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック多混(壁溝)
- 4 10YR4/6褐色シルト 10YR4/3こぶい黄褐色粘土ブロック混(貼床)
- 5 10YR4/4褐色砂泥(基盤層)
- 6 10YR4/6褐色砂泥(基盤層)

図33 竪穴建物4010実測図(1:50)

ら踏襲される。床面直上から生駒西麓産の庄内式の甕などが出土した。壁溝は幅0.15~0.3m、深さは0.1~0.2mある。溝内には杭跡とみられる小ピットの痕跡が多数残る。主柱穴は径0.4~0.5m、深さは0.35~0.6mある。土坑6041は平面形は楕円形で、長辺約0.9m、短辺約0.8m、深さは約0.2mある。埋土は大きく2層に分かれ、下層は焼土が堆積し、床は被熱により赤変する。土坑4070は方形に一段掘り下げた中央に深さのある円形土坑を配置するものである。方形部分は長辺約1.0m、短辺約0.7mの長方形で、深さは約0.1mある。中央の円形土坑は長径約0.8m、短径約0.55m、深さは約0.5mある。円形土坑の底近くから完形の土師器直口壺1個体が倒置した状態で出土した。土坑4071と土坑4070付近には杭跡と思われる小ピットの痕跡が多数認められた。建物に伴うものであるかは不明である。

竪穴建物4010(図33、図版7) 調査区南東隅で検出した。大半が調査区外へと拡がるため、全体形は不明であるが、壁溝が鈍角に曲がることから多角形建物の可能性も考えられる。検出面から床面までの深さは約0.1mある。床面には厚さ0.05~0.1mの貼床を行っている。壁溝の幅は0.2~0.25m、深さは0.1~0.15mある。壁溝の内側には杭跡と思われる小ピットが並ぶ。径0.05~0.1m、深さは0.1~0.2mある。

溝4135 調査区のほぼ中央で検出した。南北方向の溝である。南北約7m分を検出した。方位は北に対して約15度西に振れる。断面形はU字状を呈し、幅0.4~0.5m、深さは約0.1mある。古墳時代前期のものと思われる土師器片が出土しているが、竪穴建物とは方位の振れが異なり、性格は不明である。

柱穴4097 調査区北西で検出した。平面円形で掘形の径約0.35m、柱当りから推測される柱径は約0.15m、深さは約0.25mある。埋土は10YR3/2黒褐色砂泥で、土師器の甕が出土した。

土坑4016 調査区北東端で検出した。東西約1.4m、南北約0.4m分を検出した。深さは約0.2mある。埋土は2.5Y4/5オリーブ褐色砂泥で、埋土から古墳時代後期の土師器片と須恵器甕が出土した。

(5) 5区の遺構

1) 基本層序 (図35・36)

調査地は小学校校舎と北庭の跡地である。校舎の基礎や埋設管の状況により調査区が4箇所に分かれたため、便宜上5-1区から5-4区とした。現地表面の標高は68.5～68.6mでほぼ平坦であった。上から0.8～1.2mまでが現代盛土層、その下に近現代の耕作土層が0.2～0.3m (図35-4・5層)、その下に中世の耕作土が0.05～0.15m堆積する(6層)。なお、X=-105,248からX=-105,253の間は2区でも検出された小学校建設前まで存在した東西方向の道路が検出され、コンクリート製のU字両側溝の間には路面の盛土が0.1～0.15m残る(7・8層)。調査区北半では中世耕作土の下に古墳時代から中世の遺物小片が混じる遺物包含層が0.1～0.2m堆積する(9層)。それらを除去するとにぶい黄褐色砂泥の基盤層となる(3層)。基盤層上面の標高は67.3～67.6mである。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

2) 遺構 (図34、図版8・9)

検出した遺構総数は225基で、時期は古墳時代から近世におよぶ。出土遺物が乏しく時期を決定できない遺構を除いて古墳時代の遺構がもっとも多く、竪穴建物5棟、土坑4基などがある。次いで奈良時代のものが多く、掘立柱建物1棟、土坑、柱穴などがある。中・近世の遺構には溝、ピットなどがあり耕作に伴うものと考えられる。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

奈良時代の遺構

掘立柱建物2 (図37、図版8) 5-1区南端で検出した。方位は正方位を向く。東西1間、南北2間分を検出した。柱間は約1.8mで、西に延び東西棟の建物になると考えられる。北東隅の柱穴5053は攪乱を受け、北肩のみ検出できた。柱穴5143は攪乱底で柱痕跡を検出できた。柱掘形は一辺0.6～0.9mの隅丸方形で、深さは0.5～0.6mある。柱痕跡から推測される柱径は0.2～0.25mある。柱穴5050・5052掘形、柱穴5051柱当りから奈良時代の須恵器杯などが出土した。

柱穴群 (図版9) 5-3区南半で柱穴を多数検出した。柱掘形は一辺0.5～0.65mの隅丸方形で、深さは0.3～0.55mある。柱痕跡から推測される柱径は0.15～0.2mある。掘形埋土から奈良時代から平安時代のものと考えられる須恵器杯などが出土したが、建物としてのまとまりは捉えることができなかった。ピット5059からは石皿が出土した。

ピット群 5-1区の掘立柱建物2の北側でピットを多数検出した。直径0.2～0.3mの円形で、深さは0.1～0.2mある。ピット5079から奈良時代の須恵器杯が、ピット5213からは平瓶が出土したが、建物や柱列としてのまとまりは捉えることができなかった。

古墳時代後期の遺構

土坑5086 (図38) 5-1区中央で検出した。平面形は楕円形で長径約1.85m、短径約1.5m、深さは約0.25mある。断面形は浅いすり鉢状を呈する。埋土には炭化物と焼土が多量に混じり、底面の一部は被熱により赤変する。古墳時代後期の土師器小片が出土した。遺物も二次的に火を受け

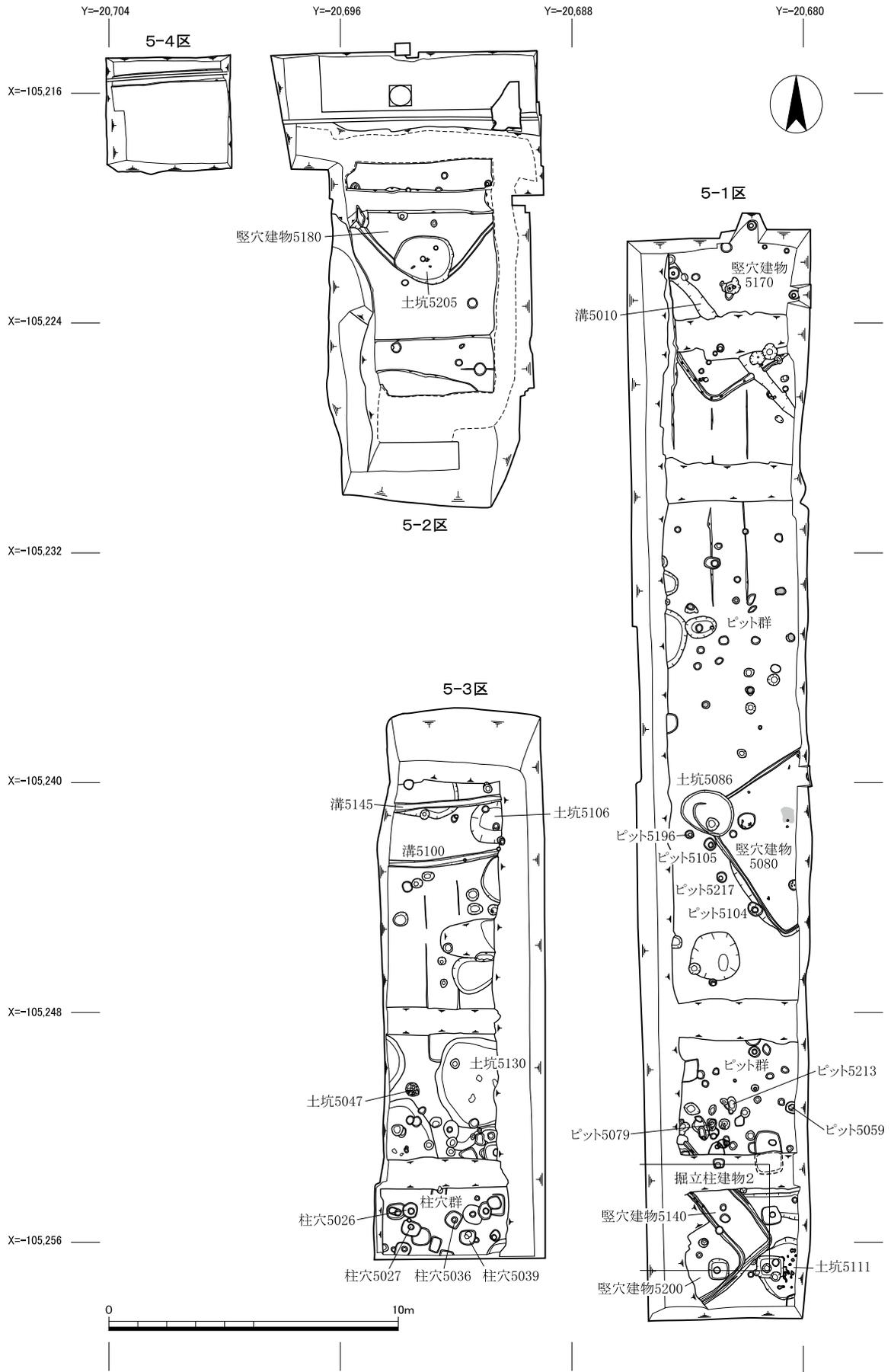
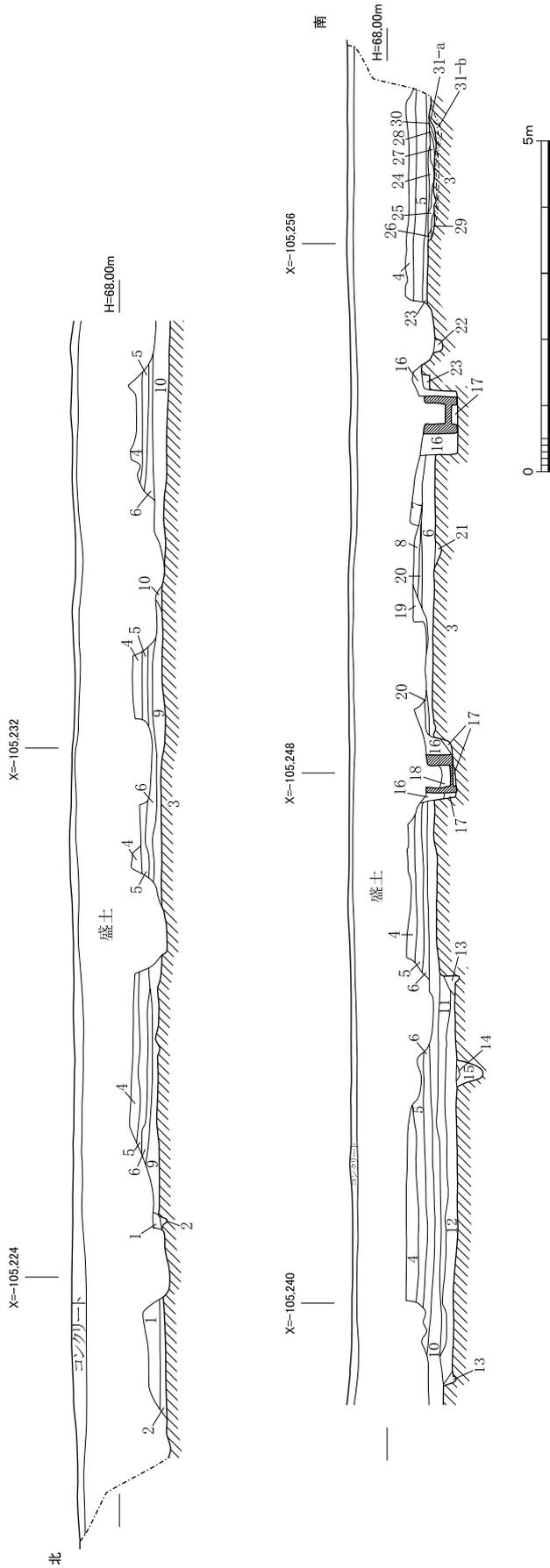


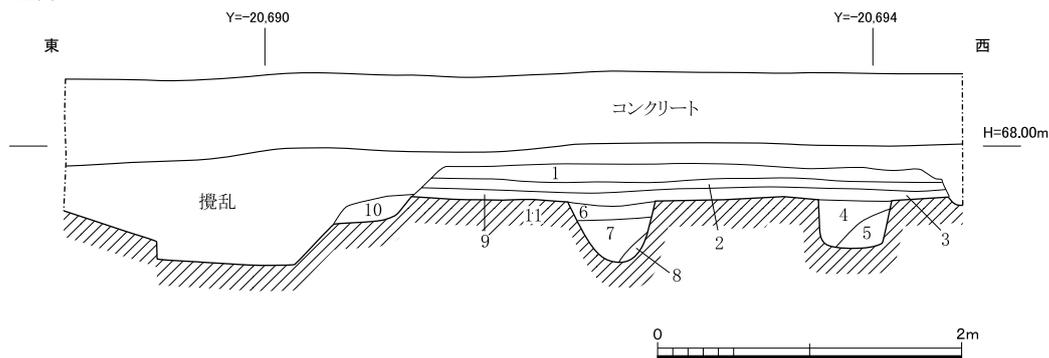
図34 5区遺構平面図 (1 : 200)



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥 φ0.2~2cmの礫少量混
- 2 10YR2/3黒褐色砂泥 土師器片・灰、φ1~4cmの礫少量混 (竪穴5170埋土)
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (基盤層)
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 炭少量混 (旧耕作土層)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 10YR4/4褐色砂泥少量混 φ0.2~5cmの礫混 (旧耕作土層)
- 6 2.5Y5/1黄灰色砂泥 炭少量混 (中世の耕作土層)
- 7 10YR5/2灰黄褐色シルト~細砂 炭化物少量混 (現代側溝掘形・路面)
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色シルト~細砂 φ1~3cmの礫少量混 (現代路面)
- 9 10YR3/3~3/4暗褐色砂泥 土師器片微量混 φ7cmまでの礫少量混
- 10 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ10cmまでの礫微量混
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥 10YR3/4暗褐色砂泥微量混 (竪穴5080)
- 12 10YR2/2黒褐色砂泥 10YR3/4暗褐色砂泥微量、土師器片・炭中量、φ13cmまでの礫少量混 (竪穴5080)
- 13 10YR3/3暗褐色砂泥 10YR2/2黒褐色砂泥中量、土師器片・炭少量混 (竪穴5080)
- 14 10YR3/3暗褐色砂泥 土師器片少量混 (主柱穴5179)
- 15 10YR3/2黒褐色砂泥 (主柱穴5179)
- 16 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 (現代側溝掘形)
- 17 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (現代側溝掘形)
- 18 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (現代側溝埋土)
- 19 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ4cmまでの礫少量混
- 20 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (柱穴5059)
- 21 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土師器片少量、炭微量混 (ピット5056)
- 22 10YR3/2黒褐色砂泥 土師器片微量混 (中世の耕作土層)
- 23 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭少量混、5YR4/6赤褐色焼土微量混 (土坑5111)
- 24 10YR3/3暗褐色砂泥 炭少量混、5YR4/6赤褐色焼土微量混 (土坑5111)
- 25 10YR3/1黒褐色砂泥 炭微量混、5YR4/6赤褐色焼土少量混 (土坑5111)
- 26 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭少量混 (土坑5111)
- 27 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑5111)
- 28 10YR3/2黒褐色砂泥 炭微量混 (土坑5111)
- 29 10YR3/2黒褐色砂泥 土師器片微量混、5YR4/6赤褐色焼土少量混 (土坑5111)
- 30 10YR3/4暗褐色砂泥 炭少量混、5YR4/6赤褐色焼土中量混 (土坑5111)
- 31a 5YR4/6赤褐色砂泥 熟変 (基盤層)
- 31b 7.5Y4/6褐色砂泥 熟変 10YR5/4黄褐色砂泥中量混 (基盤層)

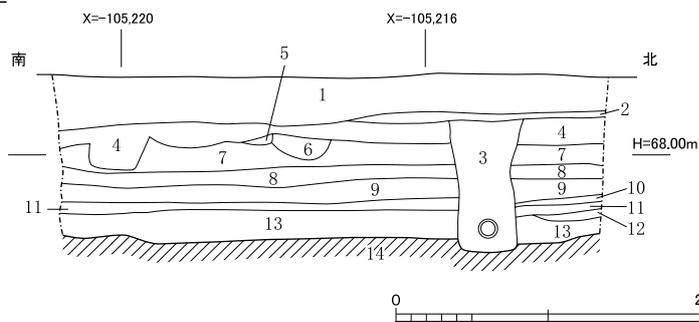
図35 5-1区東壁断面図 (1:100)

5-3区南壁



- 1 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂 炭微量混
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土師器片少量混
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 φ10cmまでの礫微量混
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 10YR4/4 褐色砂泥ブロック混、土師器片少量混(柱穴5030)
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥(柱穴5030)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭微量混(柱穴5032)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(柱穴5032)
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(柱穴5032)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 10 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(基盤層)

5-4区西壁



- 1 2.5Y3/1 黒褐色泥砂(現代盛土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂礫 φ0.2～2cmの礫少量混(現代盛土)
- 3 下水管掘形
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥中量混(現代盛土)
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥やや粘質 10YR3/2 黒褐色砂泥ブロック混、炭微量混
- 6 鉄管掘形
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭少量混(旧耕作土層)
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 10YR4/4 褐色砂泥少量混 φ0.2～5cmの礫少量混(旧耕作土層)
- 9 2.5Y5/1 黄灰色砂泥(中世の耕作土層)
- 10 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 土師器片少量混
- 11 10YR3/3 暗褐色砂泥 10YR3/4 暗褐色砂泥中量混、土師器片少量混(鉄分沈着する)
- 12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土師器片微量混、φ0.2～0.6cmの礫中量混(中世の耕作土層)
- 13 10YR2/2 黒褐色砂泥 φ0.2～2cmの礫少量混
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(基盤層)

図36 5-3区南壁・5-4区西壁断面図(1:50)

赤変しているものが多い。

土坑5106(図38、図版9) 5-3区北東部で検出した。東半は攪乱を受ける。検出長は東西約1.0m、南北約1.2m、深さは約0.15mある。底は平坦で断面形は逆台形状を呈する。埋土に不整形な10YR8/1灰白色から10YR6/8明黄褐色の粘土塊が多量に混じる。土坑底面は被熱による赤変が認められないことから、粘土を貯蔵する施設であった可能性がある。粘土塊上面からは古墳時代後期の土師器甕や高杯などの小片や自然石が多数散らばった状態で出土した。

土坑5130(図38) 5-3区東側で検出した。東半は攪乱を受ける。検出長は東西約2.3m、南北約3.1mで、深さは約0.2mある。底は平坦である。埋土から径0.2～0.3mの河原石や古墳時代後

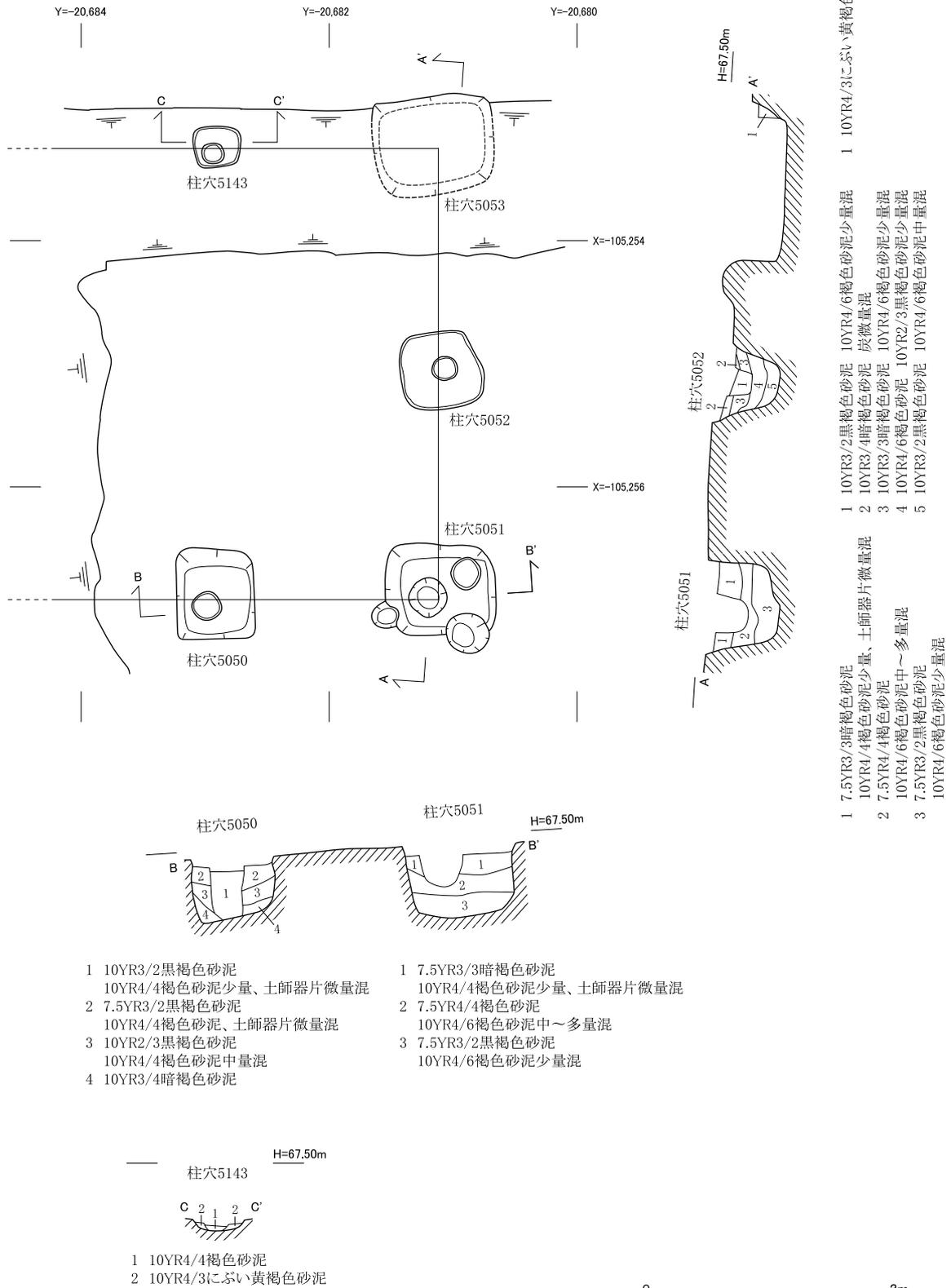
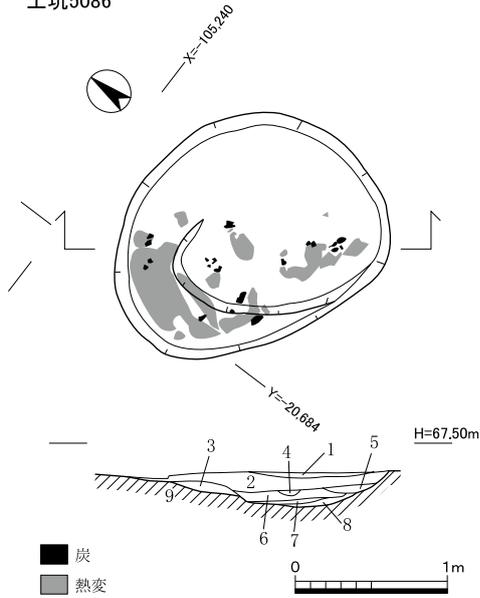


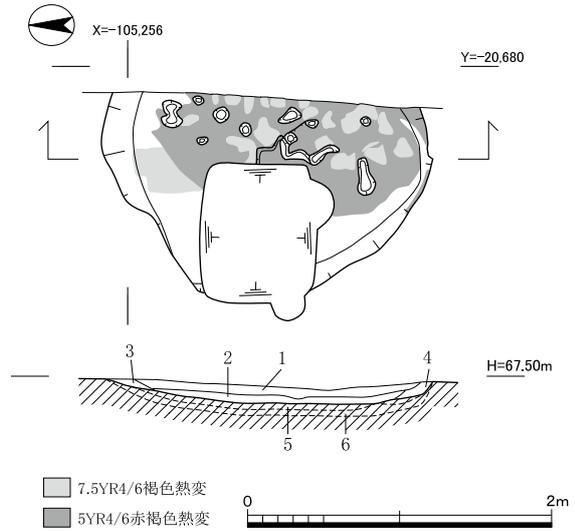
図37 掘立柱建物2実測図 (1 : 50)

土坑5086



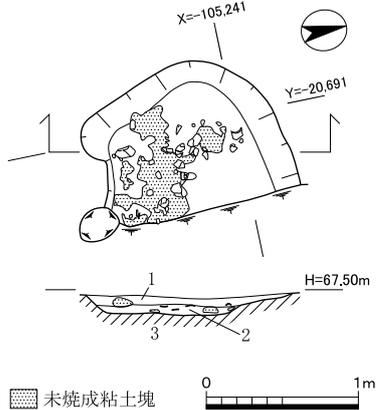
- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 土師器片・炭少量混
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 炭多量混
- 3 10YR3/1黒褐色砂泥 5YR4/4こぶい赤褐色焼土・炭多量混
- 4 10YR2/3黒褐色砂泥 炭少量混
- 5 10YR2/3黒褐色砂泥 炭中量混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥 5YR4/4こぶい赤褐色焼土・炭多量混
- 7 10YR4/4褐色砂泥 土師器片混
- 8 10YR3/2黒褐色砂泥 焼土・炭混
- 9 10YR4/4褐色砂泥

土坑5111



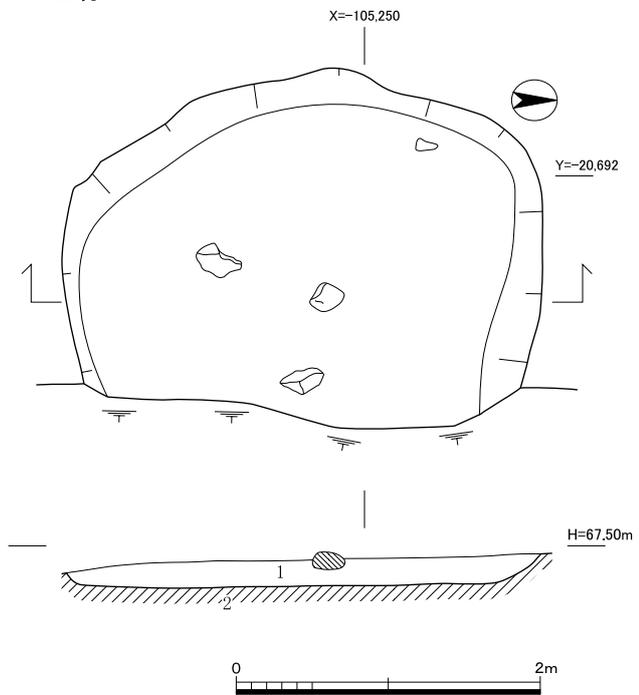
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥 10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混 炭少量混
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 炭少量、土師器片微量混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混
- 4 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥 10YR4/4褐色砂泥少量混
- 5 5YR4/6赤褐色砂泥 熱変(基盤層)
- 6 7.5YR4/6褐色砂泥 熱変(基盤層)

土坑5106



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥 土師器片混
- 3 10YR5/6黄褐色砂泥(基盤層)

土坑5130



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 縮まっている 土師器片混
- 2 10YR4/6褐色砂泥(基盤層)

図38 土坑5086・5111・5106・5130実測図(1:50)

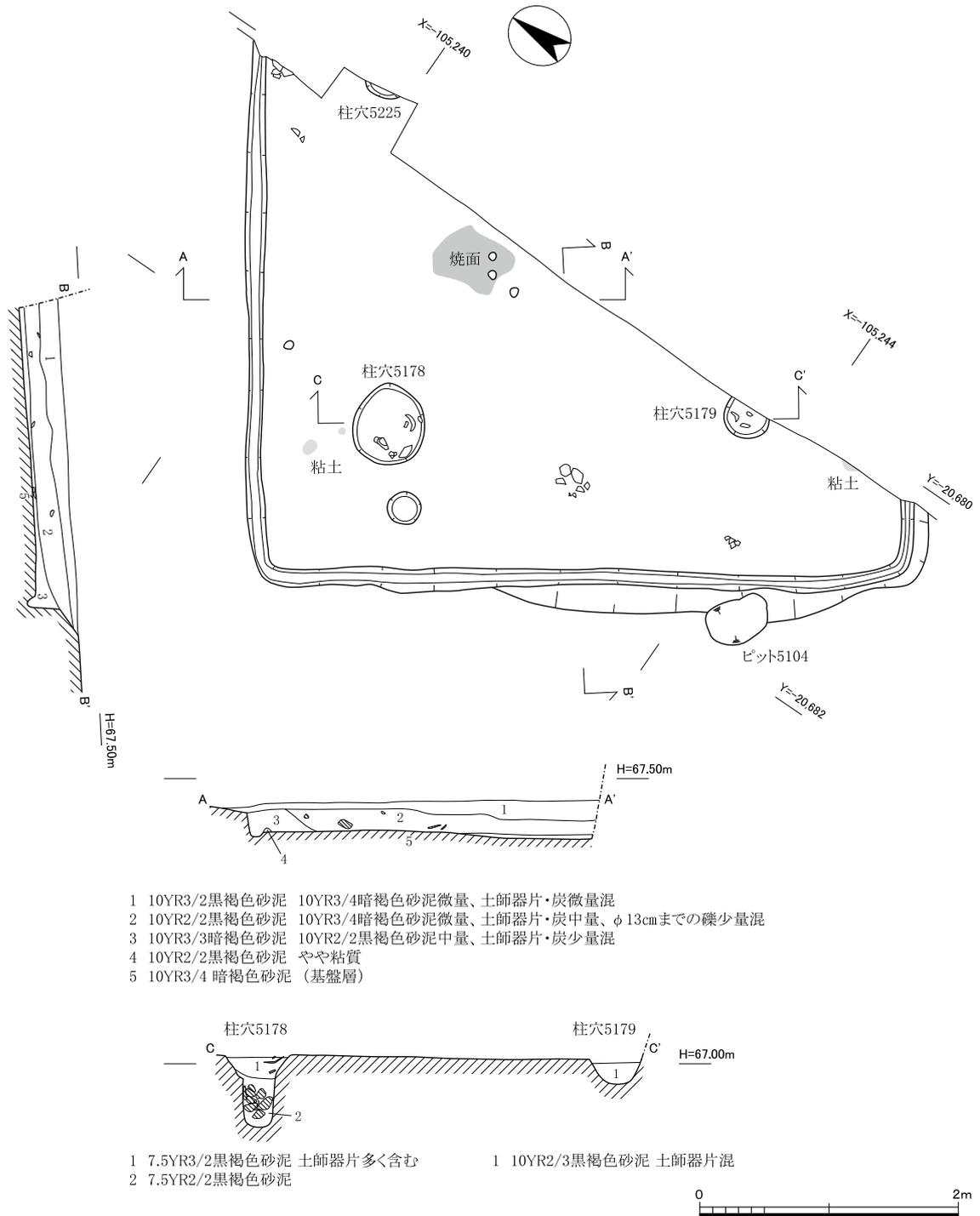
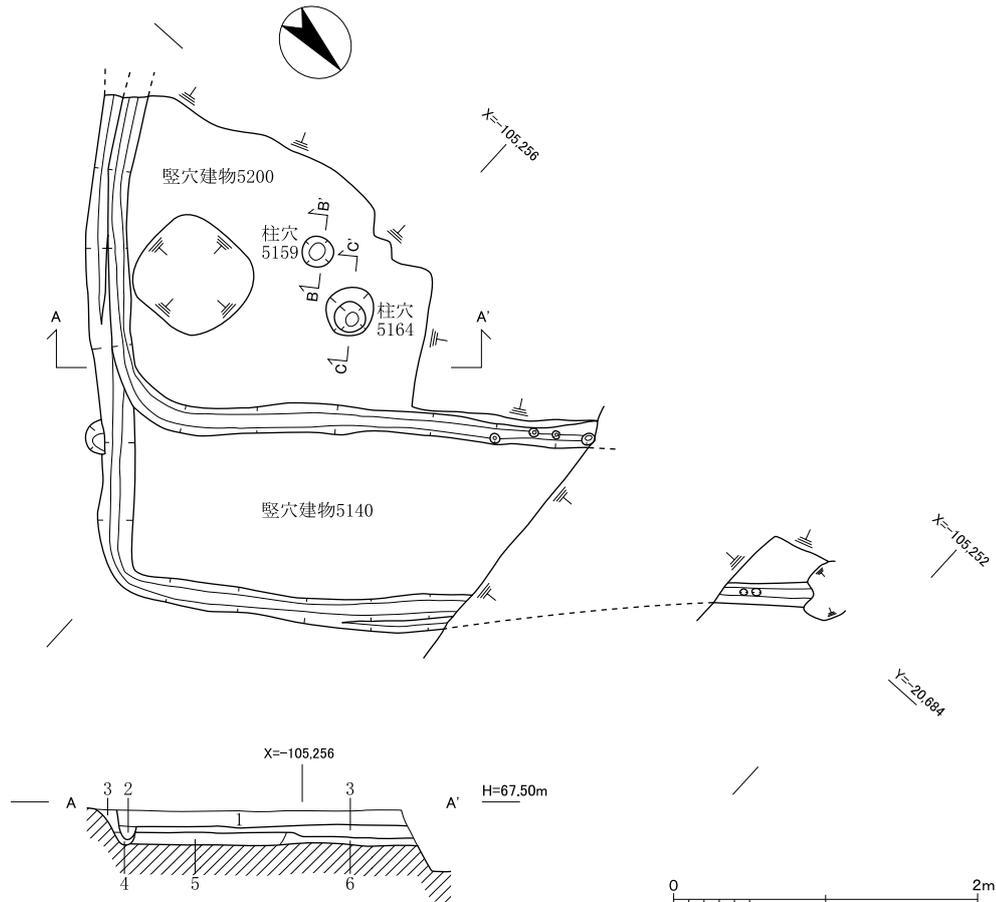


図39 竪穴建物5080実測図(1:50)

期の土師器甕・高杯、須恵器杯、鉢滓などが出土した。

溝5010 5-1区北部で検出した。北西から南東にはしる溝で検出長は約7.0m、幅約0.5m、深さは約0.15mある。断面形は逆台形状を呈し、埋土は上層が10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、下層が7.5YR2/2黒褐色砂泥である。埋土から古墳時代後期の須恵器小片が出土した。

溝5100 5-3区北半で検出した。東西方向の溝で、検出長は約3.7m、幅0.2~0.25m、深さは0.03~0.1mある。断面形は逆台形状を呈する。埋土は10YR4/2灰黄褐色砂泥である。



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 土師器片・炭混 (竪穴5200埋土)
- 2 10YR4/4褐色砂泥 10YR3/3暗褐色砂泥少量混 (竪穴5200壁溝)
- 3 10YR4/6褐色砂泥 (竪穴5140埋土)
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 (竪穴5140壁溝)
- 5 10YR3/2~3/3黒褐色～暗褐色砂泥 10YR4/6褐色砂泥山ブロック少量混 (竪穴5140貼床)
- 6 10YR4/6褐色砂泥 10YR3/3暗褐色砂泥中量混 (竪穴5140貼床)
- 7 10YR4/6褐色砂泥 (基盤層)

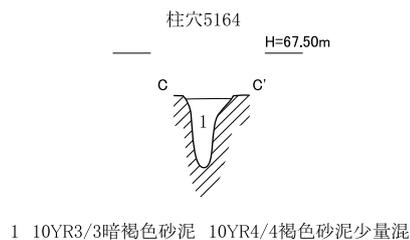
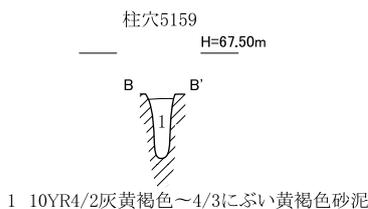
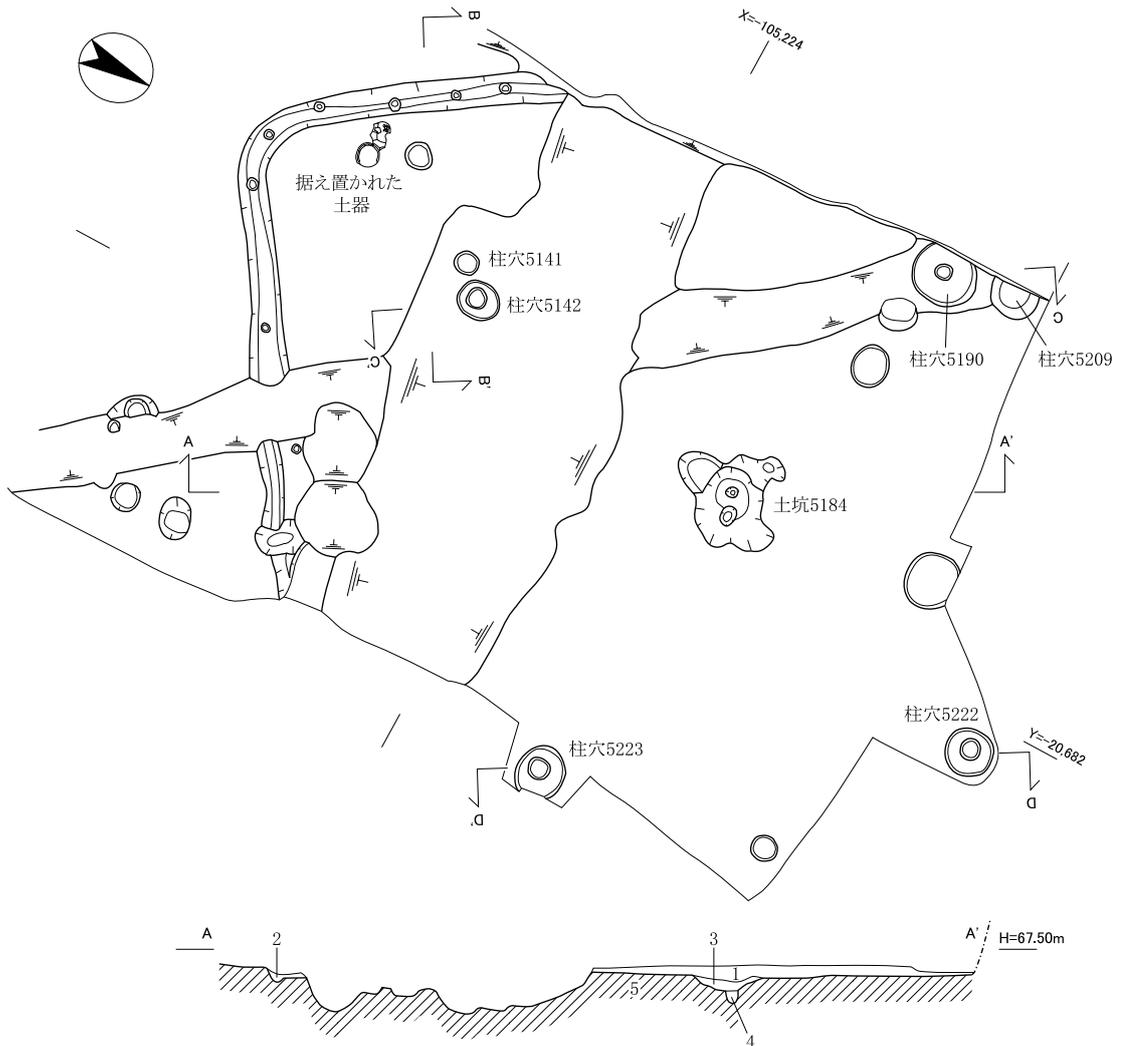


図40 竪穴建物5140・5200実測図 (1 : 50)

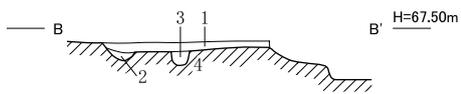
溝5145 5-3区北半で検出した。溝5100の北約2mにあり、溝5100とほぼ並行する。検出長は約3.7m、幅0.2～0.3m、深さは0.07～0.12mある。断面形は逆台形状を呈する。10YR4/2灰黄褐色砂泥で遺物は出土しなかったが、古墳時代後期の遺物を含む土坑5106を削平するため、古墳時代後期以降のものと考えられる。

古墳時代前期の遺構

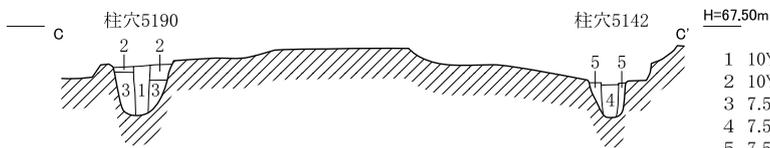
竪穴建物5080 (図39、図版10) 5-1区中央部で検出した。東半は調査区外に延びるが、平面形は方形で、残存する一辺の長さは約5mある。方位は北に対して約40度西に振れる。検出面か



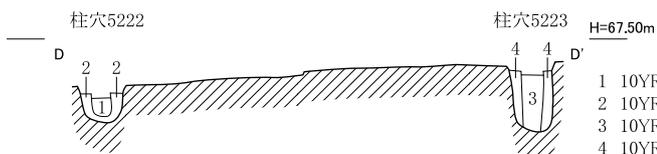
- | | |
|--|-------------------------|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 土師器片・φ1~4cmの礫少量混 | 4 10YR3/3暗褐色砂泥 (土坑5184) |
| 2 10YR3/4暗褐色砂泥 地山ブロック混 (壁溝) | 5 10YR4/6褐色砂泥 (基盤層) |
| 3 10YR3/4暗褐色砂 2.5YR3/3暗赤褐色焼土少量混 (土坑5184) | |



- | |
|-----------------------------------|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 土師器片・φ1~3cmの礫・炭少量混 |
| 2 10YR3/3暗褐色砂泥 (壁溝) |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 4 10YR4/6褐色砂泥 (基盤層) |



- | |
|-------------------------|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 土師器片・小礫混 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 |
| 3 7.5YR3/3暗褐色砂泥 |
| 4 7.5YR2/2黒褐色砂泥 |
| 5 7.5YR4/4褐色砂泥 |



- | |
|----------------|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 2 10YR3/1黒褐色砂泥 |
| 3 10YR2/2黒褐色砂泥 |
| 4 10YR4/4褐色砂泥 |



図41 竪穴建物5170実測図 (1 : 50)

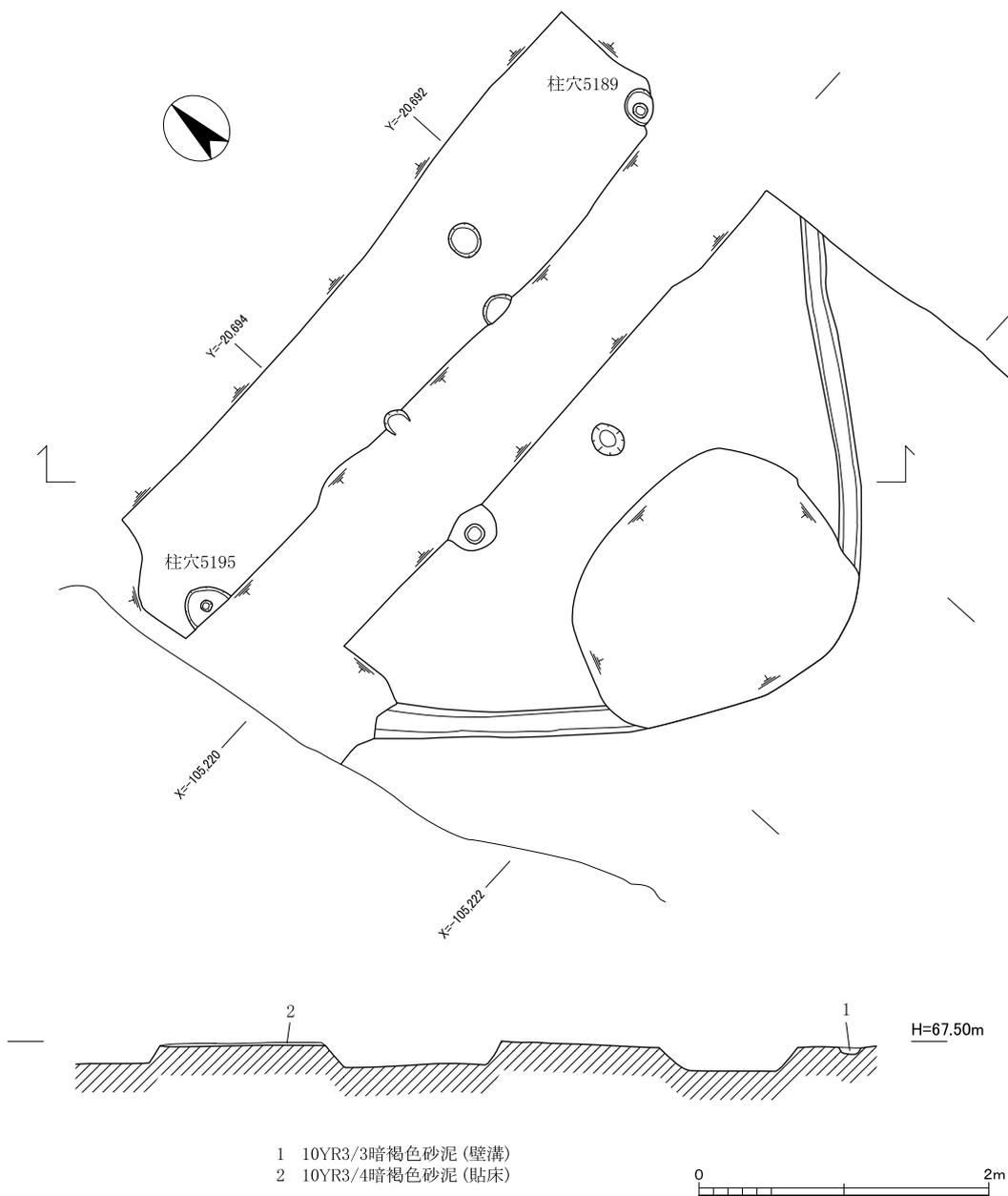


図42 竪穴建物5180実測図 (1 : 50)

ら床面までの深さは約0.25mある。埋土からは古墳時代前期の土器がややまとまって出土した。床面には径0.07～0.15mの不整形な5YR6/1灰色の粘土塊が所々に貼り付いていた。壁溝は幅0.1～0.15m、深さは0.05～0.07mある。床面で検出した柱穴5178・5179・5225は主柱穴と考えられる。径0.3～0.55m、深さは0.15～0.55mある。柱穴5178は径0.1～0.15mの河原石が詰まり、その上部に古墳時代前期の土器器小型丸底壺や高杯が横置きされていた。柱穴5179からも小型丸底壺が出土している。住居床面の中央床面では、被熱により地面が赤変する箇所が認められた。不整形で径約0.6mあり、浅く凹み焼土が堆積していた。炉の可能性もある。

竪穴建物5200 (図40、図版10) 5-1区南端で検出した。方位は北に対して約40度西に振れる。竪穴建物5140と重複する。平面形は隅丸方形で一辺の長さは3m以上ある。壁溝は幅0.1～0.2

m、深さは約0.06mある。溝底では杭の痕跡と思われる小ピットが一部で見つかった。柱穴5159は主柱穴と考えられる。径約0.2m、深さは約0.4mある。

竪穴建物5140（図40、図版10） 5-1区南端で竪穴建物5200と重複して見つかった。竪穴建物5200に削平を受ける。平面形は方形で一辺の長さは4.5m以上ある。方位は北に対して約40度西に振れる。床面には厚さ0.05～0.08mの貼床を行っている。壁溝は幅0.15～0.2m、深さは約0.05mある。柱穴5164は主柱穴と考えられる。径約0.3m、深さは約0.5mある。

竪穴建物5170（図41、図版11） 5-1区北端で検出した。平面形は隅丸方形で、一辺の長さは5.5m以上ある。方位は北に対して約30度西に振れる。建物南端の床面上では、古墳時代前期の土師器手焙形土器と壺が据えられた状態で出土した。壁溝は幅0.15～0.2m、深さは約0.05mある。溝底には杭跡と思われる径約0.08m、深さ約0.05mの小ピットが不規則な間隔で並ぶ。柱穴5142・5190・5222・5223が主柱穴と考えられる。柱掘形の径は0.3～0.45m、深さは0.3～0.4mある。柱痕跡から推測される柱径は0.1～0.15mある。柱穴5142と柱穴5190には近接して柱穴5141・5209があり、柱の建て替えがあった可能性がある。柱穴5141は径約0.15m、深さは約0.3mある。柱穴5209は径約0.3m、深さは約0.25mある。建物中央部では炉と考えられる土坑5184を検出した。不整形で最大径は約0.8m、深さは約0.05mある。埋土には焼土が混じる。土坑底では径0.05～0.1m、深さ約0.08mの小ピットが2基見つかった。

竪穴建物5180（図42、図版11） 5-2区北半で検出した。平面形は隅丸方形と考えられ、長径は5m以上ある。方位は北に対して約45度西に振れる。壁溝は幅0.15～0.2m、深さは0.05～0.06mある。柱穴5189と柱穴5195は主柱穴の可能性ある。径0.25～0.3m、深さは約0.1mある。

土坑5111（図38、図版8） 5-1区南東隅で検出した。東半は調査区外に広がる。検出長は東西約1.3m、南北約2.1m、深さは約0.1mある。底は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色泥砂を主体とし赤褐色と橙色の焼土塊が混じる。土坑壁、床ともに被熱により赤変する。土器も二次的に火を受けたものが多い。

ピット群 5-1区中央部では平面円形の柱穴を多数検出した。径約0.25～0.3m、深さは0.1m前後のものが多いが図34の平面図でグレートーンをかけたものは0.4～0.5mあった。建物としてのまとまりは捉えられなかったが、壁溝が削平された竪穴建物の主柱穴の可能性が残る。

（6）6区の遺構

1）基本層序（図44）

調査地は大学ユーニア館本館の跡地で、現地表面の標高は68.4～68.65mであった。上から0.4～0.6mまでが現代盛土層、その下に中世から近現代の耕作土層が0.3～0.45m堆積する。調査区北西端では耕作土の下に古墳時代の遺物が混じる遺物包含層が0.1～0.2m堆積する（図44-8・9層）。それらを除去するとにぶい黄褐色～褐色砂泥の基盤層となる。基盤層上面の標高は調査区北端で67.6m前後、南端では67.4m前後で北から南に低くなる。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

2) 遺構 (図43、図版12)

検出した遺構総数は23基で、古墳時代と奈良時代の遺構がある。古墳時代の遺構には、竪穴建物4棟などがある。奈良時代の遺構には掘立柱建物1棟などがある。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

掘立柱建物3 (図45、図版12) 調査区南東で検出した。攪乱が激しく、検出できたのは1間分の柱穴6001と6002のみである。方位は北に対して約40度西に振れる。柱間は約1.8mある。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺の長さは0.5～0.75m、深さは0.15～0.35mある。柱痕跡から推測される柱径は0.18～0.2mある。

竪穴建物6004 (図46、図版13) 調査区東で検出した。平面形は方形で、一辺の長さは4m以

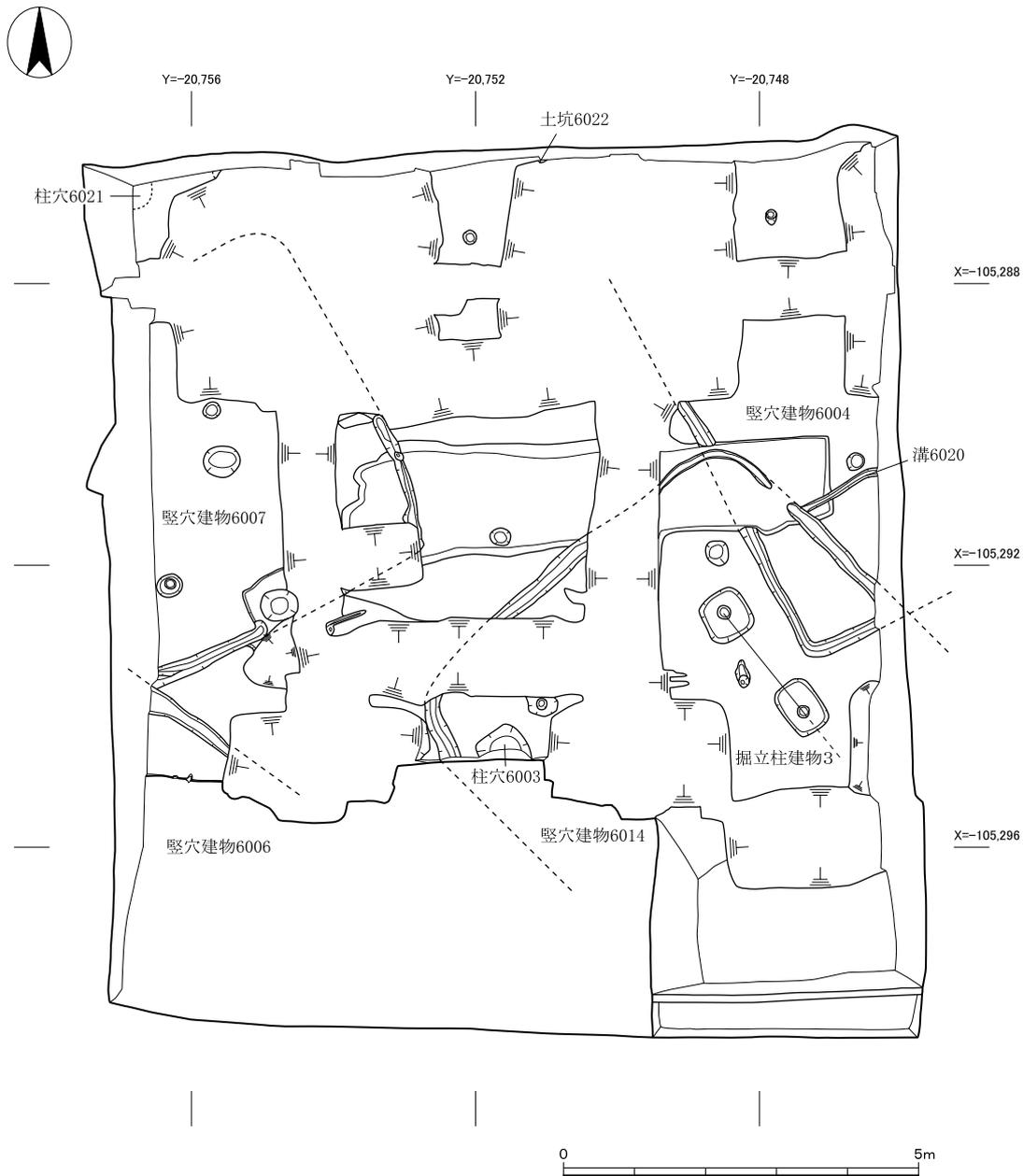
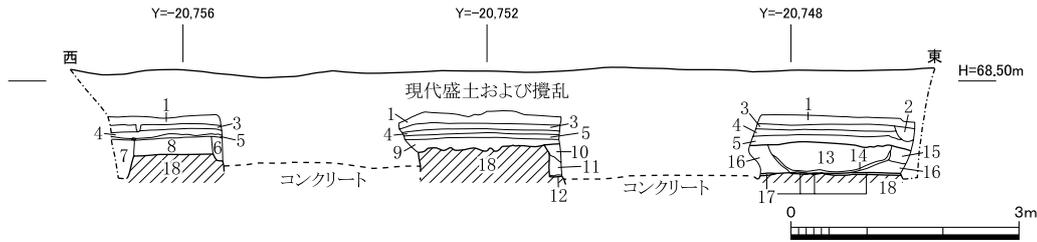


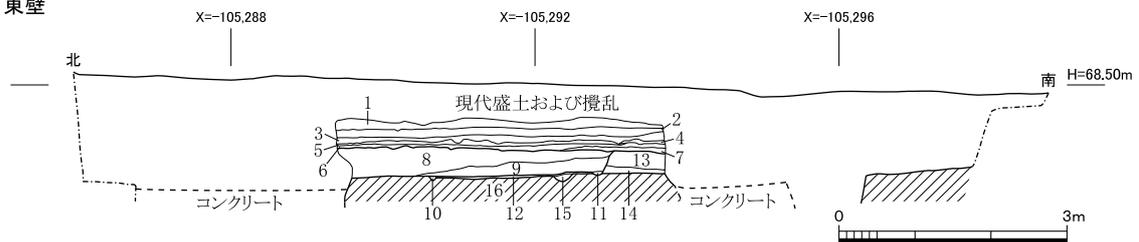
図43 6区遺構平面図 (1:100)

北壁



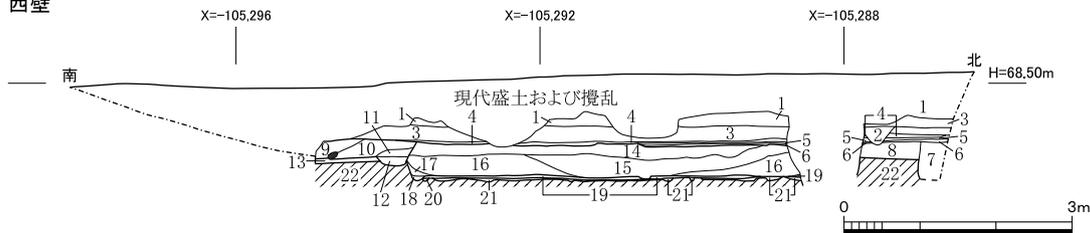
- | | |
|----------------------------------|---------------------------------------|
| 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥(近・現代耕作土) | 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土師片混(土坑6022) |
| 2 10YR5/2灰黄褐色色砂泥 | 11 10YR3/2黒褐色砂泥 炭混(土坑6022) |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥+ | 12 10YR4/4褐色砂泥(土坑6022) |
| 10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック状に含む(近世耕作土) | 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭・土師片混 |
| 4 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫混(中世耕作土) | 14 10YR3/4暗褐色砂泥 炭混 |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(中世耕作土) | 15 10YR3/2黒褐色砂泥土師片混(堅穴6004埋土) |
| 6 10YR4/6褐色砂泥 | 16 10YR3/2暗褐色砂泥 φ3cmの礫・土師片混(堅穴6004埋土) |
| 7 10YR4/4褐色砂泥 土師片混(柱穴6021) | 17 10YR3/4暗褐色砂泥(堅穴6004貼床) |
| 8 10YR3/4暗褐色砂泥 土師片混(遺物包含層) | 18 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(基盤層) |
| 9 10YR3/3暗褐色砂泥 土師片混(遺物包含層) | |

東壁



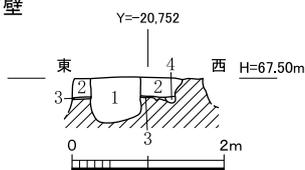
- | | |
|----------------------------------|--|
| 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥(近・現代耕作土) | 9 10YR2/3黒褐色砂泥(堅穴6004埋土) |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥+ | 10 10YR3/4暗褐色砂泥(溝6020) |
| 10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック状に含む(近世耕作土) | 11 10YR3/3暗褐色砂泥(堅穴6004壁溝) |
| 3 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫混(中世耕作土) | 12 10YR3/2黒褐色砂泥 土師片混(堅穴6004貼床) |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(中世耕作土) | 13 10YR3/2黒褐色砂泥 やや締まる 炭・土師片混(堅穴6014埋土) |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土師片混(中世耕作土) | 14 10YR3/3暗褐色砂泥 炭混(堅穴6014埋土) |
| 6 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・土師片混(床土) | 15 10YR3/3暗褐色砂泥(堅穴6014壁溝) |
| 7 10YR3/3暗褐色砂泥 土師片混 | 16 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(基盤層) |
| 8 10YR3/2黒褐色砂泥 土師片混(堅穴6004埋土) | |

西壁



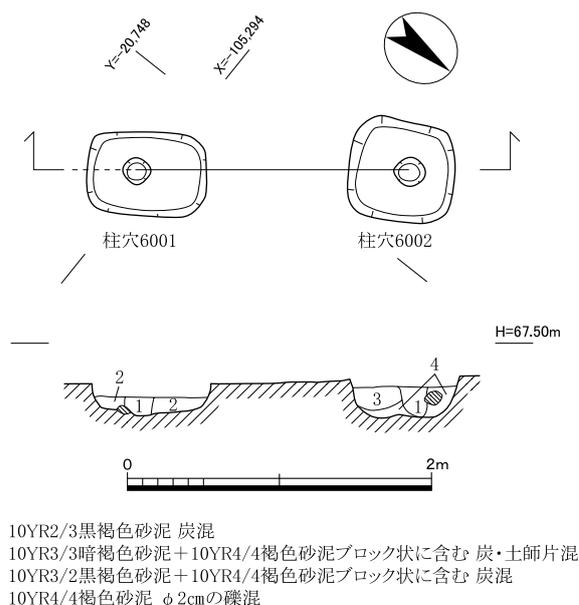
- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥(近世耕作土) | 12 10YR4/2灰黄褐色砂泥+ |
| 2 10YR6/2灰黄褐色砂泥(耕作溝) | 10YR7/4にぶい黄褐色砂泥ブロック状に含む(堅穴6006壁溝) |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥+ | 13 10YR3/4暗褐色砂泥(堅穴6006貼床) |
| 10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック状に含む(中世耕作土) | 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭混(堅穴6007埋土) |
| 4 10YR5/2灰黄褐色砂泥(中世) | 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥+10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 |
| 5 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫混(中世耕作土) | ブロック状に含む φ4cmの礫混(堅穴6007埋土) |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(中世耕作土) | 16 10YR4/4褐色砂泥(堅穴6007埋土) |
| 7 10YR4/4褐色砂泥 土師片混(柱穴6021) | 17 10YR3/3暗褐色砂泥 土師片混(堅穴6007埋土) |
| 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土師片混 φ4cmの礫混(遺物包含層) | 18 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cmの礫混(堅穴6007壁溝) |
| 9 10YR4/4褐色砂泥(堅穴6006埋土) | 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(堅穴6007貼床2) |
| 10 10YR3/3暗褐色砂泥(堅穴6006埋土) | 20 10YR4/6褐色砂泥(堅穴6007壁溝) |
| 11 10YR3/3暗褐色砂泥+ | 21 10YR4/4褐色砂泥 やや砂質(堅穴6007貼床1) |
| 10YR7/4にぶい黄褐色砂泥ブロック状に含む(堅穴6006埋土) | 22 10YR4/4褐色砂泥(基盤層) |

南壁



- | |
|---|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥 炭・土師片混(柱穴6003) |
| 2 10YR2/3黒褐色砂泥 土師片混 φ6cmまでの礫混(堅穴6014埋土) |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥(堅穴6014貼床) |
| 4 10YR2/2~2/3黒褐色砂泥 焼土混(堅穴6014壁溝) |

図44 6区断面図(1:100)



- 1 10YR2/3黒褐色砂泥 炭混
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥+10YR4/4褐色砂泥ブロック状に含む 炭・土師片混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR4/4褐色砂泥ブロック状に含む 炭混
- 4 10YR4/4褐色砂泥 φ2cmの礫混

図45 掘立柱建物3実測図 (1 : 50)

上ある。検出面から床面までの深さは0.3～0.4mある。南半のみ床面に厚さ0.02～0.04mの貼床を行っている(図44東壁12層)。一部、被熱により床面が赤変する箇所が認められた。壁溝は幅0.15～0.2m、深さは約0.05mある。床面で検出した柱穴6005は主柱穴と考えられる。径約0.25m、深さは約0.6mある。柱穴埋土最下層には基盤層のにぶい黄褐色砂泥を埋め戻している。柱の高さを調整するために入れた可能性がある。貼床掘り下げ後に北東から南西方向にはしる溝6020を検出した(図43)。幅約0.15m、深さは約0.05mあ

る。別の竪穴建物の壁溝の可能性はあるが、詳細は不明である。

竪穴建物6014(図47、図版12) 調査区東で検出した。竪穴建物6004に削平される竪穴建物である。平面形は隅丸方形で、一辺の長さは約5.7mある。方位は北に対して約45度西に振れる。検出面から床面までの深さは約0.15mある。床面には厚さ0.03～0.08mの貼床を行っている。壁溝は幅0.1～0.3m、深さは0.05～0.1mある。柱穴6015・6016は主柱穴と考えられる。径0.3～0.4m、深さは約0.4mある。

竪穴建物6006(図版13) 調査区南西部で検出した。竪穴建物6007を削平して成立している(図44西壁断面)。攪乱が激しく、平面形状は不明であるが、一辺の長さは1.4m以上ある。方位は北に対して西に約50度振れる。検出面から床面までの深さは約0.25mある。床面には厚さ約0.05mの貼床を行っている(図44西壁13層)。壁溝は幅0.2～0.3m、深さは約0.1mある。

竪穴建物6007(図48、図版13) 調査区西で検出した。平面形は隅丸方形、もしくは方形と考えられる。一辺の長さは4m以上ある。方位は北に対して約25度西に振れる。検出面から床面までの深さは0.1～0.4mある。床面には厚さ0.02～0.07mの貼床を行っている。この貼床は2層に分かれる箇所があるため(図48-7・8層)、作り替えを行った可能性がある。床面上では焼土塊を2箇所検出した。ともに平面形は円形で、焼土塊6012は径約0.8m、厚さは約0.05mある。床面は焼けていなかった。焼土塊6013は径約0.3m、厚さは約0.05mある。焼土の他、炭・灰が堆積するが、床面は焼けていなかった。壁溝は幅0.1～0.3m、深さは約0.05mある。床面上で2基の柱穴6008・6009を検出した。主柱穴の可能性はある。径0.25～0.35m、深さは0.1～0.2mある。床面上で検出した土坑6010は炉の可能性はある。径約0.5m、深さは約0.1mある。埋土下層には炭化物・焼土が混じり、上層には焼土が混じる。土坑の南側壁は被熱により赤変する。南側壁際では貯蔵穴と考えられる土坑6011を検出した。方形に一段掘り下げた中央に円形の深さのある土坑を配置するものである。方形部分は長径0.7m以上、短径は約0.5m、深さは約0.15mある。円形土坑は径約

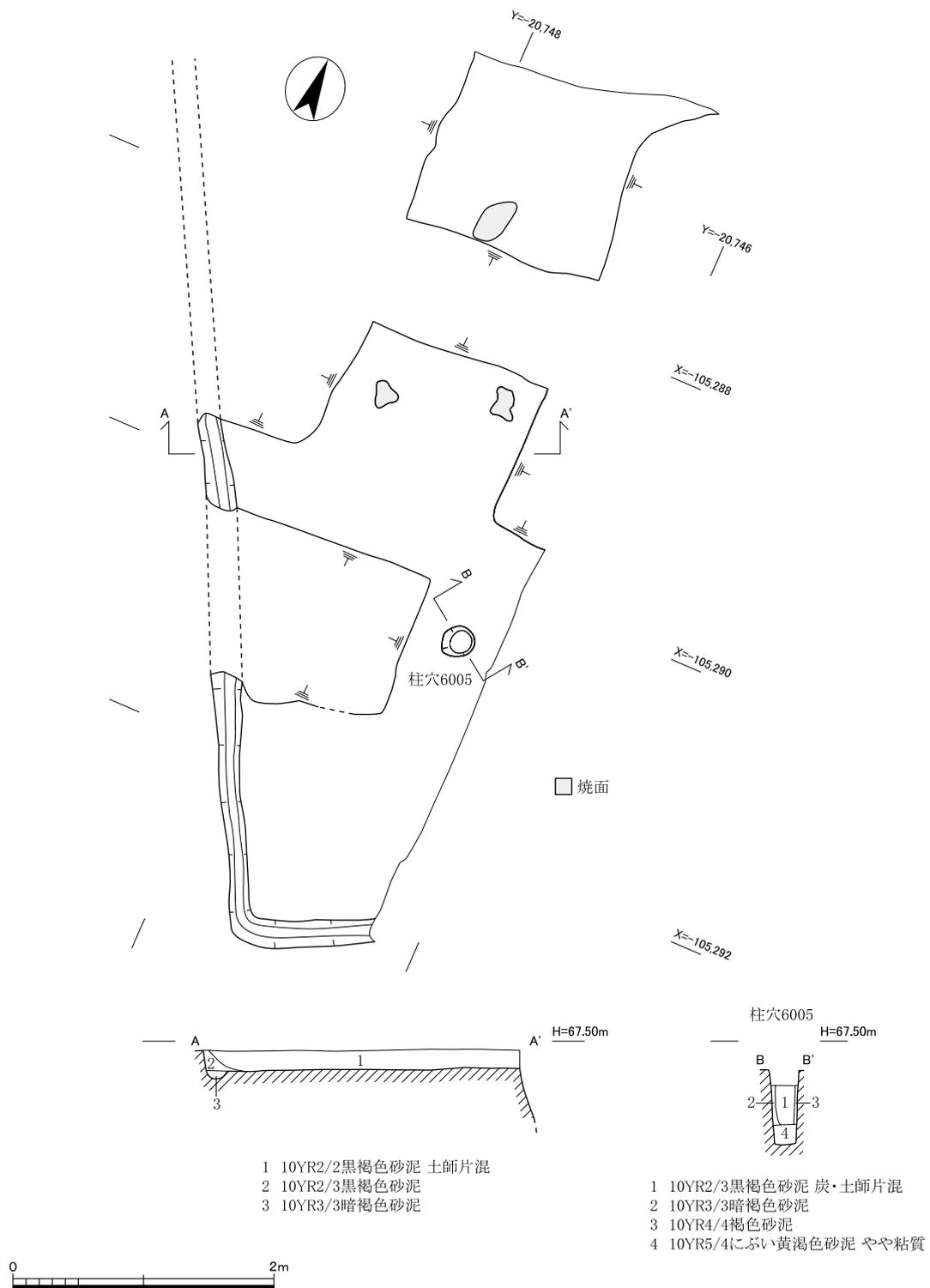
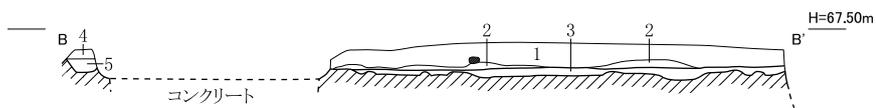
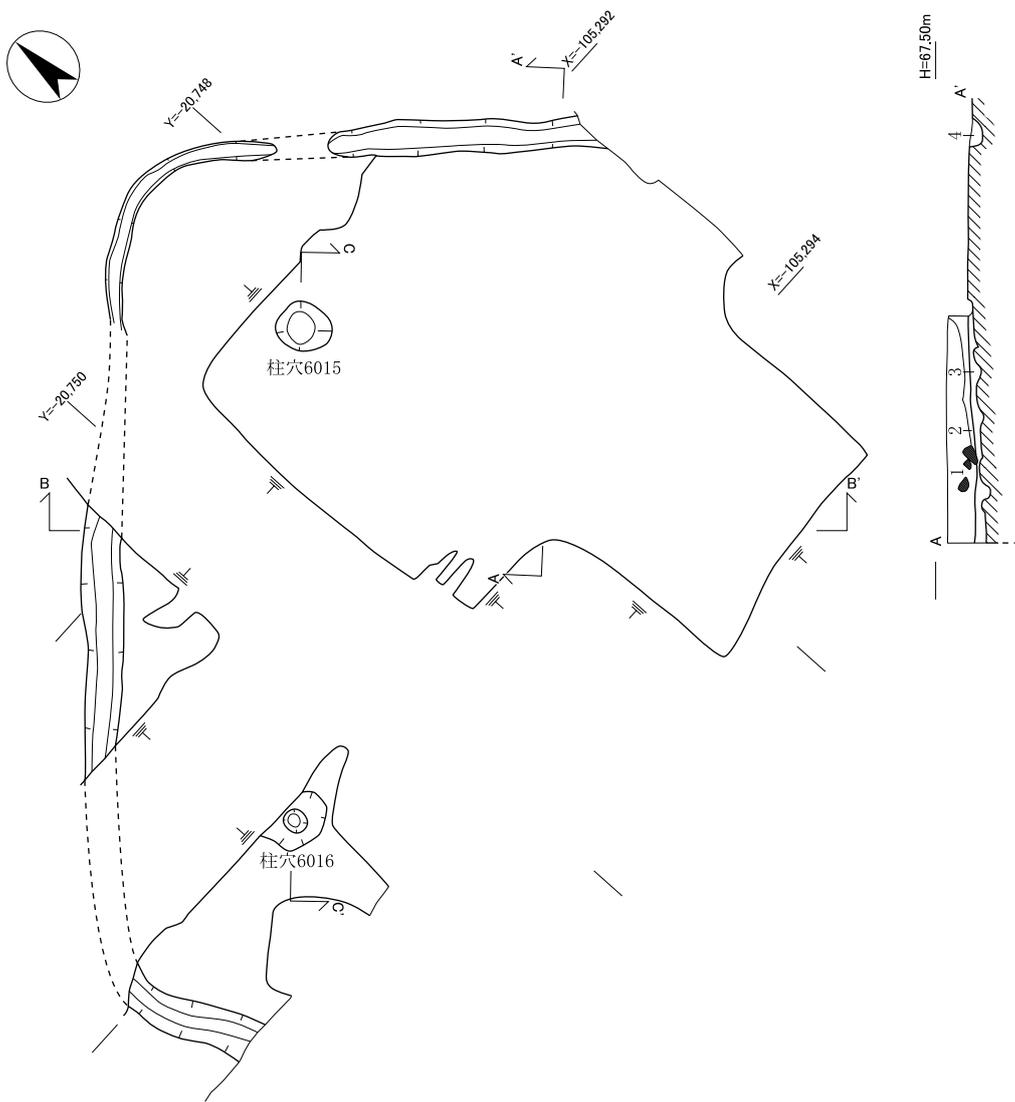


図46 竪穴建物6004実測図(1:50)

0.5m、深さは約0.2mある。

土坑6022 調査区北壁際で検出した。検出長は東西約0.2m、南北約0.15mで、深さは約0.4mある。



A・Bライン

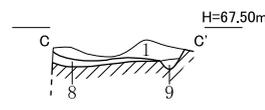
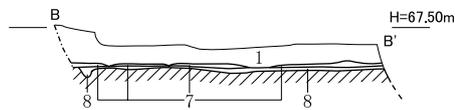
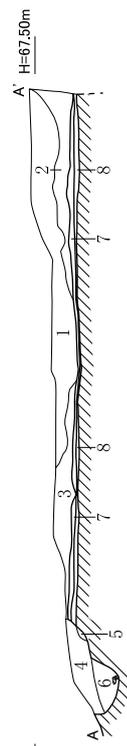
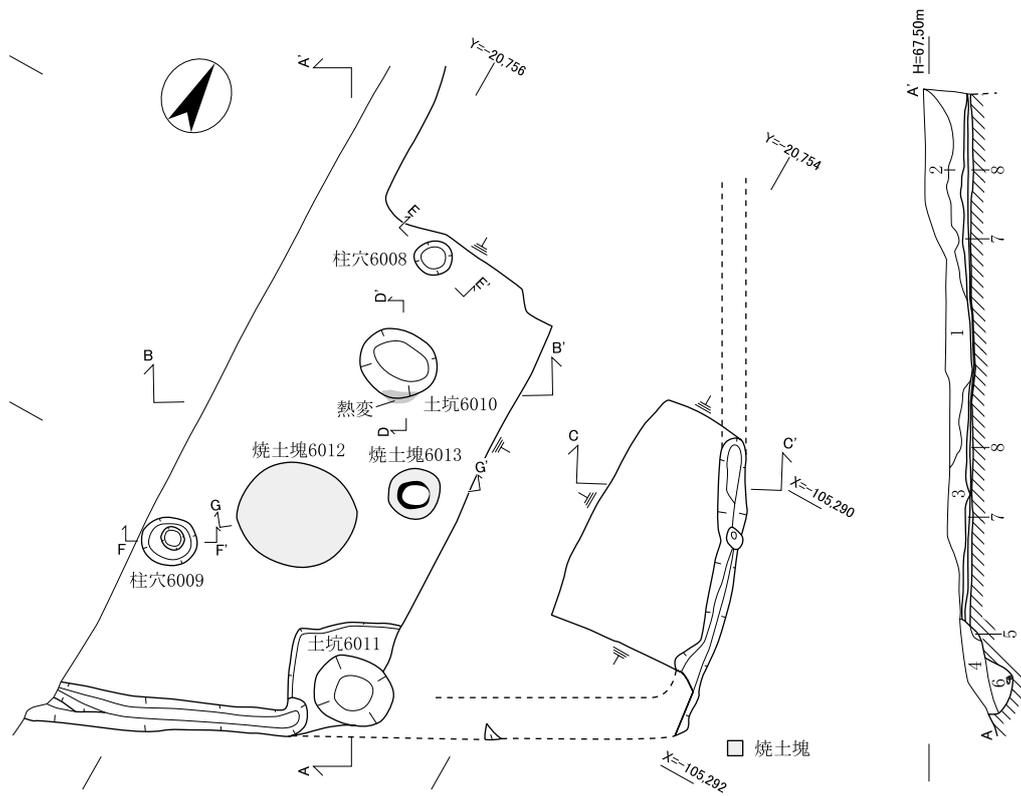
- | | |
|-------------------------------|----------------------|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 φ10cmの礫・炭・土師片混 | 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭混 |
| 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭・土師片混 | 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 炭混(貼床) | |



- | |
|---------------------------|
| 1 10YR2/3黒褐色砂泥 炭混 |
| 2 10YR3/3暗褐色砂泥 炭混 φ2cmの礫混 |
| 3 10YR3/4暗褐色砂泥 炭混 φ2cmの礫混 |



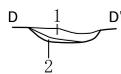
図47 竪穴建物6014実測図 (1 : 50)



A・B・Cライン

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1cmの礫混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭・土師片混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 φ2cmの礫混(土坑6011)
- 5 10YR2/3黒褐色砂泥 炭・土師片混(土坑6011)
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥 φ5cmの礫・炭・土師片混(土坑6011)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(貼床2)
- 8 10YR4/4褐色砂泥 やや砂質(貼床1)
- 9 10YR3/3暗褐色砂泥(壁溝)

土坑6010 H=67.50m



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~8cmの礫・焼土混
- 2 10YR3/2暗褐色砂泥 焼土・炭混

柱穴6008 H=67.50m



- 1 10YR4/4褐色砂泥

柱穴6009 H=67.50m



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 φ5cmの礫混
- 2 10YR4/4褐色砂泥

焼土塊6012 焼土塊6013 H=67.50m



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土・灰混
- 2 10YR6/4にぶい黄褐色灰 固く締まる
- 3 10YR2/2黒褐色焼土 炭多量混



図48 堅穴建物6007実測図 (1:50)

4. 遺 物

今回の調査では整理箱にして72箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、石製品がある。70箱が土器・陶磁器類で、残り2箱が石製品と少量の金属製品と瓦類である。遺物の帰属時期は、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世のものに分けられ、そのうち古墳時代の遺物が約8割を占める。

以下では、調査区別に主要な遺構から出土した遺物について概要を述べる。3区については顕著な遺構および遺物の出土がなかったため割愛する。なお、土器類の個別の詳細については表5にまとめた。

(1) 1区の遺物（図49・50、図版14）

竪穴建物1002床面 1～4は竪穴建物1002の床面直上で出土した古式土師器である。1・2は甕である。1は在地産の庄内式甕である。口縁端部はつまみあげ、端部にわずかな内傾する面をもつ。体部外面は右上がりのタタキ、内面はヨコハケで上半はユビオサエする。2は口縁部が鋭く屈曲する。口縁端部はつまみあげ、端部に外傾する面をもつ。体部は内外面ともに板ナデする。3は小型器台である。脚部には円形透かしを四方に穿つ。4は台付鉢の脚部と考えられる。脚部から杯部を一体整形し、杯底部は粘土を充填する。脚部は内外面ともにナデで仕上げる。石1は北辺の壁溝上に置かれていた石皿である。最大長25.8cm、最大幅17.5cm、厚さは10.9cmある。石材は砂岩である。表裏両平坦面に擦痕が認められる。

土坑1094 5～7は竪穴建物1002の2期から廃絶期の3期までの貯蔵穴と考えられる土坑1094の下層から出土した古式土師器である。5は大型の鉢である。体部から口縁部の屈曲は弱く、口縁端部はわずかにつまみあげて尖る。全体を粗いヨコナデで仕上げ、器壁には粘土紐接合痕が明瞭に残る。6は在地産の庄内式甕である。口縁端部はつまみあげ、丸くおさめる。体部外面は右上がりのタタキ、内面はヨコハケののちユビオサエする。7は有稜高杯である。全体的に器壁の磨滅

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	古式土師器、土師器、須恵器、石製品、金属	72箱	古式土師器114点、土師器2点、須恵器4点、石製品4点、鉦滓1点	1箱	58箱
奈良時代	土師器、須恵器	15箱	須恵器8点	0箱	14箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器		緑釉陶器1点		
中世～近世	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、輸入陶磁器、金属製品				
合 計		87箱	134点（14箱）	1箱	72箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

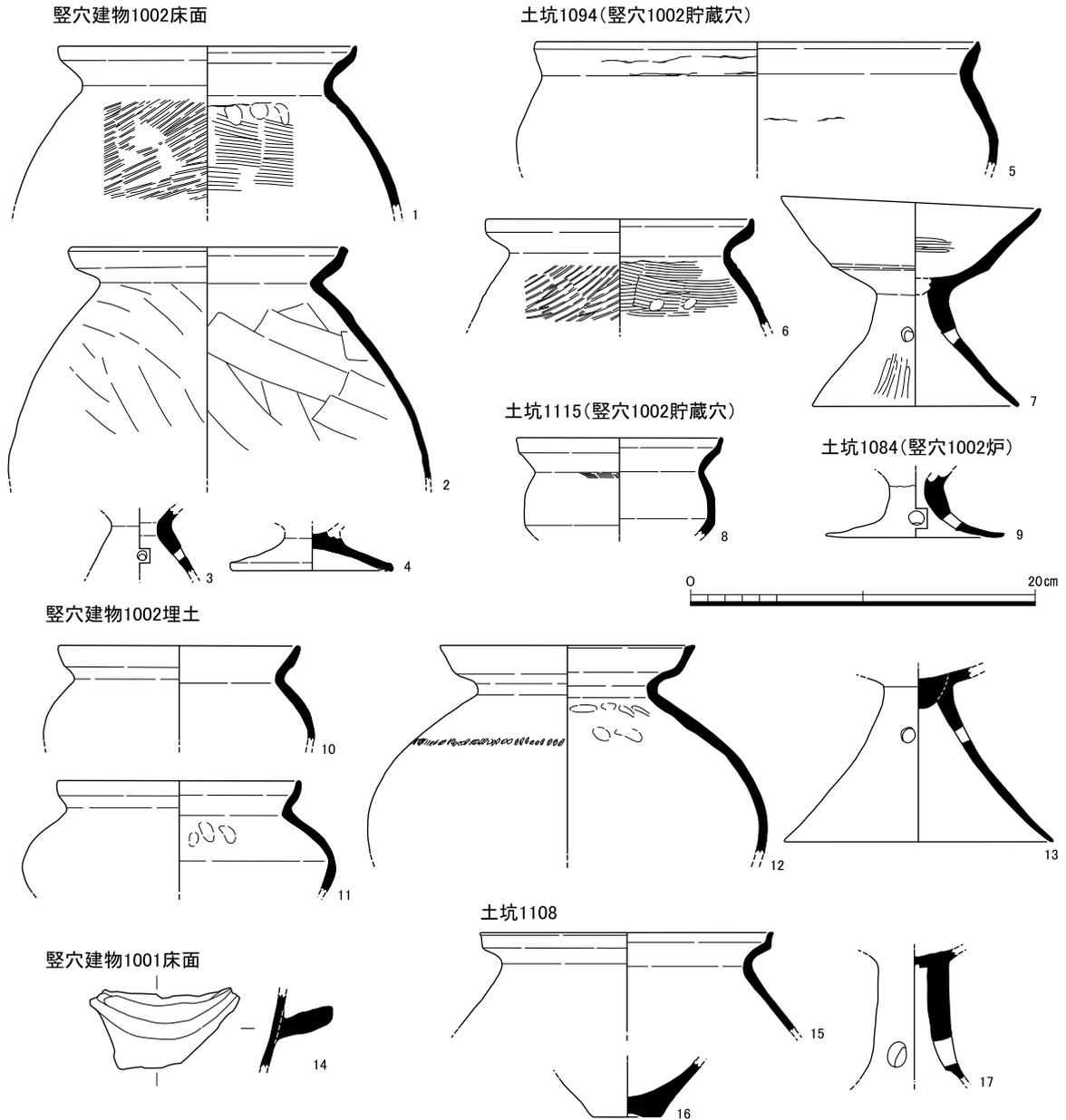


図49 1区出土土器実測図(1:4)

が著しいが、杯部内面には横方向のヘラミガキの痕跡がわずかに残る。脚部は直線的に開き、円形の透かしを三方向に穿つ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。

土坑1115 8は豎穴建物1002の1期の貯蔵穴と考えられる土坑1115から出土した古式土師器の鉢である。受口状口縁部をもつ鉢で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部はナデで、頸部のみタテハケが残る。

土坑1084 9は豎穴建物1002の廃絶期である3期の炉と考えられる土坑1084から出土した古式土師器の高杯脚部である。椀形の杯部をもつものと考えられる。脚部は大きく開き低脚である。円形の透かしを四方向に穿つ。外面調整は磨滅により不明である。

豎穴建物1002埋土 10~13は豎穴建物1002の埋土から出土した古式土師器である。建物南東辺壁際から比較的まとまって出土した。図化できたもの以外に垂下する口縁部をもつ器台や受口

状口縁甕の破片が出土している。10・11は鉢である。10は口縁部をわずかに斜め上方に引き上げ、受口を志向する。体部外面から口縁部はヨコナデ、体部内面はナデで仕上げる。11は口縁部をつまみあげて受口状にする。体部最大径が口縁径に比して大きく横に張る。全体をヨコナデで仕上げるが、体部内面上半にはユビオサエが残る。12は受口状口縁をもつ壺である。受口部は斜め上方に開く、端部は内傾する面をもつ。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げる。体部は球形で、肩部には刺突列点文が密にめぐる。磨滅により外面調整は不明、内面下半は板ナデ、上半はユビオサエが残る。13は高杯脚部である。脚部から杯部を一体整形し杯底部は粘土を充填する。脚部は直線的に開く。円形の透かしを三方向に穿つ。磨滅が著しく調整は不明である。

豎穴建物1001床面 14は豎穴建物1001の床面直上から出土した古式土師器甕把手である。これ以外にも甕の破片などが出土したが、小片のため図化できたのは1点のみである。甕の器壁に粘土板をゆるい弧を描いて貼り付けており、把手部分は匙状を呈する。古墳時代後期以降に多く見られる鍋や甑の把手とは形状が異なる。建物埋土や床面からは庄内式並行期の土器しか出土していないことから、類例は少ないが、庄内式並行期の甕に付けられたものと考えられる。

土坑1108 15～17は土坑1108から出土した古式土師器である。15は受口状口縁甕である。口縁部の立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げる。体部は磨滅により調整は不明である。16は甕底部である。中央がわずかに凹む平底である。内外面ともにナデで仕上げられる。17は高杯の脚柱部である。有稜の杯部をもつものと考えられる。円形の透かしを三方向に穿つ。石2は土坑1108から出土した石皿である。最大長20.3cm、最大幅11.3cm、厚

豎穴建物1002

土坑1108

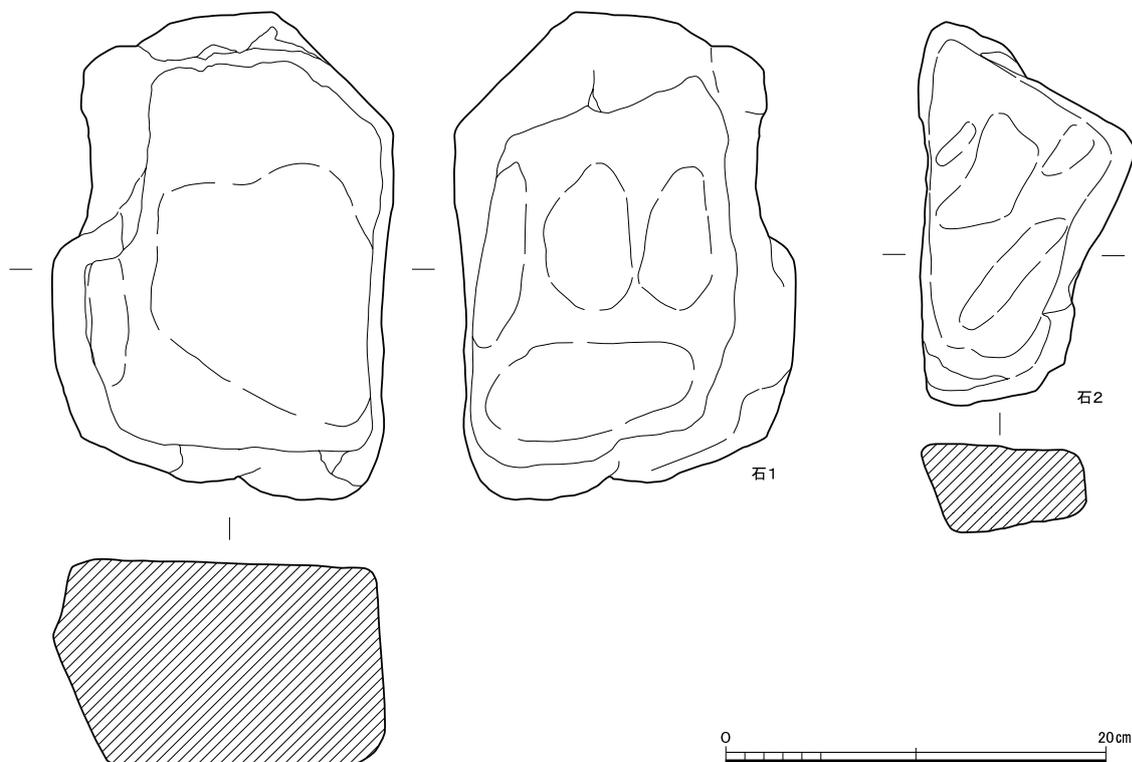


図50 1区出土石器実測図(1:4)

さは4.9cmある。石材は砂石である。上面に部分的に擦痕が認められる。

(2) 2区の遺物 (図51、図版14)

ピット2012 18はピット2012から出土した緑釉陶器の椀である。9世紀後半の山城産と考えられる。削出の平高台で焼成は軟質である。全面施釉し、釉色は淡緑色である。これ以外には、土師器皿の小片が出土したのみである。

土坑2021 19・20は土取穴と考えられる土坑2021から出土した須恵器杯Bである。これら以外には、土師器高杯や須恵器甕の破片が出土している。19・20はいずれも貼付高台で20は内面底部に自然釉がかかる。8世紀後半のものと考えられる。

竪穴建物2050床面 21は竪穴建物2050の床面直上から出土した土師器甕の把手部分である。これ以外には、須恵器杯身・杯蓋の破片などが出土している。いずれも6世紀前半のものと考えられる。

土坑2067 22・23は竪穴建物2050の貯蔵穴と考えられる土坑2067から出土したものである。22は須恵器甕である。口縁部は逆ハの字状に開き、端部は折り返して玉縁状になる。口縁部は回転ナデ、体部外面はタタキのちカキメ、内面には当て具の痕跡が残る。23は土師器甕である。口縁部は直線的に開き、端部は外傾する面をもつ。口縁部はヨコナデで仕上げる。底部は平底で粗いヘラケズリを行う。体部外面はナデ、内面は粗いヘラケズリを行う。底部の器壁は二次焼成により剥離する。これら以外には須恵器杯蓋の破片が出土している。6世紀前半のものと考えられる。

竪穴建物2010床面 24は竪穴建物2010の床面直上から出土した古式土師器の壺である。口縁部は残存しないが、加飾二重口縁壺と考えられる。口縁部と体部の境に断面三角形の貼付突帯がめぐり、肩部には7条1単位のクシ描き波状文と直線文がめぐり、

竪穴建物2010埋土 25・26は竪穴建物2010の埋土から出土した古式土師器である。25は広口壺である。口縁部は外反ぎみに開き、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともにナデで仕上げる。26は器台である。短い筒部から屈曲点を持って口縁部が大きく開く。筒部から脚部はハの字状に開き、筒部と脚部の境に円形透かしを三方向に穿つ。これら以外には、甕・有孔鉢・高杯・器台の破片が出土している。いずれも庄内式並行期のものと考えられる。

土坑2033 27・28は竪穴建物2010の貯蔵穴と考えられる土坑2033から出土した古式土師器である。27は鉢で平底の底部から体部が内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。底部から体部内面はハケメをナデ消す。内面はヨコハケである。28は受口状口縁をもつ壺である。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は水平な面をもつ。底部は上げ底で、体部は球形化する。体部外面下半には縦方向のヘラミガキを施す。内面はヨコハケである。

竪穴建物2020床面 29～31は竪穴建物2020の床面直上から出土した古式土師器である。29は鉢である。口縁端部はつまみあげる。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げるが、体部内面上半にはヨコハケが残る。30は小型の鉢である。手捏ね成形で底部から体部外面はナデ、内面はナデ上げてつくる。31は高杯脚部である。脚部は杯部に貼り付ける。磨滅により調整は不明である。これ

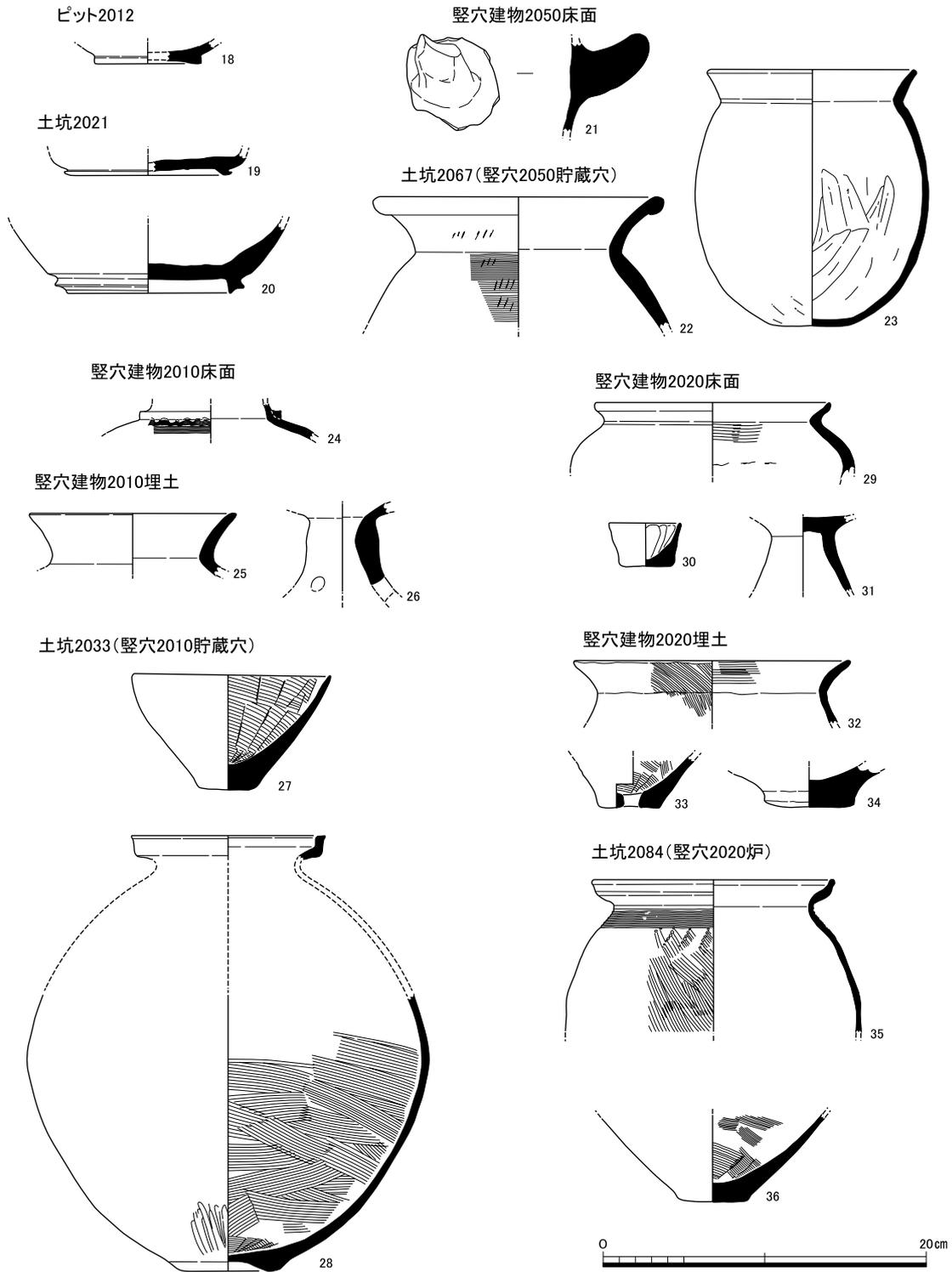


図51 2区出土土器実測図(1:4)

ら以外にはタタキ甕、受口状口縁甕の破片が出土している。

竪穴建物2020埋土 32～34は竪穴建物2020の埋土から出土した古式土師器である。32はくの字状口縁の甕である。外面は体部から口縁部まで縦方向のタタキ、内面は口縁部はヨコハケ、体部はナデで仕上げる。33は有孔鉢である。底部は焼成前に穿孔する。底部から体部外面はナデ、内面はヨコハケである。34は壺の底部である。平底で底部から体部外面はナデ、内面は板ナデする。図

化できなかったが、これら以外には生駒西麓産の搬入庄内式甕・受口状口縁甕・高杯・器台の破片が出土している。

土坑2084 35・36は竪穴建物2020の炉と考えられる土坑2084から出土した古式土師器である。35は受口状口縁をもつ甕である。口縁端部の立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。肩部には同一原体による7条1単位のクシ描き直線文と列点文がめぐり、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はナデで仕上げる。36は甕の底部である。平底で外面は二次焼成を受ける。外面はナデ、内面はヨコハケで一部をナデ消す。

(3) 4区の遺物 (図52・53、図版14)

竪穴建物4020床面 37は竪穴建物4020の床面直上から出土した古式土師器の甕である。胎土に角閃石と雲母を含む生駒西麓で製作された庄内式甕で、搬入品である。図化できなかったが、他にも搬入品の庄内式甕の破片が床面直上から複数出土している。それら以外にはくの字状口縁でハケメの甕、受口状口縁甕、高杯などの破片が出土している。

壁溝4053 38～40は竪穴建物4020の廃絶期である2期の壁溝4053から出土した古式土師器甕である。38はくの次状口縁の甕で、口縁部は外反し端部は外側にやや肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコハケをナデ消し、内面下半はナデ上げ、上半は板ナデする。39はわずかに受口状を呈する口縁部をもつ甕である。口縁端部は内傾する面をもつ。体部は球形化し、外面はハケメをナデ消し、内面は粗いナデで仕上げる。外面下半には煤が付着する。40は甕底部である。平底で底部は未調整、外面はタテハケ、内面は板ナデする。外面には煤が付着する。

土坑4071 41～46は竪穴建物4020の炉と考えられる土坑4071から出土した古式土師器である。41は甕で、口縁部は体部からつまみ出して短く外に屈曲させる。口縁端部は内外面ともにユビオサエする。口縁部と体部外面は左上がりのタタキ、内面は板ナデする。42・43は直口壺である。42の口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。外面調整は磨滅により不明、内面は横方向のヘラミガキを施す。43の口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げる。44は椀形高杯である。杯部と脚部の接合は粘土貼り付けにより、粘土紐接合痕跡が残る。外面は全面粗いタテハケ、内面はナデで仕上げる。45は高杯脚部である。ハの字上に開く脚部に円形透かしを三方向に穿つ。磨滅により調整は不明である。46は器台の脚部と考えられる。直線的に大きく開く脚部で、端部は上方に拡張して面をもつ。二次焼成を受けて器壁が剥離するため調整は不明である。この土坑からは図化した以外に生駒西麓産の庄内式甕・受口状口縁甕・壺などの破片が多数出土している。

土坑4070 47～49は竪穴建物4020の貯蔵穴と考えられる土坑4070から出土した古式土師器である。47は在地産の庄内式甕口縁部である。口縁端部をわずかにつまみあげる。端部には強いヨコナデにより擬凹線がめぐり、48は土坑底近くで倒置した状態で出土した完形の直口壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。体部は球形で、底部は径の小さい上げ底である。口縁部はヨコナデ、体部下半はナデのち縦方向のヘラミガキを施す。上半はナデで仕上げる。

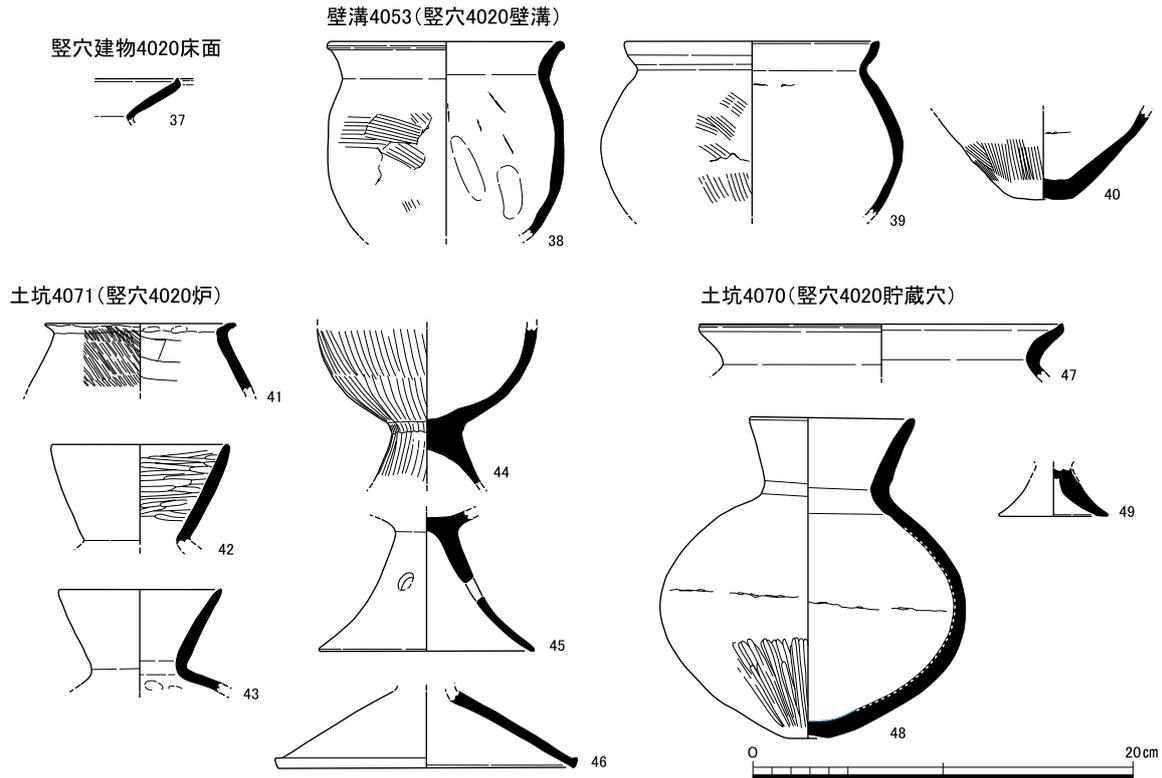


図52 4区出土土器実測図1 (1:4)

体部内面はナデで、粘土紐接合痕が明瞭に残る。49は台付鉢の脚部と考えられる。低脚でハの字状に開き、端部は水平な面をもつ。内外面ともにナデで仕上げる。

竪穴建物4020埋土 50～76は竪穴建物4020の埋土から出土した古式土師器である。庄内式併行期から布留式期新段階までのものが混じる。50～53は布留式期の甕である。50は口縁端部をわずかにつまみあげ、受口状になる。端部は丸くおさめる。体部は球形化し、外面は不定方向のハケメ、内面は指でナデ上げる。51～53は内弯口縁で端部を肥厚させるいわゆる布留式甕である。51の体部は球形化し、外面ヨコハケ、内面は指でナデ上げる。54は生駒西麓産の庄内式甕である。底部は二次焼成を受け剥離するが尖底と考えられる。外面下半はタテハケ、内面はハラケズりする。外面には煤が付着する。55～61はくの字状口縁をもつ甕である。55は底部と体部を分割成形するタタキ甕で、外面のタタキは口縁部までおよぶ。56は口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面は板ナデする。57は全体的に粗いつくりで歪な形状を呈する。口縁部端部から外面はヨコナデ、内面はヨコハケをナデ消す。体部外面は太筋のタタキをナデ消し、内面はヨコハケする。二次焼成を受ける。58は口縁端部をわずかにつまみあげる。庄内式甕を模倣した在地産の庄内式甕とも捉えられる。体部外面は右上がりのタタキ、内面はヨコハケである。59は口縁部ヨコナデ、体部外面下半ナメハケ、上半はタテハケをナデ消す。内面はヨコナデである。外面下半には煤が付着する。60は口縁端部に強いヨコナデにより疑凹線がめぐる。口縁部から体部外面はタテハケで仕上げる。61は口縁部はタテハケののちヨコナデする。体部は外面タテハケ、内面はヨコハケである。外面下半は二次焼成により剥離する。62は小型甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケをナデ消

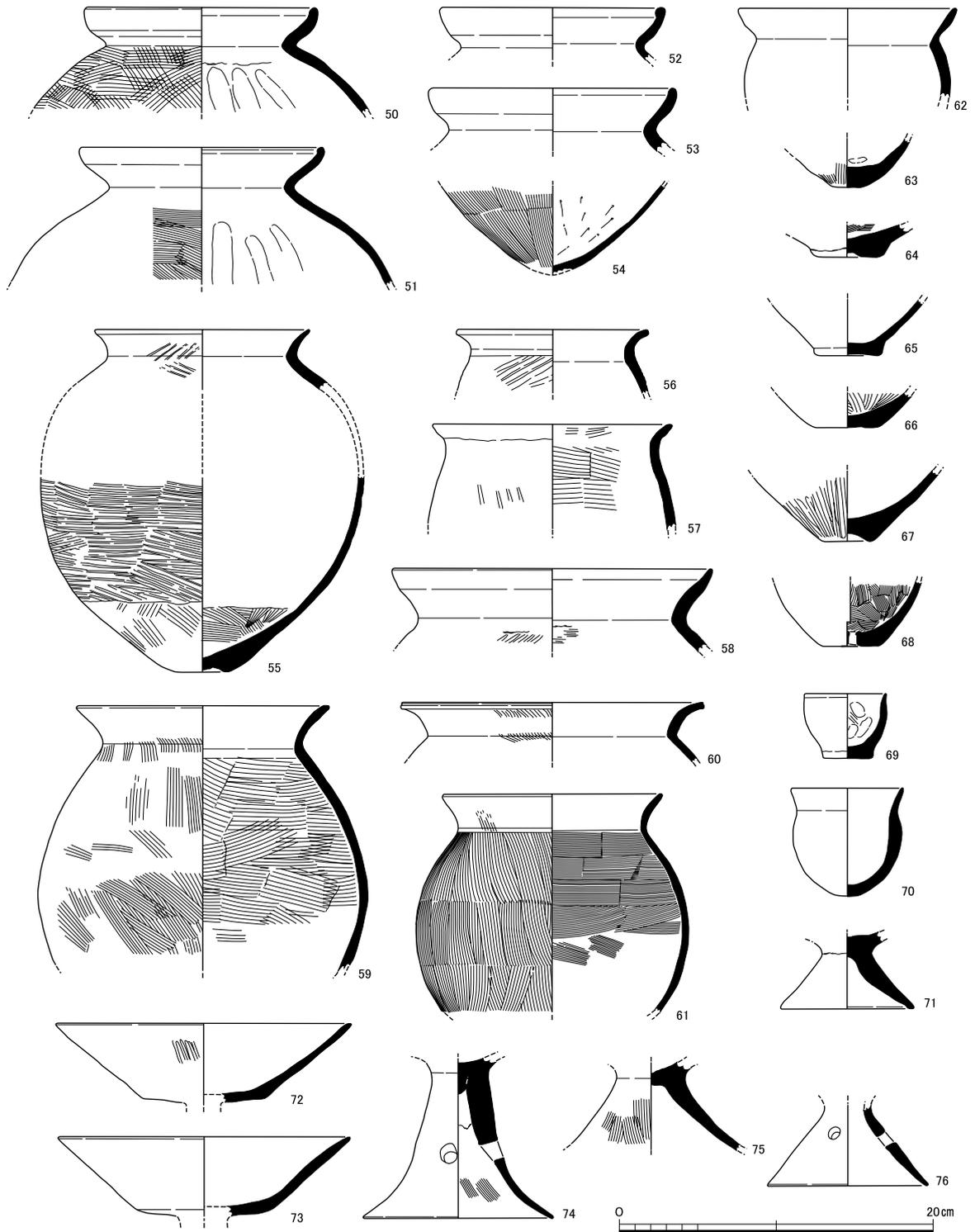


図53 4区出土土器実測図2 (1:4)

し、内面はヘラケズリする。63～67は壺の底部である。63は径の小さい平底で、外面タテハケ、内面はナデで仕上げる。64は輪状の底部で外面はナデ、内面はハケメである。65は平底で全面ナデで仕上げる。66は平底で、外面は縦方向のヘラミガキの痕跡が残る。内面はハケメである。67は上げ底で、外面縦方向ヘラミガキ、内面は板ナデする。68は有孔鉢である。底部は焼成前に穿孔す

る。外面はナデ、内面は細かい単位の手ケメである。69は小型の鉢である。平底で体部の開きは小さく、口縁部をわずかに外反させる。外面はナデ、内面は手ケメをナデ消す。70は小型壺である。底部は径の小さな平底である。磨滅のため調整は不明である。71は台付鉢の脚部と考えられる。低脚でハの字状に開き、端部は水平な面をもつ。72～75は高杯である。72・73は有稜高杯の杯部で、72は口縁部外面に縦方向のヘラミガキの痕跡が残る。73は磨滅が著しく、調整は不明である。74は高杯脚部である。杯部と脚部は一体成形し、間に粘土を充填する。脚部には円形透かしを三方向に穿つ。75も高杯脚部である。脚部はハの字状に開く。外面はタテハケ、内面はナデで仕上げる。76は器台の脚部である。ハの字状に開き、円形透かしを三方向に穿つ。磨滅により調整は不明である。

(4) 5区の遺物 (図54・55、図版15)

掘立柱建物2 77・78は掘立柱建物2を構成する柱穴から出土した須恵器杯Aである。77は柱穴5050掘形、78は柱穴5052掘形から出土した。柱穴5052からは他に須恵器甕の破片も出土している。

奈良時代ピット群 79～82は5-1・5-3区南側で検出したピット・柱穴群から出土した須恵器である。79はピット5079から出土した須恵器杯Aである。他に須恵器壺片が出土している。80は柱穴5036から出土した須恵器杯Bである。高台は貼り付けである。他に土師器高杯片などが出土している。81・82はピット5213から出土した。81は平瓶である。口縁部内外面と体部外面に自然釉がかかる。82は壺の底部と考えられる。高台は貼り付けである。

土坑5130 83～85は5-3区で検出した土坑5130から出土した須恵器である。土坑5130からは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕・高杯・甑把手、鉾滓などの古墳時代後期の遺物が比較的まとまって出土している。83・84は杯蓋、85は杯身である。これらは陶邑編年のTK47～MT15型式に属するものと考えられる。図55の金1はこの土坑から出土した鉾滓である。最大長5.7cm、最大幅4.0cm、厚さは1.0cmある。表面は溶解して凹凸が激しい。

竪穴建物5080埋土 86～99は竪穴建物5080の埋土から出土した古式土師器である。庄内式併行期から布留式期新段階までのものが混じる。86は内弯口縁で端部を肥厚させる布留式甕である。頸部外面には指頭圧痕がつく。87はくの字状口縁甕で端部は外方につまみ出し、外傾する面をもつ。88は複合口縁の甕である。2次口縁を擬口縁の上に付加するもので、1次口縁と2次口縁の境は凸帯状になる。いわゆる山陰系の甕である。89は壺の体部と考えられる。球形化し、外面は手ケメ、内面調整は磨滅により不明である。90～92は小型丸底壺である。90は口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面下半はナデ上げで上半はユビオサエする。91は磨滅により調整は不明である。器壁は厚い。92も磨滅が著しいが、頸部から肩部外面に縦方向のヘラミガキの痕跡が残る。93は器台の脚部である。ハの字上に開く脚に円形透かしを三方向に穿つ。94～99は高杯である。94は水平に開く杯底部に口縁部を貼り付け、底部と口縁部の境に明瞭な稜がつく山陰系の高杯である。底部内面はヘラミガキ、底部と口縁部の境はユビオサエする。95・96は稜をもたずゆるやか

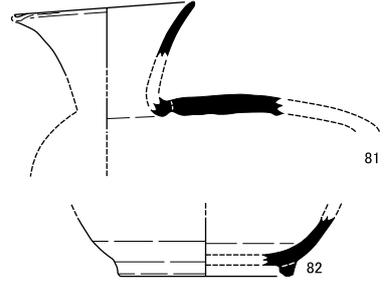
柱穴5050(掘立柱建物2)



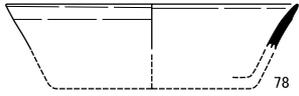
ピット5079



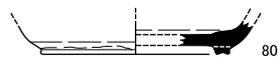
ピット5213



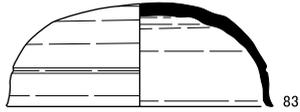
柱穴5052掘形(掘立柱建物2)



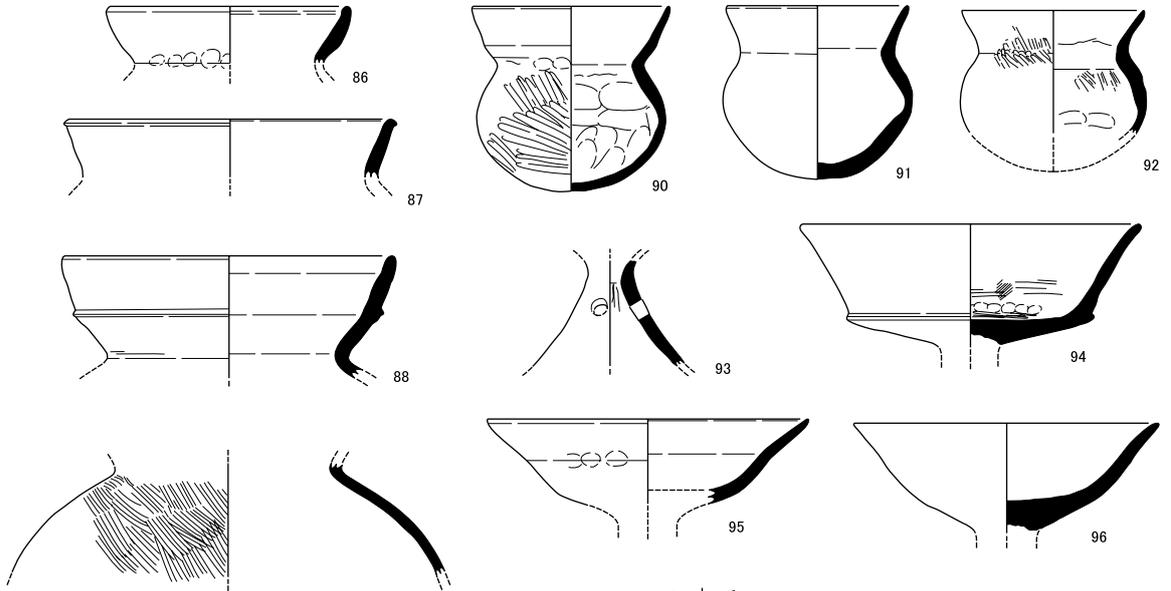
柱穴5036



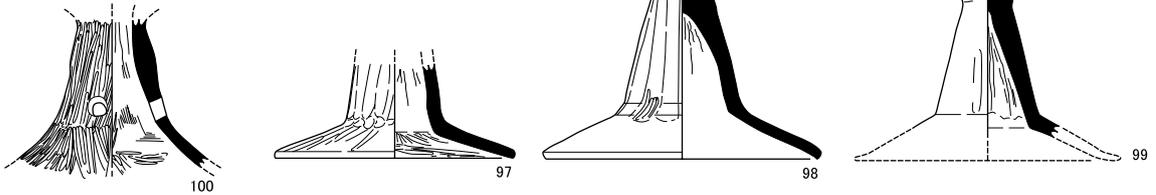
土坑5130



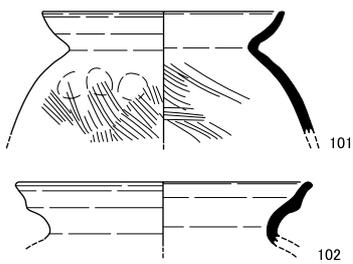
竖穴建物5080埋土



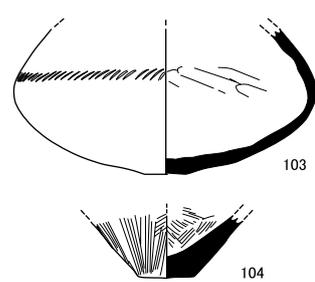
柱穴5178(竖穴5080支柱穴)



竖穴建物5140埋土



竖穴建物5170床面



竖穴建物5170埋土

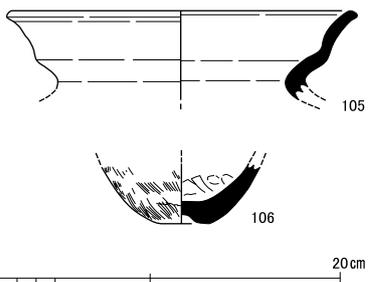


图54 5区出土土器实测图(1:4)

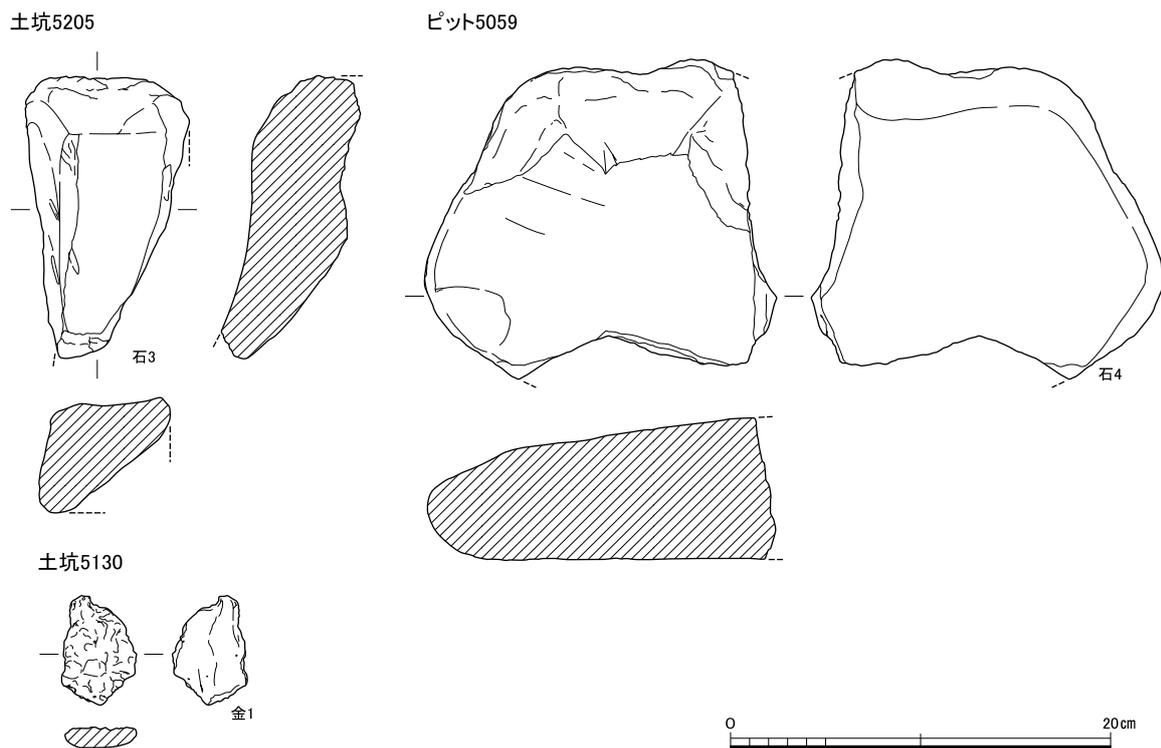


図55 5区出土石器、鉦滓実測図（1：4）

に立ち上がる杯部をもつものである。口縁部はわずかに外反する。97～99は高杯脚部で、いずれも脚裾部が屈曲して大きく開くもので、外面には縦方向のヘラミガキを施す。

柱穴5178 100は竪穴建物5080の支柱穴と考えられる柱穴5178から出土した古式土師器高杯脚部である。脚部は変換点をもたずにゆるやかに開く。外面と脚裾部内面には丁寧な縦方向のヘラミガキを施し、円形透かしを三方向に穿つ。

竪穴建物5140埋土 101・102は竪穴建物5140の埋土から出土した古式土師器甕である。いずれも布留式期のものと考えられる。101は口縁部が内弯して立ち上がる。端部は水平な面をもつ。口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエのちハケメ、内面はハケメで仕上げる。102は複合口縁をもつ甕である。2次口縁は1次口縁を引き上げてつくる。口縁部はヨコナデする。

竪穴建物5170床面 103・104は竪穴建物5170床面から出土した古式土師器である。103は手焙形土器と考えられる。鉢部最大径部分よりやや上に列点文をめぐらす。104は壺底部である。平底で外面タテハケ、内面はハケメで仕上げる。

竪穴建物5170埋土 105・106は竪穴建物5170埋土から出土した古式土師器である。105は複合口縁甕である。2次口縁は擬口縁に付加してつくるものである。106は壺底部である。上げ底で外面はタテハケ、内面はナデ上げする。

土坑5205 石3は5-2区で検出した土坑5205から出土した砥石である。最大長14.8cm、最大幅8.6cm、最大厚5.8cmある。石材は砂岩である。砥面は平滑で浅い皿状になる。

ピット5059 石4はピット5059から出土した石皿である。最大長18.5cm、最大幅16.4cm、最大厚は7.4cmある。石材は砂石である。平坦面のうち1面のみが平滑になる。

(5) 6区の遺物 (図56、図版15)

竪穴建物6014埋土 107～129は竪穴建物6014の埋土から出土した古式土師器である。布留式期の資料が大半を占める。全体的に磨滅が著しく、調整が不明な個体が多い。107～109は内弯口縁で端部を肥厚させる布留式甕である。108は体部外面のハケメが残る。110～113はくの字状口縁の甕である。110は小型で、口縁部外面のタテハケが残る。111の口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさめる。112は口縁端部が外反する。113は口縁端部が尖る。頸部には粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。114は複合口縁の甕である。擬口縁に2次口縁を付加する。口縁端部は肥厚させる。115・116は広口壺である。115の口縁は大きく外反して開く。体部外面にはハケメの痕跡が残る。116は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。117は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。118は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。119は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。120は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。121は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。122は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。123は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。124は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。125は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。126は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。127は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。128は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。129は口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。

竪穴建物6014埋土

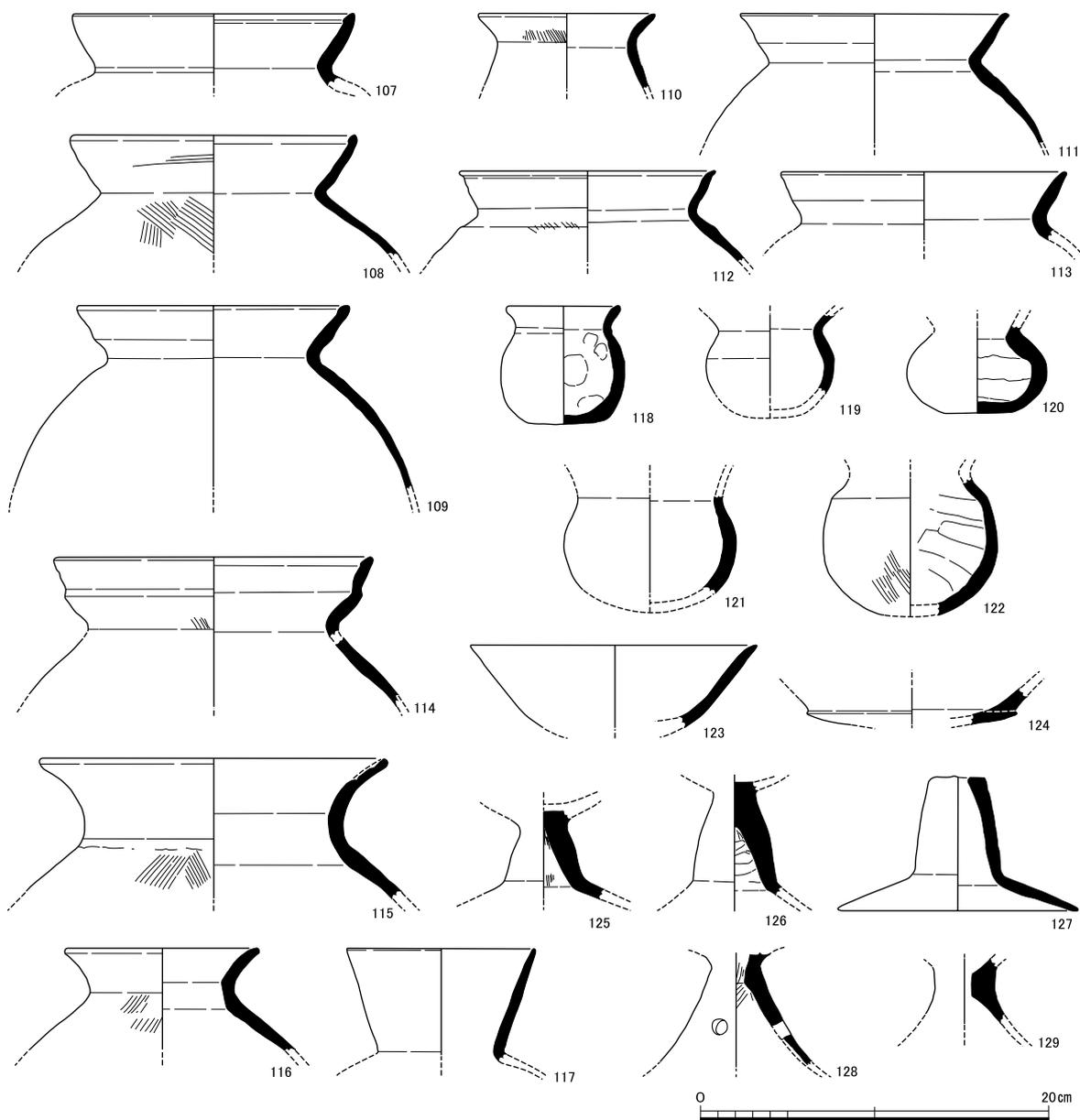


図56 6区出土土器実測図 (1 : 4)

116の口縁部は短く逆ハの字に開く。体部外面にはハケメの痕跡が残る。117は直口壺である。口縁部は直線的に伸びる。118～122は小型壺で丸底のものと径の小さい平底のものがある。123～127は高杯である。123は杯部が稜をもたずゆるやかに開くもので端部はわずかに外反する。124は水平に開く杯底部に口縁部を貼り付ける山陰系の高杯である。125～127は高杯脚部で、いずれも脚裾部が屈曲して大きく開くものである。128・129は小型器台と考えられる。いずれも中空で、脚部が直線的に開く。128は脚部に円形透かしを三方向に穿つ。

参考文献

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年

高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告第33集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年

吹田直子「山城地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター 2006年

田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 日本考古学協会 2005年

若林邦彦「庄内式期土器における地域の様式差－京都盆地の小型器台から－」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズX 2010年

表5 遺物一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	胎土	備考
1	古式土師器	甕	竪穴1002 床面	(17.2)	(9.5)		20	外面7.5YR8/4浅黄橙色+ 7.5YR2/1黒色 内面7.5YR8/2灰白色	粗。1~4mmの石英・長石・ チャート多量含。	
2	古式土師器	甕	竪穴1002 床面	15.8	(13.6)		50	外面7.5YR4/4褐色 内面7.5YR2/1黒色	粗。1~5mmの石英・長石・ チャート多量含。	
3	古式土師器	小型 器台	竪穴1002 床面				30	7.5YR8/3浅黄橙色	やや粗。0.5~2mmの石英・ 長石・チャート含。	
4	古式土師器	台付鉢	竪穴1002 床面		(2.5)	9.4	脚部 90	外面10YR8/2灰白色 内面5YR7/4にぶい橙色 断面10YR3/1黒褐色	密。0.5~1mmの石英・長石・ チャート少量含。	
5	古式土師器	鉢	土坑1094	(25.6)	(7.2)		10	外面7.5YR8/3浅黄橙色 内面10YR7/4灰白色	やや粗。1~3mmの石英・長 石・チャート含。	竪穴1002貯蔵穴
6	古式土師器	甕	土坑1094	(15.4)	(6.3)		10	10YR2/1黒色	やや粗。1~5mmの石英・長 石・チャート含。	竪穴1002貯蔵穴
7	古式土師器	高杯	土坑1094	15.0	14.3	12.0	80	10YR7/3にぶい黄橙色	密。0.5~1mmの石英・長石・ チャート少量含。	竪穴1002貯蔵穴
8	古式土師器	鉢	土坑1115	(11.8)	(5.8)		10	外面7.5YR4/2灰褐色 内面5YR8/3淡橙色 断面10YR5/1褐灰色	粗。1~3mmの石英・長石・ チャート多量含。	竪穴1002貯蔵穴
9	古式土師器	高杯	土坑1084		(3.9)	10.4	脚部 70	外面7.5YR7/4にぶい橙色 断面10YR4/1褐灰色	やや粗。1~2mmの石英・長 石多量含。	竪穴1002炉
10	古式土師器	鉢	竪穴1002 埋土	(13.8)	(5.6)		10	外面10YR2/1黒色 内面7.5YR8/4浅黄橙色	密。1~2mmの石英・長石・ チャート含。	
11	古式土師器	鉢	竪穴1002 埋土	(14.0)	(6.6)		15	外面10YR8/3浅黄橙色 内面5YR7/4にぶい橙色	やや粗。0.5~2mmの石英・ 長石・チャート含。	
12	古式土師器	壺	竪穴1002 埋土	(14.8)	(12.2)		30	外面5YR6/6褐色 内面7.5YR6/1褐灰色	粗。0.5~3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
13	古式土師器	高杯	竪穴1002 埋土		(10.2)	(15.4)	脚部 60	外面7.5YR7/4にぶい橙色 断面2.5Y3/1黒褐色	やや粗。1~3mmの石英・長 石・チャート含。	
14	古式土師器	把手	竪穴1001 床面					10YR8/2灰白色	やや粗。0.5~3mmの石英・ 長石・チャート含。	
15	古式土師器	甕	土坑1108	(16.8)	(5.8)		10	10YR8/2灰白色	粗。1~3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
16	古式土師器	甕	土坑1108		(3.3)	3.8	底部 100	外面7.5YR7/3にぶい橙色 内面・断面10YR4/2灰黄褐 色	粗。1~5mmの石英・長石・ チャート多量含。	
17	古式土師器	高杯	土坑1008				50	10YR8/4浅黄橙色	密。0.5~2mmの石英・長石・ チャート少量含。	
18	緑釉陶器	椀	ピット2012		(1.3)	(6.6)	5	10YR8/1灰白色 釉 淡黄色	密。	
19	須恵器	杯B	土坑2021		(1.3)	(10.3)	15	2.5Y7/1灰白色	密。1~7mmの石英・長石少 量含。	
20	須恵器	杯B	土坑2021		(4.3)	11.8	50	外面N6/0灰色 内面N7/0灰白色	密。1~2mmの白色粒少量 含。	
21	土師器	甕把手	竪穴2050 床面				5以下	10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗。0.5~3mmの石英・ 長石・チャート多量含。	
22	須恵器	甕	土坑2067	(17.0)	(8.2)		10	N6/0灰色	密。0.5~3mmの白色粒少量 0.5mm程度の黒色粒少量含。	竪穴2050貯蔵穴
23	土師器	甕	土坑2067	(12.5)	16.0		60	外面10YR5/2灰黄褐色 内面10YR7/3にぶい黄橙色	密。1~5mmの石英・長石・ チャート少量、クサリレキ多 量含。	竪穴2050貯蔵穴
24	古式土師器	壺	竪穴2010 床面				5	外面7.5YR8/3浅黄橙色 内面・断面N4/0灰色	やや粗。1~3mmの石英・長 石・チャート多量含。	
25	古式土師器	壺	竪穴2010 埋土	(12.6)	(3.6)		口縁 20	10YR6/2灰黄褐色	やや粗。0.5~3mmの石英・ 長石・チャート多量含。	
26	古式土師器	器台	竪穴2010 埋土				5	7.5YR7/4にぶい橙色	密。0.5~1mmの石英・長石・ チャート微量、クサリレキ少 量含。	
27	古式土師器	鉢	土坑2033	12.1	7.3	3.6	100	外面10YR5/2灰黄褐色 内面10YR7/2にぶい黄橙色	密。0.5~2mmの石英・長石・ チャート少量含。	竪穴2010貯蔵穴
28	古式土師器	壺	土坑2033	(12.0)		(6.0)	40	外面10YR7/2にぶい黄褐色 内面10YR3/1黒褐色	粗。0.5~3mmの石英・長石・ チャート多量、クサリレキ少 量含。	竪穴2010貯蔵穴
29	古式土師器	鉢	竪穴2020 床面	(14.4)	(4.6)		10	10YR8/3浅黄橙色	やや粗。1~3mmの石英・長 石・チャート多量含。	
30	古式土師器	鉢	竪穴2020 床面	(4.4)	2.7	3.2	80	外面7.5YR4/2灰褐色 内面7.5YR6/6褐色	密。0.5~2mmの石英・長石・ チャート少量含。	

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	胎土	備考
31	古式土師器	高杯	竪穴2020 床面				脚部 20	7.5YR7/6橙色	密。0.5～1mmの石英・長石 多量、クサリレキ少量含。	
32	古式土師器	甕	竪穴2020 埋土	(17.0)	(3.9)		5	7.5YR7/4にぶい橙色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
33	古式土師器	有孔鉢	竪穴2020 埋土		(3.2)	3.8	底部 100	外面・内面7.5YR7/6橙色 断面2.5Y4/2暗灰黄色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
34	古式土師器	壺	竪穴2020 埋土		(2.2)	5.5	5	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面N4/0灰色 断面5YR5/2灰褐色	やや粗。0.5～2mmの石英・ 長石含。	
35	古式土師器	甕	土坑2084	(14.8)	(9.5)		70	10YR8/2灰白色	やや粗。0.5～3mmの石英・ 長石・チャート含。	竪穴2020炉
36	古式土師器	甕	土坑2084		(5.4)	4.2	底部 100	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面10YR7/2にぶい黄褐色	やや粗。0.5～2mmの石英・ 長石・チャート多量含。	竪穴2020炉
37	古式土師器	甕	竪穴4020 床面				5以下	外面・内面10YR3/3暗褐色 断面10YR5/3にぶい黄褐色	密。0.5mm以下の石英・長石 少量含。雲母多量含。	生駒西麓産 庄内式甕
38	古式土師器	甕	壁溝4053	(12.2)	(10.3)		40	外面5YR5/6明赤褐色 内面7.5YR5/4にぶい褐色	粗。0.5～3mmの石英・長石・ チャート多量含。	竪穴4020の2期 壁溝
39	古式土師器	甕	壁溝4053	(13.2)	(9.2)		20	外面5YR7/6橙色 内面10YR7/2にぶい黄褐色	やや粗。0.5～4mmの石英・ 長石少量、チャート多量含。	竪穴4020の2期 壁溝
40	古式土師器	甕	壁溝4053		(4.7)	3.0	5	外面5YR5/4にぶい赤褐色 内面7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗。0.5～1mmの石英・ 長石・チャート含。	竪穴4020の2期 壁溝
41	古式土師器	甕	土坑4071	(10.0)	(3.6)		5	7.5YR5/4にぶい褐色	密。0.5～1mmの石英・長石 少量、クサリレキ少量含。	竪穴4020炉
42	古式土師器	直口壺	土坑4071	9.2	(5.3)		30	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面7.5YR6/4にぶい橙色	密。0.5～1mmの石英・長石・ チャート多量含。	竪穴4020炉
43	古式土師器	直口壺	土坑4071	8.5	(6.4)		口縁 100	外面10YR6/2灰黄褐色 内面10YR5/3にぶい黄褐色	密。0.5～1mmの石英・長石・ チャート含。	竪穴4020炉
44	古式土師器	高杯	土坑4071		(8.2)		30	10YR7/3にぶい黄褐色	やや粗。0.5～3mmの石英・ 長石・チャート多量含。	竪穴4020炉
45	古式土師器	高杯	土坑4071		(7.4)	(11.4)	20	10YR8/2灰白色	密。0.5～2mmの石英・長石 少量含。	竪穴4020炉
46	古式土師器	器台	土坑4071		(4.0)	(15.5)	10	外面2.5YR6/4にぶい橙色 内面10YR8/4浅黄褐色	やや粗。0.5～2mmの石英・ 長石多量含。	竪穴4020炉
47	古式土師器	甕	土坑4070	(19.0)	(2.8)		5	7.5YR8/3浅黄褐色	密。0.5～2mmの石英・長石・ チャート含。	竪穴4020貯蔵穴
48	古式土師器	直口壺	土坑4070	8.5	15.7	2.0	100	外面7.5YR7/6橙色 内面10YR6/1褐灰色	密。0.5～2mmの石英・長石・ チャート含。	竪穴4020貯蔵穴
49	古式土師器	台付鉢	土坑4070		(2.6)	5.6	30	外面・内面N3/0暗灰色 断面N6/0灰色	密。0.5～1mmの石英・長石 少量含。	竪穴4020貯蔵穴
50	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(14.5)	(6.7)		30	10YR7/3にぶい黄褐色	密。1～3mmの石英・長石少 量含。	
51	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(15.4)	(8.8)		30	2.5Y6/2灰黄色	密。0.5～1mmの石英・長石・ チャート少量含。	
52	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(14.0)	(3.4)		5	7.5YR8/3浅黄褐色	密。1～3mmの石英・長石・ チャート少量含。	
53	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(15.2)	(4.0)		5	10YR8/2灰白色	やや粗。1～3mmの石英・長 石・チャート多量含。	
54	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土				10	外面・内面10YR3/1黒褐色 断面10YR4/3にぶい黄褐色	密。0.5～2mmの石英・長石 少量含。	生駒西麓産 庄内式甕
55	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(13.4)		3.0	40	外面10YR7/2にぶい黄褐色 内面10YR5/1褐灰色	密。0.5～3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
56	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(12.0)	(4.1)		5	7.5YR8/2灰白色	やや粗。0.5～2mmの石英・ 長石・チャート含。	
57	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(15.0)	(6.7)		30	外面・断面2.5YR5/6明赤褐 色 内面7.5YR4/1褐灰色	やや粗。0.5～3mmの石英・ 長石・チャート多量含。	
58	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(20.2)	(5.3)		5	外面5YR7/6橙色 内面10YR7/2にぶい黄褐色	密。0.5～1mmの石英・長石・ チャート含。	
59	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(16.0)	(7.0)		30	外面10YR8/2灰白色 内面N4/0灰色 断面10YR6/6明黄褐色	やや粗。0.5～3mmの石英・ 長石多量含。	
60	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(19.0)	(3.8)		5	7.5YR8/2灰白色	密。0.5～2mmの石英・長石・ チャート少量含。	
61	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(14.0)	(14.0)		40	外面5YR6/6橙色 内面5YR6/4にぶい橙色	密。0.5～2mmの石英・長石・ チャート含。	
62	古式土師器	甕	竪穴4020 埋土	(13.8)	(5.7)		5	2.5Y8/1灰白色	やや粗。0.5～2mmのチャ ート多量含。	
63	古式土師器	壺	竪穴4020 埋土		(3.1)	1.6	5	外面10YR8/3浅黄褐色 内面10YR6/1褐灰色	やや粗。1～3mmの石英・長 石・チャート多量含。	

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	胎土	備考
64	古式土師器	壺	竪穴4020埋土		(2.1)	3.9	5	外面・内面7.5YR7/4にぶい 橙色 断面10YR5/1褐灰色	密。0.5～1.5mmの石英・長石・チャート少量含。	
65	古式土師器	壺	竪穴4020埋土		(3.6)	4.2	10	外面10YR7/3にぶい黄橙色 内面10YR4/2灰黄褐色	密。1～2mmの石英・長石含。	
66	古式土師器	壺	竪穴4020埋土		(2.2)	3.8	5	外面10YR7/2にぶい黄橙色 内面10YR2/1黒色	やや粗。0.5～1mmの石英・長石・チャート多量含。	
67	古式土師器	壺	竪穴4020埋土		(4.6)	3.2	5	5YR6/6橙色	密。0.5～2mmの石英・長石少量、チャート多量含。	
68	古式土師器	有孔鉢	竪穴4020埋土		(4.0)	3.5	5	外面10YR8/1灰白色 内面7.5YR7/6橙色	密。0.5～2mmの石英・長石・チャートやや多量含。	
69	古式土師器	鉢	竪穴4020埋土		4.2	3.0	60	外面7.5YR8/4浅黄橙色 内面5YR7/6橙色	やや粗。0.5～1.5mmの石英・長石・チャート含。	
70	古式土師器	小型壺	竪穴4020埋土	(7.0)	6.9		30	外面N3/0暗灰色 内面2.5Y7/1灰白色	やや粗。1mm以下の石英・長石・チャート多量含。	
71	古式土師器	台付鉢	竪穴4020埋土		(4.9)	(8.4)	30	7.5YR8/1灰白色	粗。1～4mmの石英・長石・チャート多量含。	
72	古式土師器	高杯	竪穴4020埋土	(18.8)	(5.1)		30	外面7.5YR8/2灰白色 内面10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗。1～3mmの石英・長石少量、チャート多量含。	
73	古式土師器	高杯	竪穴4020埋土	(16.4)	(5.1)		杯部 40	10YR6/2灰黄褐色	やや粗。0.5～3mmの石英・長石・チャート多量含。	
74	古式土師器	高杯	竪穴4020埋土		(10.3)	(12.0)	20	10YR8/2灰白色	密。0.5～2mmの石英・長石多量含。	
75	古式土師器	高杯	竪穴4020埋土				25	2.5Y6/3にぶい黄色	やや粗。0.5～2mmの石英・長石多量含。	
76	古式土師器	器台	竪穴4020埋土		(5.2)	(12.2)	30	10YR8/2灰白色	やや粗。1～3mmの石英・長石少量、チャート多量含。	
77	須恵器	杯A	柱穴5050掘形	(15.2)	(3.2)		口縁 10	N7/0灰白色	精良。1～2mmの石英・長石含。	掘立柱建物2の柱穴
78	須恵器	杯A	柱穴5052掘形	(15.4)	(2.4)		口縁 10	5Y6/1灰色	精良。1～2mmの石英・長石少量含。	掘立柱建物2の柱穴
79	須恵器	杯A	ピット5079	17.6	5.1		50	10YR8/4浅黄橙色	精良。1～2mmの石英・長石少量含。	
80	須恵器	杯B	柱穴5036		(1.7)		15	5Y5/1灰色	密。1～2mmの石英・長石含。	
81	須恵器	平瓶	ピット5213				10	5YR7/1明褐灰色	1～5mmの石英・長石含。	
82	須恵器	壺	ピット5213		(3.1)		底部 25	N7/0灰白色	1mmの石英・長石含。黒色砂粒含。	
83	須恵器	杯蓋	土坑5130	14.0	5.4		75	外面2.5Y8/2～2.5Y7/1灰白色	密。黒色砂粒含。	
84	須恵器	杯蓋	土坑5130	(16.2)	4.5		70	10YR7/1灰白色～ 10YR5/1褐灰色	粗。1～2mmの石英・長石含。	
85	須恵器	杯身	土坑5130	(11.8)	(4.3)		20	N7/0灰白色	精良。黒色砂粒多い。1mmの石英・長石含。	
86	古式土師器	甕	竪穴5080埋土	(12.5)	(3.0)		口縁 10	7.5YR8/4浅黄橙色	1～2mmの石英・長石・チャート含。	
87	古式土師器	甕	竪穴5080埋土	(17.6)	(3.2)		口縁 10	10YR8/2灰白色	1～3mmの石英・長石・チャート含。	
88	古式土師器	壺	竪穴5080埋土	17.4	(5.2)		口縁 75	10YR8/4浅黄橙色	1～3mmの石英・長石・チャート含。	
89	古式土師器	壺	竪穴5080埋土				体部 5	10YR8/2灰白色	1～3mmの石英・長石・チャート多量含。	
90	古式土師器	小型丸底壺	竪穴5080埋土	11.0	10.0		50	7.5YR5/1～4/1褐灰色	密。1～2mmの石英・長石含。雲母含。	
91	古式土師器	小型丸底壺	竪穴5080埋土	9.6	9.2		100	2.5Y8/3淡黄色	1～5mmの石英・長石・チャート多量含。	
92	古式土師器	小型丸底壺	竪穴5080埋土	9.6	(6.5)		20	外面7.5YR8/4浅黄橙色 内面10YR6/1褐灰色	1～3mmの石英・長石・チャート含。	
93	古式土師器	器台	竪穴5080埋土				10	10YR8/2灰白色	1～2mmの石英・長石・チャート少量含。	
94	古式土師器	高杯	竪穴5080埋土	18.0	(6.4)		杯部 30	10YR8/2灰白色～5YR7/6 橙色	1～3mmの石英・長石・チャート多量含。雲母含。	
95	古式土師器	高杯	竪穴5080埋土	17.0	(4.5)		杯部 20	5YR7/6橙色	1～2mmの石英・長石・チャート含。	
96	古式土師器	高杯	竪穴5080埋土	16.0	(5.8)		杯部 75	10YR8/1灰白色	1～5mmの石英・長石・チャート含。	
97	古式土師器	高杯	竪穴5080埋土		(5.0)	12.6	20	7.5YR7/2明褐灰色	密。1～2mmの石英・長石・チャート少量含。	

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	胎土	備考
98	古式土師器	高杯	竪穴5080 埋土		(11.3)	14.6	脚部 90	7.5Y8/1灰白色～7.5Y8/4 浅黄橙色	1～3mmの石英・長石・チャ ート多量含。	
99	古式土師器	高杯	竪穴5080 埋土				30	2.5YR7/6橙色	1～3mmの石英・長石・チャ ート含。	
100	古式土師器	高杯	柱穴5178				脚部 30	10YR8/2灰白色～10YR3/1 黒褐色	1～2mmの石英・長石・チャ ート含。	竪穴5080主柱穴
101	古式土師器	甕	竪穴5140 埋土	12.6			20	7.5YR7/4にぶい橙色	1～4mmの石英・長石・チャ ート含。	
102	古式土師器	甕	竪穴5140 埋土	(15.2)	(3.5)		口縁 10	外面7.5YR8/3浅黄橙色 内面5Y8/1灰白色	1～2mmの石英・長石・チャ ート含。	
103	古式土師器	手焙形 土器	竪穴5170 床面		(7.7)		25	10YR8/2灰白色～10YR7/3 にぶい橙色	1～3mmの石英・長石・チャ ート含。	
104	古式土師器	壺	竪穴5170 床面				底部 100	10YR7/1灰白色～10YR5/1 褐灰色	1～2mmの石英・長石・チャ ート含。	
105	古式土師器	甕	竪穴5170 埋土	(17.8)			口縁 10	2.5YR7/6橙色	1～2mmの石英・長石・チャ ート含。	
106	古式土師器	壺	竪穴5170 埋土		(3.2)	(2.6)	底部 100	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面10YR8/2灰白色	1mmの石英・長石含。	
107	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(16.2)	(4.2)		口縁 10	10YR8/3浅黄橙色	粗。石英・長石・チャート多 量含。	
108	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(16.4)	(6.9)		口縁 20	10YR8/3～7.5YR8/4浅黄 橙色	粗。2～5mmの石英・長石・ チャート多量含。	
109	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(15.6)	(10.5)		15	10YR8/4浅黄橙色～ 7.5YR6/6橙色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート含。	
110	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(10.0)	(4.5)		口縁 20	10YR8/2灰白色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート多量含。	
111	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(15.0)	(7.5)		口縁 10	10YR8/3浅黄橙色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート、クサリレキ少量含。	
112	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(14.6)	(5.0)		口縁 15	7.5YR8/4浅黄橙色	密。1～3mmの石英・長石・ チャート含。	
113	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(16.4)	(3.5)		口縁 15	7.5YR7/4にぶい橙色～ 10YR8/2灰白色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート含。	
114	古式土師器	甕	竪穴6014 埋土	(19.4)	(9.0)		口縁 15	外面10YR8/3浅黄橙色	粗。1～4mmの石英・長石・ チャート、クサリレキ含。	
115	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土				15	外面5YR6/6橙色 内面7.5YR8/4浅黄橙色	密。1～2mmの石英・長石・ チャート、クサリレキ含。	
116	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土	(10.8)	(5.8)		口縁 20	10YR8/2灰白色	粗。1～4mmの石英・長石・ チャート多量含。	
117	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土	(12.8)	(6.0)		口縁 15	10YR8/2灰白色	粗。1～3mmの石英・長石・ チャート含。	
118	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土	(6.5)	6.8		20	10YR8/3浅黄橙色	やや粗。1～2mmの石英・長 石・チャート、クサリレキ少 量含。	
119	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土				10	10YR8/2灰白色	やや粗。1～3mmの石英・長 石・チャート含。	
120	古式土師器	壺	竪穴6014 埋土		(5.1)		80	10YR8/2灰白色	粗。1～5mmの石英・長石・ チャート多量含。	
121	古式土師器	小型 丸底壺	竪穴6014 埋土				体部 20	10YR8/3浅黄橙色	粗。1～2mmの石英・長石・ チャート多量含。	
122	古式土師器	小型 丸底壺	竪穴6014 埋土		(8.0)		体部 50	外面7.5YR6/3にぶい褐色 ～3/1黒褐色	密。1～2mmの石英・長石・ チャート含。雲母含。	
123	古式土師器	高杯	竪穴6014 埋土	(16.2)	(4.2)		杯部 15	10YR8/3浅黄橙色	やや粗。1～3mmの石英・長 石・チャート含。	
124	古式土師器	高杯	竪穴6014 埋土				杯部 10	10YR8/3～7.5YR8/3 浅黄橙色	やや粗。1～2mmの石英・長 石・チャート多量含。	
125	古式土師器	高杯	竪穴6014 埋土				脚部 30	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面7.5YR8/3浅黄橙色	やや粗。1～3mmの石英・長 石・チャート含。	
126	古式土師器	高杯	竪穴6014 埋土				脚部 25	10YR8/3浅黄橙色～ 10YR7/3にぶい黄橙色	粗。1～2mmの石英・長石・ チャート多量含。	
127	古式土師器	高杯	竪穴6014 埋土				脚部 50	10YR8/4浅黄橙色	やや粗。1～2mmの石英・長 石・チャート含。	
128	古式土師器	器台	竪穴6014 埋土				脚部 30	7.5Y8/2灰白色～8/4浅黄 橙色	密。0.5～2mmの石英・長石・ チャート少量含。クサリレキ 少量含。	
129	古式土師器	器台	竪穴6014 埋土				脚部 25	2.5Y7/3浅黄色～6/3にぶ い黄色	密。0.5～1mmの石英・長石・ チャート少量含。	

5. まとめ

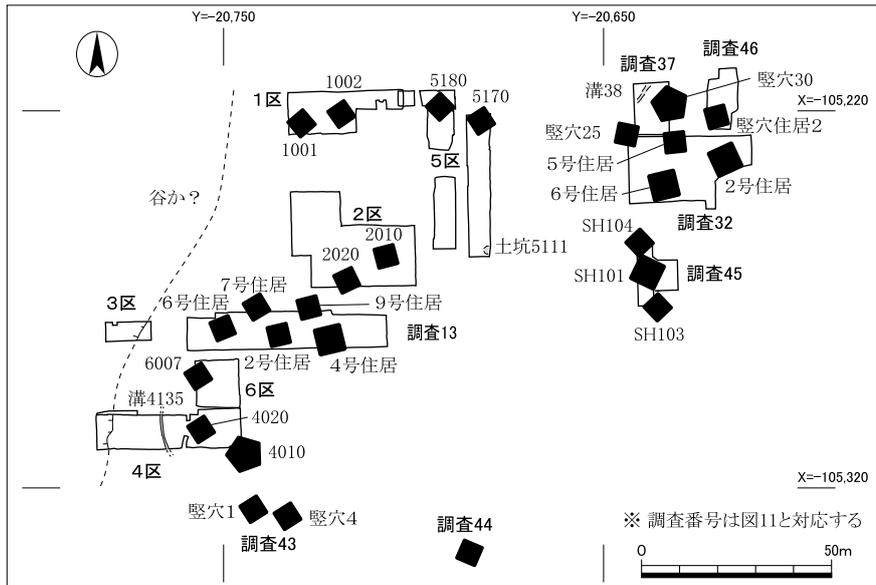
今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物13棟、古墳時代後期の竪穴建物3棟と掘立柱建物1棟、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物2棟など多数の遺構を検出することができた。調査範囲は東西、南北ともに約100mに及ぶが、既存建物や耕作によって後世の削平を受けていることを考慮しても、おおむね各調査区の遺構検出標高は67.5m前後であり、扇状地の中でも比較的安定した地盤が形成された場所であったため、多数の竪穴建物が築かれたと考えられる。一方、3区と4区西側は遺構検出密度が低かったが、ここでは他の調査区で遺構が多数検出された黄褐色砂泥の基盤層を切り込み、西に下がる砂礫層の堆積を確認した。今調査ではこの砂礫層からは遺物が出土せず、堆積時期を確認することはできなかったが、集落が形成された時期には後背湿地となり谷状に落ち込んでいた可能性が考えられる。キャンパス内西半で過去に実施された試掘調査（図11-40～42）では明確な遺構が確認されておらず、東側で多数の建物跡が見つかったこととは対照的な成果であり、やはり地形的な制約による可能性が高いと考えられる。第2章第2節周辺の調査でも触れたように、各時期ともに竪穴建物の分布に偏りがあることから、遺跡内にいくつかの谷状地形や自然流路があり、微高地が分断され、集落がいくつかのグループに分かれていたと想定できる。植物園北遺跡全体で見た場合には竪穴建物の出土数が多く、大規模集落とされてきたが、今後、遺跡内での微地形の変化、遺構密度、遺構の時期などを複合的に検討し、集落の消長を考察する必要がある。

その中で、今回の調査地とその西側では近年集中して調査が行われ、多数の竪穴建物が検出されており、一つの微高地上における集落の変遷を考える上で良好な資料が揃いつつあると考えられることから、建物の時期と配置についてまとめておきたい。

時期は大きく4時期に分けることができる。古墳時代前期初頭（庄内式併行期新段階¹⁾）、古墳時代前期後半（布留式新段階²⁾）、古墳時代後期、飛鳥時代から奈良時代（7世紀後半～8世紀）の4時期である。古い順に1期から4期とする。今回検出した中で最も古いと考えられる遺構は庄内式併行期古段階と考えられる1区の土坑1108であるが、それ以外の庄内式併行期の遺構は全て庄内式併行期でも新段階に属するものと考えられ、弥生時代に遡る遺構は検出していない。

1期 古墳時代前期初頭（図57上）この時期の遺構分布を見ると、竪穴建物が重複関係にあるのは調査45のSH101とSH104の1箇所のみで、それ以外はほぼ等間隔で建物が並ぶ。調査13の4号住居、調査32の2・6号住居、調査45のSH101などの一辺が7m前後ある大型建物の周囲に一辺が6m前後の中規模建物が展開し、方位の振れも類似して整然と配置されているように見える。また部分的な検出であるが、調査37の竪穴30と今調査4区の竪穴4010は平面形が五角形の大型建物と考えられ、それらが建物分布範囲の北東端と南西端に位置することも注目される。さらに、この時期の建物は方形に一段掘り下げた中央に円形の深い土坑を配置する貯蔵穴をもち、生駒西麓産の搬入庄内式甕を伴うものが多い。以上のように建物配置、内部構造、出土遺物から見てこれらの竪穴建物は同時並存した可能性が高い。一部の建物に拡張は認められるものの、建て替えは行わ

1期 古墳時代前期初頭(庄内式併行期)



2期 古墳時代前期後半(布留式新段階)

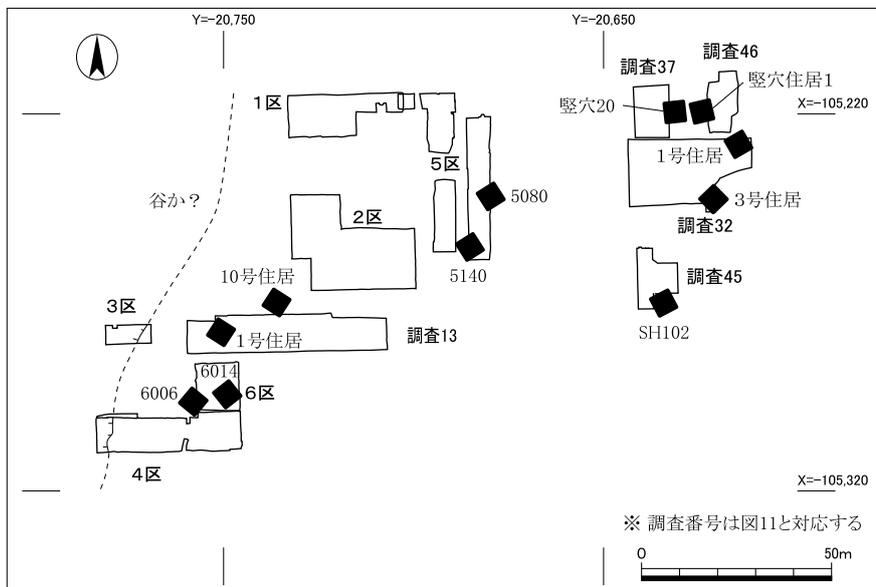
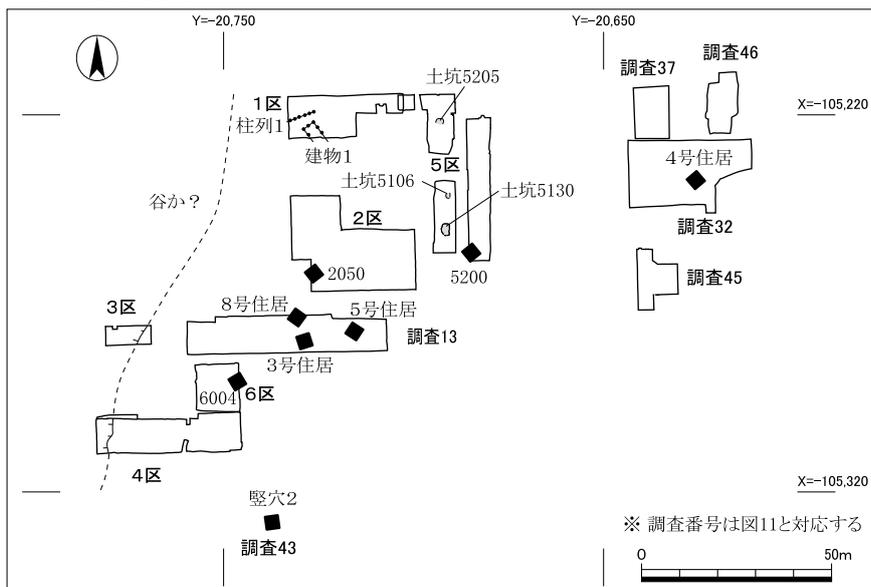


図57 遺構変遷図1 (1:2,000)

ず一度集落が放棄されたと考えられ、2区堅穴2020や4区堅穴4020などは、レンズ状に堆積した埋土から時期差のある布留式新段階の遺物が多量に出土しており、次に集落が営まれる布留式新段階まで窪地として残っていたと推測される。4区で検出した溝4135は堅穴建物分布域の西端に位置し、集落を区画する溝である可能性がある。

2期 古墳時代前期後半(図57下) この時期の遺構分布を見るとやはり堅穴建物は重複せず散らばる。大きさは全て一辺5~6mにおさまり、方位の振れも調査37の堅穴20を除いて大きく西に振れる点が共通し、同時並存の可能性が高い。この時期の堅穴建物の特徴としては古墳時代前期初頭のもののが隅丸方形であるのに対して角の丸みがとれて方形になるものが多くなる。この時期も堅穴建物の建て替えは行われず、続く古墳時代中期の遺構・遺物は出土していないことから、一旦集落が途絶えるものと考えられる。

3期 古墳時代後期



4期 飛鳥時代から奈良時代

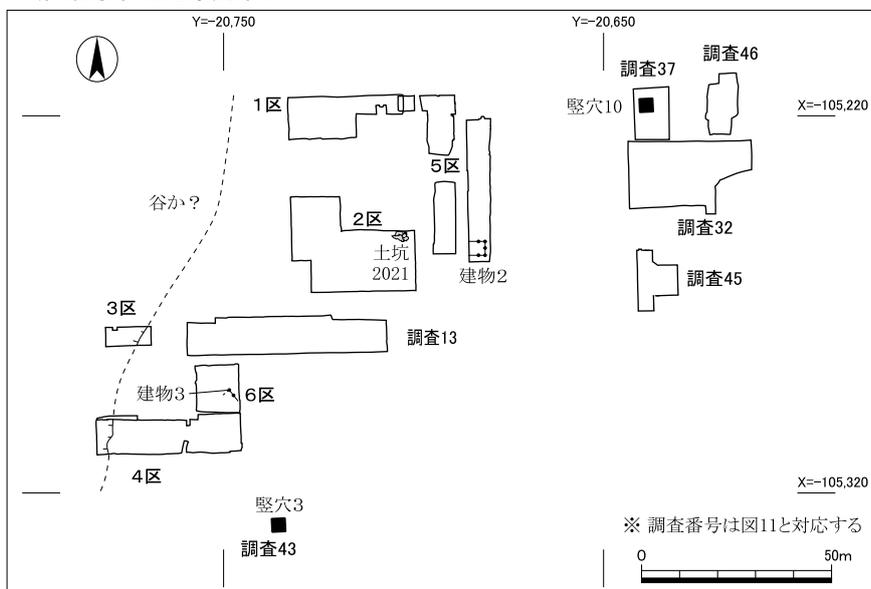


図58 遺構変遷図2 (1:2,000)

3期 古墳時代後期 (図58上) この時期の遺構分布は、堅穴建物が密集することなく散見され、掘立柱建物が共存するようになる。出土遺物から5世紀末から6世紀前葉の建物群と考えられる。建物方位は前時期までと同様、北に対して西に振れる。堅穴建物の一辺の長さは5m以下のものが多く、前代と比べて建物が小型化し、深さも浅くなる。作り付け竈が出現している時期であるが、今回の調査では検出していない。

4期 飛鳥時代から奈良時代 (図58下) 少数の堅穴建物と掘立柱建物が共存する。7世紀後半の飛鳥時代のものが一部含まれるが、ほぼ8世紀代の奈良時代の遺構である。他時期と比べると遺構密度が低く、土取穴と考えられる土坑2021が存在することなどから、集落の中心域ではなく、縁辺部分であると考えられる。この時期には、掘立柱建物、堅穴建物ともに正方位を志向するようになる。

以上、1期から4期までの建物変遷を概観した。

これまで、植物園北遺跡は多数の竪穴建物が重複して検出され、住居の建て替えを行いながら連続と集落が継続していたという印象が少なからずあったと思われる。しかし、今回検出した建物や出土遺物を1～4期に分けて見ると、各時期での建物の建て替えはなく、また各時期の間には土器型式では1～2段階の空白期間があり、連続するものではないことが明瞭となった。これが遺跡内、近距離での居住域の移動に起因するものか、さらに広範囲、他遺跡とも連動するものであるかが問題となるが、遺跡全体で見ても、今回出土のなかった布留式古段階、あるいは古墳時代中期の遺構・遺物の出土数は少なく、単純に遺跡内での近距離移動とは現状では考え難い。今後は周辺遺跡の動態も見据えた上で、植物園北遺跡の集落の性格を考えていく必要がある。

註

- 1) ここでは庄内式の指標となる小型器台や低脚高杯が出現しているものの庄内式甕が搬入される以前の段階を「庄内式併行期古段階」、搬入庄内式甕を伴い庄内式甕を模倣した在地産の庄内式甕が製作される段階を「庄内式併行期新段階」とする。古段階はおおむね第4章参考文献の高野2003年「佐山Ⅱ-1・2式」と吹田2006「山城Ⅵ・Ⅶ期」、新段階は「佐山Ⅱ-3・4式」と「山城Ⅷ期」に該当する。
- 2) ここでは体部球形の布留式系甕と小型器台・小型丸底鉢・小型丸底壺の精製器種が盛行する段階を「布留式古段階」、小型器台がほぼ消滅して小型丸底壺と布留式甕の器壁が厚くなるなどの粗製化が進んだ段階を「布留式新段階」とする。古段階は高野2003「佐山ⅢA式」、新段階は「佐山ⅢB式」におおむね該当する。

圖 版



1 1区全景（北西から）



2 竪穴建物1001（北西から）



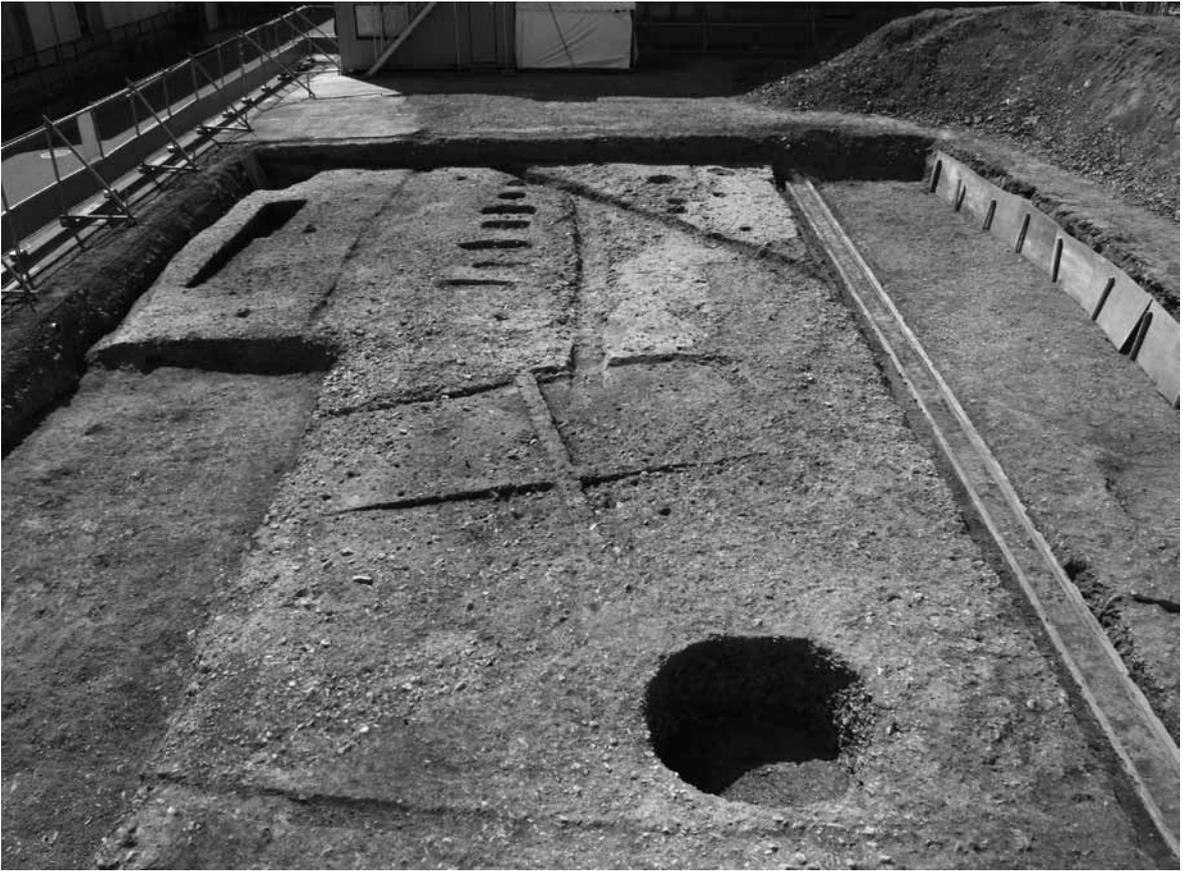
1 竪穴建物1002（北西から）



2 竪穴建物1002炉と貯蔵穴（北西から）



3 竪穴建物1002遺物出土状況（北東から）



1 2区東半全景、竪穴建物2010（東から）



2 竪穴建物2010貯蔵穴土坑2033（北から）



3 竪穴建物2010床面白色粘土（東から）



1 2区西半全景（東から）



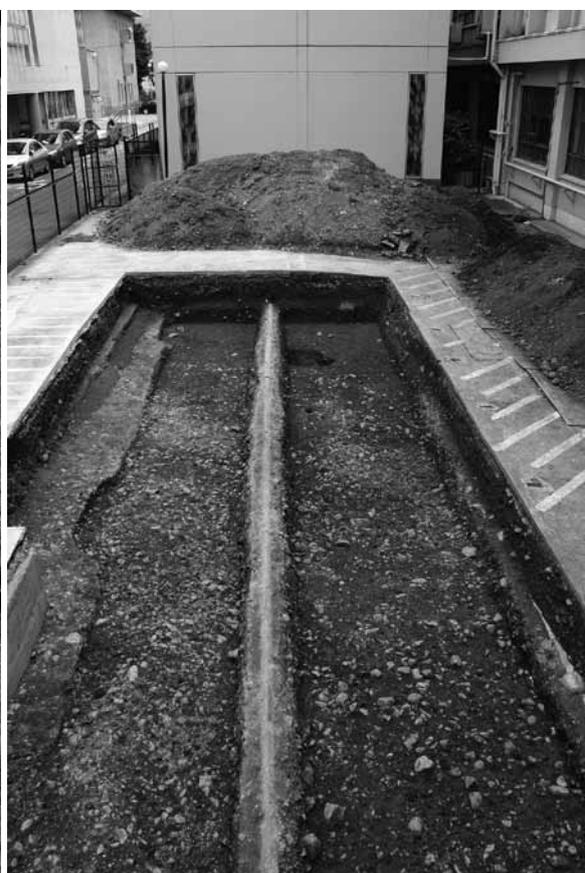
2 竪穴建物2050（西から）



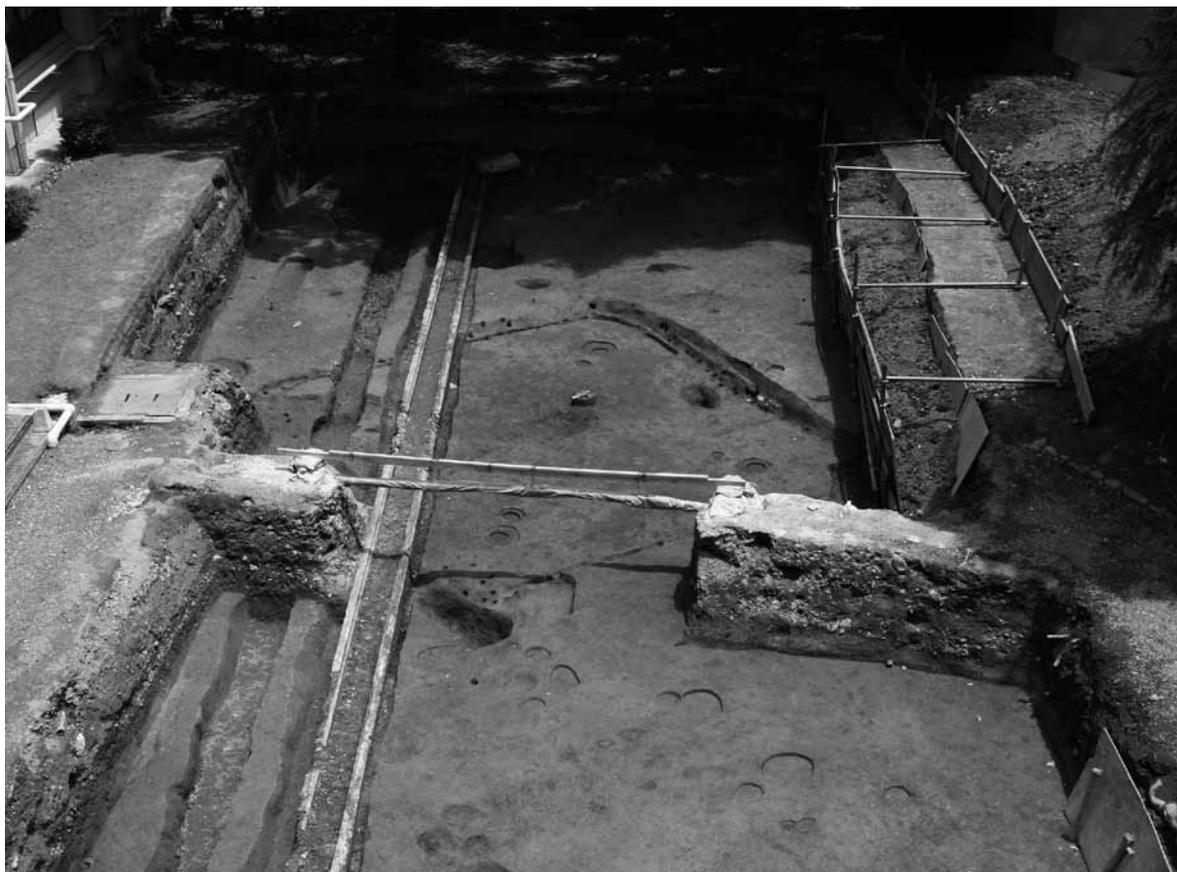
1 竪穴建物2020（北東から）



2 竪穴建物2020炭化材出土状況（東北東から）



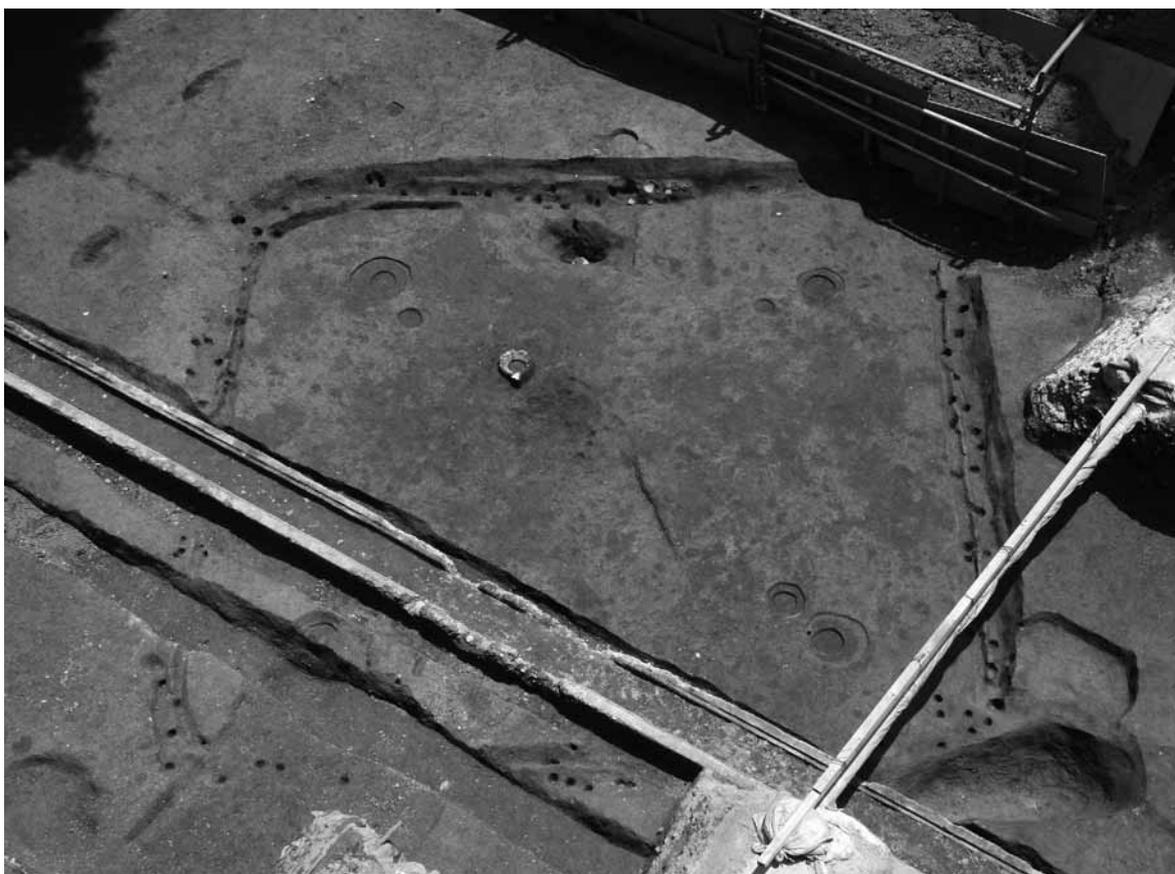
3 3区全景（西から）



1 4区東半全景（西から）



2 4区西半全景（東から）



1 竪穴建物4020（北西から）



2 竪穴建物4020貯蔵穴土坑4070土器出土状況
（北東から）



3 竪穴建物4010（北西から）



1 5-1区全景（北から）



2 掘立柱建物2（南から）



3 土坑5111（北北西から）



1 5-3区全景（北から）



2 5-3区南半柱穴群（西から）



3 土坑5106（北から）



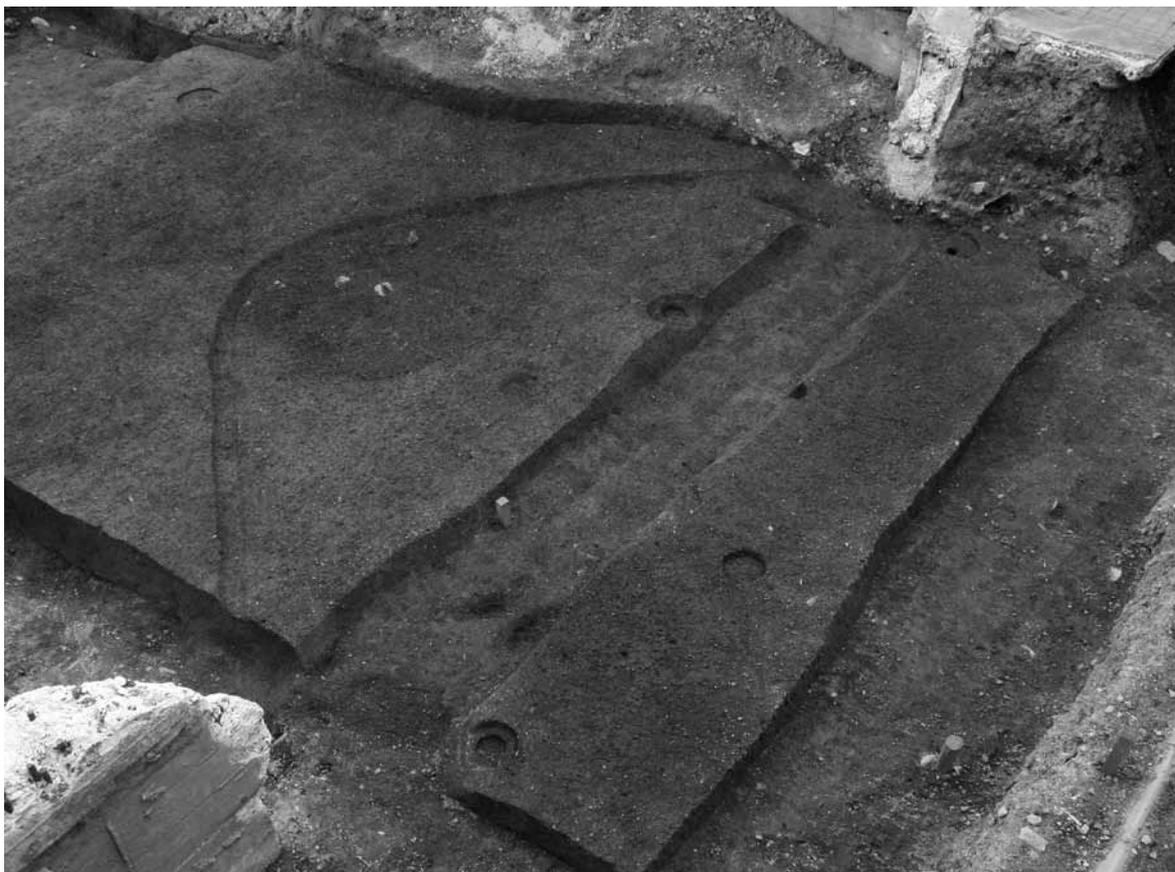
1 竪穴建物5080（北西から）



2 竪穴建物5080主柱穴5178（北西から）



3 竪穴建物5140・5200（南東から）



1 豎穴建物5180（北東から）



2 豎穴建物5170（北から）



3 豎穴建物5170床面土器出土状況（南東から）



1 6区全景（西から）



2 掘立柱建物3、竪穴建物6014（西から）



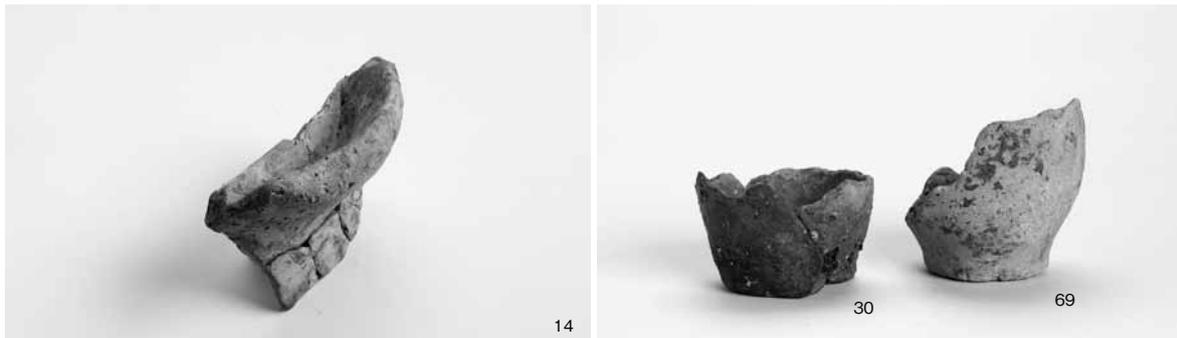
1 豎穴建物6006・6007（北西から）



2 豎穴建物6007炉土坑6010・焼土塊6013（北西から）



3 豎穴建物6004（北から）



1·2·4区出土土器



報 告 書 抄 録

ふりがな	しょくぶつえんきたいせき							
書名	植物園北遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-24							
編著者名	柏田有香・加納敬二・田中利津子・モンペティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区 しももみなみのがみ 下鴨南野々神 ちょういちばんちほか 町1番地他	26100	146	35度 03分 04秒	135度 46分 23秒	2011年3月 22日～2013 年3月1日	1,807m ²	学校整備 計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
植物園北遺跡	集落跡	古墳時代	建物、柱列、竪穴 建物、溝、柱穴、 土坑、ピット	古式土師器、土師器、 須恵器、石製品、金属		古墳時代前期の竪 穴建物、古墳時代 後期の竪穴建物と 掘立柱建物、飛鳥 時代から奈良時代 の掘立柱建物を検 出した。		
		奈良時代	建物、柱穴群、土 坑、ピット群	土師器、須恵器				
		平安時代	ピット	土師器、須恵器、緑釉 陶器				
		中世～近世	土坑	土師器、瓦質土器、焼 締陶器、施釉陶器、染 付、磁器、輸入陶磁器、 金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-24

植 物 園 北 遺 跡

発行日 2013年6月30日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961